
第七独立機動艦隊～神出鬼没!!米海軍の悲劇～

0 0 7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第七独立機動艦隊～神出鬼没！！米海軍の悲劇～

【Zコード】

N3128F

【作者名】

007

【あらすじ】

山本五十六が近衛文麿、豊田副武と共に完成させた独立機動艦隊。日本の科学力の総力を結集して完成させた艦隊は米海軍にデーモン艦隊と恐れられる。核兵器をも恐れぬその艦隊はまさに無敵艦隊。世界はとてつもない化け物に喧嘩を売ってしまった。

プロローグ（前書き）

ビックリするほど日本に有利ですが、ご了承ください。

プロローグ

昭和十七年一月八日。この日極秘の艦隊が呉軍港を出港した。

「ついにこの日がきましたね長官。」

「そうだな宇垣君。」

出港していく極秘艦隊を見送りながら山本五十六連合艦隊司令長官が宇垣参謀長に答えている。

「宇垣君。」

「はい。なんでしょう。黄金仮面と言われるよつて表情一つ変えずに答えた。

「彼らはこれから姿を現さず敵はおろか味方にも姿を知られてはいけない。悲しい事だな。」

「仕方ありませんよ長官。彼らはそれを承知でこの艦隊に志願したんですから。」

「うむ。そうだな。」

さてこの一人の話を聞いていると何が何だかわからないので読者の皆様は何じやこりや?と思いますが今一つお待ち頂きたい。

「長官。そろそろお時間です。」

「そうか。早く戻らないといけないな。何せ今私が見送った艦隊は海軍には存在するはずのない艦隊だからな。」

そう言つと2人は現連合艦隊旗艦『長門』へと戻つていった。

「確かに今日はあいつがくるんだな。」

「はい。そうです、そろそろ御見えになるはずですが……。」

コンコン。

「噂をすればなんとやらだな。」

山本が笑いながら言つた。

「そうですね。」

おおつ宇垣参謀長が笑つたぞ！

4ヶ月と23日ぶりだ。

「豊田副武海相。お連れしました。」

「うむ。入つてくれ。」

うん？

豊田が海相？ どうゆう事だこれは？
まあ続きをお読み下さい。

「長官、参謀長。お久し振りです。」

「久し振りだな。豊田。」山本が答える。

「確かに今日はあの艦隊の出港日だったと思いますが？」

「そうだ。あの艦隊は目覚めた。これからあの艦隊は神出鬼没だ。」

「そうですね。彼らが少しかわいそうですね。」

豊田が答える。

「まあ、仕方ない。そんな事を言えば何の為に近衛首相に頑張つて
もらつたか解らないよ。」

豊田が海相であり近衛まで総理とは。

読者の皆様は何が何だかだと思いますが今一つお待ち頂きたい。

「そうですね。思えばあの時から我々は戦つていきましたね。」

「そうだな。あの時からだな」

そう言つと山本と豊田は～あの時～へと思いをよせていた。

プロローグ（後書き）

この度はこのよつな小説をお読みくださいましてありがとうございます。
プロローグをお読み頂きましても何が何だかわからぬ
いと思いますので次回からあの艦隊の創設についての説明をさせて
頂きます。あとこの世界の状況についても

第1話 第七独立機動艦隊創設秘話前編（前書き）

第七独立機動艦隊創設についてと日本の政治状況について書きまし
た。

第1話 第七独立機動艦隊創設秘話前編

あの時。

山本、豊田の2人が思いを寄せている時。

あの時。それは昭和11年2月26日に起こった2・26事件がある時である。皇道派青年將校が起こした陸軍最大の汚点である。この事件はなんと天皇陛下自ら陸軍ではなく海軍を率いて反乱軍鎮圧をされたのである。

この事件をきっかけに天皇陛下の陸軍に対する信用は地に落ち海軍に対する信用は急激に上がった。

これにより岡田内閣総辞職の事態にたいし天皇陛下自ら近衛文麿公爵にたいして内閣組閣の大命を下したのである。

大命を受けた近衛は早速内閣の組閣を開始する。

近衛は最初、山本五十六を海相にしようと考へたが山本が拒否し変わりに豊田副武を海相にと山本が推薦した為に近衛は豊田を海相においた。その代わり山本は連合艦隊司令長官になる事を承諾した。そして問題の陸相だが陸相には栗林忠道が就任した栗林は陸軍のみに有りながら海軍の実力を評価し、次期大戦では海軍あつての陸軍だ。と就任演説で言つたほどの海軍派でありこれ以上の人選はないという事になつたこれにより昭和11年3月1日第一次近衛内閣が成立したのである。

その後近衛は軍の近代化を宣言ドクター・ヤギことハ木博士の研究チームに豊富な予算と人員を与えハ木アンテナの性能向上及び増産性能の向上を指示した。

これによりハムアンテナは格段に性能が向上し海軍の全艦船の標準装備となり対空・水上・射撃レーダーは世界最高の性能を持つており米、英共に技術提供を呼び掛けている。

これにたいし近衛はワンランク下の俗に言つモンキーバージョンの輸出を許可し代わりに大量生産技術の提供を米に、英には五億円の資本金を要求。

両国ともそれをすぐさま受け入れ米は、ボーアイニング・GM・フォード・グラマン等の大量生産技術を持つ企業に対し技術提供を大統領令で発表し日本の増産技術はますます向上した。

英も五億円を支払い技術を受け継いだ。この五億円があの艦隊創設に使われたのは賢明なる読者のかたならすぐ解つたはずです。そつ、英の五億円無くしてあの艦隊はなかつた。

昭和11年6月13日料亭『赤松』にて近衛首相・豊田海相・山本長官三人による極秘会談が行われた。

「首相。流石は首相です。ワンランクしたのレーダーを輸出してそれ以上の価値のある支援を引き出したんですから。流石ですよ。」豊田が近衛を讃えている。

「いやいや豊田君。そこまで言わないでくれ。あれは私の考えじゃないんだよ。山本君の考えなんだよ。」

「……そうだったんですか!? 私はてっきり首相が考えた事だったて思っていたんですが。」

「そうだよ。私は何も考えていないよ。全て山本君の考えだ。なあ

山本君。」

山本が照れ笑いをしながら頭をかいている。

「まあそういう事だ豊田。お前は俺が駐米武官としてアメリカにいたことは知っているな？」

「はい。確かにその時にベガスのカジノで大儲けしたと言つ話を聞いています。」 またしても山本が照れる。

「おいおい。昔の事だ。」 山本はそうゆうがこのベガスの話は本当にこの時の山本は日本の国家予算の3分の1を稼いだのであるから驚きだ。

現在その金は英の支援金と一緒に保管している。

もちろんその金がある艦隊に使われたのはいつまでもない。「ベガスの事はもとより俺はその時ベルトコンベアで大量に作られる車を見た。これを見て俺はこのままじゃ戦争になつた時にベルトコンベアを流れながらつくられる飛行機や戦車を想像してみた。そして思った、このままでは駄目だとな。」

「それで長官はワンランク下のレーダーを輸出してその米の大量生産技術を貰おうと思つた……。」

「そうだ。そして俺はあることを思い付いた。」

「長官。何ですかそれは！」

「うむ。総理には話したがお前にはまだ言つてなかつたな。俺は極秘艦隊を創ろうと思つたんだ。」

「極秘……艦隊ですか？」

「そうだ。俺がベガスで稼いだ金と英からもらつた五億円で独立機動艦隊と創つたのを創設しようと思つ」

「独立機動艦隊！？」

「そうだ。独立機動艦隊だ改大和級三隻と改信濃級三隻と防空重巡洋艦五隻と駆逐艦五隻と潜水艦三隻と輸送艦三十隻の艦隊だ。」

「長官……無理ですよ……そんな艦隊を造つたら我が国は破産してしまいます……。」「豊田よお。」

「はい。」

「国家というのは国力にあつた軍隊を保有するものなんだよ。」

「とゆう事は長官は我が国がそんな艦隊を保有出来るとお考えなん

ですか？」

「そうだ。できる。現にもう旅順で艦隊は建造中だ」豊田は口を開けたまま呆然とした顔で近衛・山本を見つめていた。

第1話 第七独立機動艦隊創設秘話前編（後書き）

次回遂に第七独立機動艦隊の全貌が！？

想お待ちしています。

「意見」「感

第2話 第七独立機動艦隊創設秘話後編（前書き）

1日に3話投稿……。 頑張りました。

み下さい

どうお楽し

第2話 第七独立機動艦隊創設秘話後編

昭和11年6月13日の極秘会談から1週間たつた6月20日近衛

首相・豊田海相・山本長官の3人は旅順にいた。

「首相・長官！…すごいです！…旅順でこんな艦隊が造られていたなんて。」

豊田は初めて遊園地にきた子供のようにはしゃいでいる。

「まあ、豊田君がはしゃぐのは無理もない。なあ山本君。」近衛が言つた。

「そうですね。首相、わたしも未だに信じられませんよ。言いだして本人がそなんですから1週間しか経っていない豊田は仕方ありませんね。」

今3人がいるのはちょうど旅順港のドックを見渡せる所にいる。そこには大艦隊が建造されていた。

「豊田君。技術者の説明を聞きに行こう。」

「はい！…」

こづして3人は技術者の説明を聞きに造船本部へ向かつた。

「牧野君説明してくれ。」山本が言つと牧野と言つ男が説明を始めた。

「それでは皆様お集まりのようですので説明を始めさせてもらいます。あつ私は牧野茂とあります。造船中佐です。よろしくお願ひします。」

と牧野が言つ

「それでは皆様お手元の資料をご覧ください。」

牧野が説明を始める。

「まず皆様には独立機動艦隊の主力となる改大和級と改信濃級の説明を始めさせてもらいます。」

「牧野君ちょっとといいかな？」

豊田が質問する。

「改大和級や改信濃級とあるが信濃級や大和級もないのになぜ改大和級や改信濃級を建造するんだ？」

豊田聞いた。そもそもどうう。この世界では大和級や信濃は建造されていないのだ。計画書はあるが近衛や山本により建造されなかつたのだ。

「ああその事なら私が答えよう。」

山本が説明を始めた。

「金の無駄使いつて事ですか？」

「そうだ無駄の説明をしていると時間がなくなるから割愛するが改大和級や改信濃級を造る方が何層倍も有効だという結論になつたんだよ。」

「何も割愛しなくても時間ならたっぷりあるんですからいいじゃないですか。」

「いや、それが作者が書くのがめんどくさいらしくて私にお前を説得してくれといわれたから勘弁してくれ。」

「そうですか。作者がいうなら仕方ないです。」

「ああ、牧野君。すまなかつた。説明を再開してくれないか。」

「はいわかりました。説明を再開します。まず改大和級について説明します。」

牧野が説明を再開した。

「改大和級は大和の発展拡大版です。全長330メートル・最大幅46メートル・満載排水量1230000トン・速力33ノット・主

砲 51 センチ 3 連装 3 基 9 門・副砲 25 センチ 3 連装 2 基 6 門・高角砲 15 センチ 連装 24 基 48 門・噴進砲 15 センチ 30 連装 6 基・対空機関砲 5 センチ 3 連装 60 基 180 門・乗員数 3100 名です。これを三隻建造します。」

「すごい。首相、長官！ 我が国はこのような艦を建造する事が出来るんですね」

「まだ驚くのは早いぞ豊田君まだ改信濃級の説明を受けてからだ。」

「それでは改信濃級の説明をさせて頂きます。改信濃級は信濃級の発展拡大版です。全長 310 メートル・最大幅 60 メートル・最大排水量 118000 トン・速力 33 ノット・高角砲 15 センチ 2 連装 40 基 80 門・噴進砲 15 センチ 30 連装 8 基・対空機関砲 5 センチ 3 連装 80 基 240 門・搭載機数 130 機です」

「すごい。これなら勝てますよ！ 首相・長官。」

「防空重巡洋艦は最上級を改装しています駆逐艦は雪風級というのを新造しています。」

「うむ。牧野君ありがとつ。この艦隊が完成すればどうなるか想像出来るだろう。」

山本がそうつぶやいた。

豊田は想像してみた、51 センチ砲を装備した改大和級が出撃すれば敵艦がどうなるか想像できた。

「この艦隊が早く完成してほしいな。」

近衛がそうつぶやくと山本と豊田は頷いた。

第七独立機動艦隊に配備される予定の全艦艇が完成するのは昭和 17 年の正月辺りだと牧野がいった。

第七独立機動艦隊が産声を挙げるのはまだまだになりそうだ……。

第2話 第七独立機動艦隊創設秘話後編（後書き）

改信濃級が戦艦か空母か悩んだ人がいたと思いますが空母でした。
この意見、この感想お待ちしています。

第七獨立機動艦隊編成表（前書き）

遂に第七独立機動艦隊完成！！！

第七独立機動艦隊編成表

第七独立機動艦隊

司令長官：小沢治三朗中將參謀長：草鹿龍之介少將

総旗艦・戦艦大和

戦艦武藏

戦艦信濃

機動群旗艦・空母大和改

空母武藏改

空母信濃改

防空重巡洋艦最上

防空重巡洋艦鳥海

防空重巡洋艦青葉

防空重巡洋艦松島

防空重巡洋艦高雄

駆逐艦雪風

駆逐艦谷風

駆逐艦初風

駆逐艦海風

駆逐艦山風

潜水艦伊一　一号

潜水艦三十隻

全艦が33ノットを出す事が出来る。

潜水艦は新開発のポンプ式噴流エンジンを採用した為にこのような速力ができる。輸送艦は対空噴進砲を装備している為にただの輸送艦だと思つて手を出すと酷い目にあつ。

全艦、今の日本で開発出来る最新最強の物を装備している。

空母搭載機

艦上戦闘機・陣風

艦上攻撃機・流星

艦上偵察機・彩雲

各空母の搭載機数

艦上戦闘機50機

艦上攻撃機40機

艦上偵察機40機

となつてゐる。

簡単に三機種の説明をする艦上戦闘機陣風

最大速度735キロ

実用上昇限度14500メートル

武装30ミリ機関砲2門

13ミリ機銃2門

航続距離7300キロ艦上攻撃機流星

最大速度610キロ

実用上昇限度9500メートル

武装12ミリ機銃2門

爆装800キロ爆弾

雷装800キロ長魚雷

航続距離7000キロ

艦上偵察機彩雲

最大速度850キロ

実用上昇限度1900メートル

航続距離8800キロこれらの機体は現在の日本の最高傑作機である。

しかし今現在これらの機体の改良型を開発中である。

第七独立機動艦隊編成表（後書き）

いや～1日4話はきついですね……。

皆様に相談なんですが最近
このような架空戦記小説は艦魂が流行っていますが、この小説はどうしたらしいか悩んでいます。

この状況を打破するため皆様の意見を聞きたいのでご協力いただければ幸いです。よろしくお願いします。

第3話 第七独立機動艦隊柱島集結（前書き）

艦魂が出るか、出ないか。本文をお読みください。

第3話 第七独立機動艦隊柱島集結

昭和17年1月11日大日本帝國軍港。

今日は遂に完成した、第七独立機動艦隊全艦が柱島に集結するという事で海軍関係者が勢揃いしている。

主要な人物を説明すると、内閣総理大臣近衛文麿

海軍大臣豊田副武

G F 司令長官山本五十六

海軍造船中佐牧野茂

G F 参謀長宇垣纏

そして第七独立機動艦隊司令長官に就任した

小沢治三郎中将

同じく同艦隊参謀長に就任した

草鹿龍之介少将

海軍の中枢ここにあり。といったところだ。

「おい小沢。この艦隊を頼んだぞ。」

山本が小沢に激を飛ばす。

「お任せ下さい。マレーの南遣艦隊よりも強力な艦隊を指揮出来るのでとても嬉しいです。」

うーん。鬼瓦の呼び名を持つ小沢が笑っていると何だかおかしな気分になるな。やっぱり小沢は笑わないほうがいいかも知れない。話は脱線するが作者も友達に笑わないほうが威厳がある、と言わわれたので最近友達の前で笑つた事がない。何の話だつたつけ？

そつそつ艦隊の話だつた。

「そうだ小沢。この艦隊は今の帝國の総力を注いで完成させた物だ。だがこの艦隊は海軍から独立した艦隊だ。全ての作戦はお前に一任するから頼んだぞ。」

「長官。もちろん分かっています。この艦隊は神出鬼没を信条とする艦隊であり味方にも秘匿するのも知っています。私はこの艦隊を

使って必ずや米太平洋艦隊を壊滅させてみせます。」小沢が急に真面目な顔になり真面目な事を言つたため全員我慢出来ず吹き出しました。

これには流石の小沢も照れてしまい顔を真つ赤にしている。それがまた面白いから全員が爆笑に包まれた。

さて吳軍港で山本達が笑つている時第七独立機動艦隊は怒号で溢れていた。なぜかと言つと艦長がどうせ一回きりの航海だからもう一度とこないだろ?と張り全くやる気がない。

まあ確かにもう一度とこない事は確かだがだからといってやる気がないのは困りものだ。艦長はいいが彼女達はこれが処女航海なんだからもう少しやる気を出してほしい。

事実怒号を言つているのは人間ではなく彼女達であった。「あのへボ艦長め!!殺してやる。」

「まあまあ落ち着いて。姉さん。一回きりの航海だからしかたないよ。」

「そんなに怒らないの。」それでここで説明すると。

艦長に怒りをぶつけているのが戦艦大和の艦魂。艦魂達の間では『早紀』と呼ばれている。

その早紀をなだめているのが戦艦信濃の艦魂『喜恵』そして最後になだめているのが戦艦武藏の艦魂『亞由美』である。

「くそつーあの野郎つーー！」

「はいはい。姉さんそこまで、亞由美姉さんが呆れてるわよ。」

「でも、喜恵。あんなへボ野郎が私達に乗つてるじたい犯罪よ。」

「ふん。何が犯罪よ。馬鹿らしい。」「亞由美ーーケンカ売つてゐる

の？いい度胸じゃない。」

「姉とケンカしている時間などない。」

「まあまあ一人共落ち着いて。今は柱島に着く事を第一に考えましょうよ。」

「……たしかに喜恵の言つとうづね。まずは柱島ね。亜由美。この勝負預けたわよ。」

「ふんっ！いつでもどうぞ。お待ちしています。」

その後早紀が亜由美に殴りかかった為に喜恵が慌てて仲裁に入った。

さて、遂に柱島に集結した第七独立機動艦隊。
彼女達はまだ誕生したばかりだ……。

第3話 第七独立機動艦隊柱島集結（後書き）

早紀「やつと登場出来たわね。」
作者「あつ早
紀様。」
「苦勞様です。」

早紀「何が」「苦勞様よ。亞
由美、喜恵こいつを捕まえなさい。」
二人「はいは
い。」
作者「おいつ。一人共なにをするんだよー。」

早紀「フフフ。」
作者「早紀様！なぜ鞭なんか持つてるん
ですかーー。」
早紀「楽しみましょーよ」
作者「いやだあーー。」

亞由美「あらり作者さん、かわいそう……。」

世界情勢解説（前書き）

この世界の情勢を書きました。

量が少ないのでご覧ください。

クセス数が1000人を越えました。

説を読んでいただきありがとうございます。

007。これからも頑張っていきます。

やはり一話の
あつ私事ですが先ほど総ア
私のような小

世界情勢解説

昭和11年6月23日。山本・近衛・豊田の3人が旅順視察を終え帰国してきた。

この辺りの世界・日本の情勢をいと。

7月5日に陸軍の東条英機が陸軍軍備増強を訴え首相官邸に大隊を率いて押し入るという事件が発生。

この事態にたいし山本は自ら陸戦隊を率いて東条大隊を鎮圧する事に成功。

東条は逮捕されたが数日後に自決しその他の関係者も自決した。

今回の事件の責任を取り陸相を辞任すると表明した栗林だが近衛の説得により辞任を撤回。

7月20日に第二次近衛内閣が成立した。

その後8月1日のベルリン五輪が無事に終わり11月7日には国会議事堂落成式が行われた。

その後日独防共協定が日本に流出したドイツ語の『わが闘争』により白紙になり日独同盟も白紙になつた。その後昭和12年7月7日日中戦争が始まった。北京、南京など中国東部を占領した日本は昭和13年2月10日蒋介石と講和条約を結び、蒋介石の国民党を中国の代表として認めた。

この世界の陸軍は世界列強に劣らない戦車を保有している。

その主たる物が五式重戦車である。主砲に100mm砲を装備し、最大装甲厚145mmもある立派な戦車を保有していた。

米からの大量生産技術を提供してもらつたおかげですでに生産数は千台を越えている。

数々の技術のおかげで史実とは比べものにならないくらい早く終わった日中戦争であった。

その後世界はつかの間の平和を享受していたが、昭和14年7月26日米国が日米通商航海条約の破棄を宣言し、8月23日にドイツ

とソ連が不可侵条約を結んだ事により世界は再び暗雲立ち込みはじめた。

そして9月1日ドイツ及びソ連が東西からポーランドに侵攻。

翌日、英・仏が宣戦布告した為に第一次世界大戦が勃発した。

その後ドイツはフランスへソ連はフィンランドとそれぞれ侵攻し両国を占領。

次にドイツはイギリス占領を目指すがバトル・オブ・ブリテンで敗北し矛先をソ連へと向けた。

これに対してソ連は日本と不可侵条約を結び対独戦への準備を始めた。

そして昭和16年6月22日ドイツがソ連に侵攻。

歐州戦線は泥沼化していった。

一方で日本というと昭和16年8月1日に米が対日石油輸出の禁止を発表。

日本政府は動搖した。何せ史実と違い何も悪い事はしていないのだから何が原因か解らない。

事態を重くみた近衛は自ら渡米しルーズベルトと会談したが何も聞けないままむなしく帰国した。

実はこの時の米国は昨年起きたドイツ飛行船『ヒンデンブルク』号の墜落事故がテロだったとして対独宣戦布告をおこなつたところであつたのだ。

そして11月30日米は『ハル・ノート』を提示、日本は12月1日御前會議で対米・英開戦を決意。12月8日米英に宣戦布告太平洋戦争が始まった。

この世界ではハワイ真珠湾空襲は行われず南雲艦隊は南方地帯支援に回っている。

そして昭和17年1月までには南方地帯全域に日章旗がはためいていた。

世界情勢解説（後書き）

早紀「ねえ。作者君」　　作者「はい。なんでしょうが早紀様。」

早紀「今日は私達の訓練航海の話じゃなかつたの？」

作者「うつー。そんな事言つても昭和11年6月20日から昭和17年1月11日にいきなり話がとんだら訳が解らないじゃないか！！だから書いたんじゃないか」早紀「誰に向かつてそんな言い方してるのはかしら」　作者「早紀様。田が笑つてないですよ。田が。」

早紀「フフフ。作者君もう一度ゆっくり調教してあげる。遠慮しないでいいよ」　そう言うと作者の襟を掴み個室へ連れていく。

作者「いやだあ～～。助けてえ。」

第4話 姉國の姫ご・姉妹団の密謀（漫書也）

「見くだせ。」

第4話 帝國の思い・合衆国の陰謀

さて第3話に世界情勢説明を入れさせていただきました所。

読者の方から無理やり感があるとのご指摘を頂きましたので、またしても解説を入れさせて頂きたいと思います。

戦闘などを期待される方には申し訳ありませんがお付き合いください。

さて我らが第七独立機動艦隊が無事に柱島に集結。 今回の話は山本達が第七独立機動艦隊総旗艦大和に乗り込んだ所から始まる。
「何という大きさだ。 まさに海に浮かぶ要塞だな。」 山本が感激の声をあげている。

確かに山本の言う通りだ、改大和級が三隻も浮かんでいるのだその奥には改信濃級が三隻。

海軍の秘宝にあります。

「しかし長官のアイデアは凄いですよ。 あれが空母に装備されてから離発着が容易になりました。」

「何。 ただ単に一本有れば便利かな?と思つただけだよ。 僕の思いつきを実現した牧野君の方がすごいよ」
「ありがとうございます。 長官。」

さて一人が何を話しているかといふと改信濃級の話である。

実は改信濃級は世界で初めてアングルド・デッキを装備した空母な

のである。

スチーム・カタパルトも四基装備している。

そして改大和級・改信濃級共に艦首にバルバス・バウとバウ・スラスターを装備している。

まさに最先端技術のオンパレードだ。

「小沢。これから完熟訓練だが手を抜くなよ。」

山本が言つ。

「もちろんです。長官。私はこの艦隊を率いて米太平洋艦隊を叩き潰す事が使命だて思つてるのでこの艦隊に配属されるものに早く慣れてほしいと思います」

うーん。この艦隊に配属される人間に早く慣れてもうわないとけないな。

このぶんだと小沢は完璧になるまで訓練を続けそうだ無理をしなければいいが。

「しかしわからんなあ。」

「近衛首相。何がですか？この艦隊が気に入らないんですか？」

豊田が近衛に答える。

「いやいや。この艦隊はとても氣に入ってるよ。私が悩んでるのは米国の態度なんだよ。」

「米国がどうかしたんですか？」

牧野が心配そうに聞く。

「開戦前の我が帝國と米国の関係について考えていたんだよ。」

「続きが気になりますね」

山本が訪ねる。

「我が帝國が米国と戦争になる前に米国が通商航海条約の破棄を伝えてきたのを覚えているか?」

「はい。覚えてます。あの知らせには驚きました」

山本が答える。

「そうだろう。だが私は覚悟していた。」

「覚悟といいますと?」

牧野が訪ねる。

「国際連盟の理事国が戦争をしたのだ。それなりの覚悟はあつただ
るわ。」

宇垣が答えた。

「そうだ。宇垣君の言つた通りだ通商航海条約の破棄は仕方ないと
思った。」

近衛は続ける。

「しかし対日石油輸出の禁止までは予想していなかつたよ。」

近衛はもう笑うしかないと言つて笑つている。

「確かにそうですね。」

山本が眞面目に考えていろそれを見て全員が考えはじめた。

「米国はそんなに我が帝國と戦争がしたかつたんですね。」

小沢が言つた。

「解らん。昔ならわかるが今となつてはこの第七独立機動艦隊があるんだぞ。まあ米国は知らないと思うがな。」

山本が答える。

「まあいい。私が変な事を言つたからいけなかつた。もうやめようじゃないか。始まつたものは仕方ない今はどつ終わらすかだ。」

近衛がなだめるように言つ

「確かにそうですね。もつ過ぎた事に悩んでいてはいけませんね。」

牧野が言つ。

「やうだ。牧野君の言つとうりだ。それじゃあ小沢。完熟訓練に励めよ。」

「お任せ下さい。」

小沢が答えた。

こうして小沢・草鹿以外はそれぞれ帰路に着いた。

さて山本達の会話を聞いていても米国の考えはわからなかつたがそこはそれ、読者の皆様にはわかるよつてしますよ。

えつ？どうするかつて。そこは米国のトップの会話を聞きに行くんですよ。

「ん？誰か呼んだか？」

「いいえ。大統領。誰も呼んでませんよ。」

「そうか。それならいいがな。しかし読めば読むほど腹立たしい。この報告書は本当なのか？」

「本当です。大統領。フィリピンが南雲の艦隊の奇襲を受け壊滅しマッカーサーも戦死しました。フィリピンはもうすぐ陥落します」「何といつことだ。悪夢だ。それよりハワイの再建は進んでいるだろうな？」

「はい。順調です。夏頃にはハワイは再建完了です。そして秋頃には新造艦がハワイに集結します。」

「よし。順調だな。」

さて何がハワイの再建かと云ふこの世界のハワイは日本軍ではなく天災により壊滅した。

ダイヤモンドヘッドの噴火によりハワイ及び太平洋艦隊は壊滅した。死火山と思われていたダイヤモンドヘッドが噴火したのだ。

これにより米海軍はエセックス級空母・アイオワ級戦艦・モンタナ級戦艦がいち早く登場する事になった。

この世界ではハワイ真珠湾空襲がなかつたから未だに米海軍は大艦

巨砲主義である。

「ところで、ハル。」

「はい。なんでしょうか？ 大統領。」

「マーシャルやキングはドイツはまだしも日本とは戦争はしないで良かつたんじやないといつていたが君はどうなんだ？」

「……。大統領閣下。私もドイツはまだしも日本とはちよつと。」

「そうか……。君もか。」

ルーズベルトは悲しそうにつぶやいた。

「確かにそうだな。通商航海条約の破棄と対日石油輸出の禁止の理由は少し無理がありすぎたな。」

「確かにそうだな。通商航海条約の破棄と対日石油輸出の禁止の理由は少し無理がありすぎたな。」

「そうだな。しかしあう後戻り出来ない。何が何でもこの戦争に勝つてやる。」

「まあまあ大統領閣下。落ち着いて下さー。お体に障ります。」

「そうだな。それよりハル。ヒンデンブルクの実行犯は始末したか？」

「はい。大統領。FBIにいたといつ記録も消しました。これで安心です。」

「よし。それでいい。我が国はもう後戻り出来ない。国民には頑張

つてもらわないとな。」

「しかし、『リメンバー・フィリピン』と言ごましてもまだ国民の三分の一はまだ戦争を認めていません」
「まあ。いつかわかつてくれるさ。」

日本、アメリカそれぞれの思いが交差する太平洋戦争この戦争という大きな渦に巻き込まれていく人間と艦魂。

なぜ戦うのか?
誰を守るのか?
何を得るのか?
等々さまざま思いを持つて人間と艦魂は戦つしていく勝のはじりだ?

第4話 帝國の思ひ・合衆国の陰謀（後書き）

作者「ふう。今日はゆっくり説明出来ますね。何せ今日は早紀様や亞由美様も貴恵様も出ませんからね。今回は鞭でしばかれる事も調教される事もありませんから。」

良かつたよかったです。今日は伊東参謀長及び草薙先生から「指摘」がありましたから全てをひっくりめた説明とさせていただきました。

艦魂や戦闘などは次回からだと思います。

これからもよろしくお願いします。
「意見」「感想
お待ちしております。」

第5話 完熟訓練前編（前書き）

完熟訓練と書きましたから完熟訓練と思いますが詳しくは次回からです。本当に申し訳ありません。ご了承ください。

第5話 完熟訓練前編

昭和17年1月12日

この日から第七独立機動艦隊は完熟訓練に入った。

山本長官から11月8日に出撃するからそれまでひたすら訓練を続けると言われたので小沢は約10か月に及ぶ訓練計画を立てた。

「草鹿。果たして間に合つだらうか?」

小沢が草鹿に聞いてみた。

「どうですかね。まあ10か月もありますからじうになると思いまますが。」

「そうだな。10か月もあればなるよつにはなるだろ?」

小沢が笑つた。

「わつですよ。長官も心配し過ぎですよ。」

二人が笑つてゐる。

「全く長官と参謀長といつ役職にあるんだからしゃきっとしなさいよ。」

「おおつ!大和じゃないか!…じうしたなんだ?」

お忘れの方がいるかもしれないで説明させてもらつと彼女は戦艦大和の艦魂です。(早紀と呼べるのは艦魂同士だけである。作者は

特別に許可された。)

「どうしたじゃないわよ。あんなひよりー達は厳しく教育してよね。

「

「わかつているよ。大和。安心してくれ。今はひよりーでも10か月後には熟練者にしてみせるよ。」

「ふんつ。それならいいけど。頼んだわよ。」

それだけ言つと大和（早紀）は艦橋を出ていった。

「ふう〜。困ったものだ

「この艦の艦魂ですか？」

草鹿が尋ねる。

「そうなんだ。あいつはいつもシンシンしてこる。どうしたものか。」

「そうなんですか。私も艦魂が見えればいいんですが

「まあそう落ち込むな。いつか君にも見えるよ。」

小沢はそう草鹿に言うと長官室に入つていった。

さてここで現在の第七独立機動艦隊の状況を説明すると沖縄へ向けて20ノットで進撃中である。

沖縄に着いたら燃料を補給してから硫黄島に向かえと指示がでていた。

なぜ最初から硫黄島に行かないかと云うと訓練時間を増やす為であ

る。

まあ沖縄に寄つても大して変わらないと思つがまあ一分一秒でも多い方がいいといつ事だらう。

さてその頃大和の会議室では会議が始まるとしていたが、まだ始まつてない。

「全く。眞面目も情けないわね。何がなんとかなるよ。しゃせりとしなせりよ。」

わざわざから愚痴ばっかり言つてこるのは早紀だ。

「はいはい。もう解つたから。」

「同じ事ばかり。」

亜由美と貴恵が早紀に注意している。

「解つたわよ。もう言わないから白い皿でみないで」

早紀が素直に謝罪している

「それはそうと他の子達はどうしたの?」

早紀が貴恵に聞く。

「やうやくくるんじゃないかなあ。」

貴恵が腕時計を見ながら答えた。

「ふーん。じゃあ遅刻したんだからお仕置をしないとね。特に由美には。」

早紀が興奮している。

「姉ちゃん。 パダレ垂れてるわよ。」

「へへへ。 可愛がつてあげる。」

貴恵の話も聞こえないみたいだ。

「「め～ん。 遅れちゃって。 怒らないでね。」

さて説明しよう。

彼女が空母大和改の艦魂である由香である。

その他の艦魂は

武蔵改、綾夏

信濃改、理華

最上、望

鳥海、愛美

青葉、裕香

松島、志保

高雄、千穂

雪風、由美

谷風、亜紀

初風、美紀

山風、美香

海風、渚

伊一、舞

伊一、乱
三、華

である。

「やれやれ。遅れるなら遅れるつて連絡してよね。ほつれん草よ。」

亜由美が怒っている。

「ほつれん草? 瞥知つてゐる。」

由香が眞に聞いている。

「報告、連絡、相談。これは常識ですよ……それでも帝國海軍の艦
魂かつ……」

亜由美がぶちギレた。

その頃早紀はとまつと由美を連れて会議室を飛び出していった。

「まあまあ。姉さん。もつ遅刻した事はいいから会議にこじまじょつ
よ。ね。」

喜恵が亜由美に慰めるよつて言つた。

「やうね。妹にめんじて許してあげるわ。」

「それじゃあ会議を始めましょ。」

喜恵が眞に言い聞かせる。

「つむ。それでは会議を始める。全員席に付け。」

亜由美はやうにまづと席に着いた。

「さて、全員揃つたな。」

「待つてください、まだ由美が帰還していません。」

「くつ。そうだった。……まあ、良いだろつ。1人大丈夫だ。」

何が大丈夫かわからないがとにかく会議が始まりそうだ。

「それではまず現在の行動日程について説明を開始する。」

亜由美が説明を始めた。

「本日から我が艦隊は10か月に及ぶ短期集中型訓練を始める。それに関するお前達には各艦の人員に対してもう一ついる奴がいたら制裁を加えてもらいたい」

亜由美が続ける。

「10か月で完璧に仕上げなければいけないから各員全力を挙げて
かかれつ！！！」

「了解つー！」

「総員解散。」

亜由美の号令により全員自分の艦に戻つていった。

そしてその頃早紀達はと言つと……

「フフフ。由美。もつと氣持ちよくしてやる。」

「あつ…………そー…………いー…………もつと…………」

見なかつた事にしよつ。

第5話 完熟訓練前編（後書き）

あつそれから皆さんにじこ報告です。

7はこの度極上艦魂会に加入いたしました。

先輩である黒鉄元帥、伊東參謀長、零戦先生、火星明楽先生、一二等

海士長先生、の足を引っ張らないよう頑張らせていただきます。

これからもよろしくお願いします。

わたくし〇〇

第6話 完熟訓練後編（前書き）

皆さん。初めての戦闘シーンです。

「」 覧ください。

第6話 完熟訓練後編

さてさて昭和17年1月13日。

この日から本格的な訓練が始まった。

硫黄島に未明に到着した我らが第七独立機動艦隊。

小沢の号令と共に訓練が始まつた。

「さて。今から訓練が始まるが大丈夫だろ？」

小沢が心配している。

「大丈夫ですよ。長官。大和の艦魂が言つてたじやないですか。さ
ぼつている輩がいたら制裁を加えると」
草鹿が言つ。

「そりだな。あいつらがどうにかしてくれるだろ？」

「そうですよ。今は訓練に集中しましょ？」

さてここで今回の訓練目的を言つと戦艦群と空母群に分かれての訓
練となつてゐる。

戦艦群はひたすら射撃訓練に励み、空母群は離着陸の訓練及び編隊
飛行の訓練に励む事になつてゐる。

「しかしあれだな。標的はまだか？」

「後5分程で来ると思いますが。」

今回の戦艦群の訓練の為に海軍は実物大の米戦艦のハリボテを作り、駆逐艦に曳航させ、それに向かって射撃をする訳だ。

今回の訓練は昨年末に完成した『一八式射撃レーダー』の評価試験も兼ねている
正式名に外国語が使われているようにこの世界の日本は英語は禁止されていない。

昔、故東条英機が
「適性語は禁止にし。」と言つたが、近衛首相が
「敵の言葉も知らずに戦争が出来るか！」

といった為に禁止にはならなかつた。

その為海軍では今のところ自由科目になつてゐるが後数年もすれば
英語は必修科目になるだろう。

「戦術情報集中室から連絡です。30海里前方に駆逐艦見ゆ。です。」

艦橋に連絡がはいつた。

「よし。主砲発射用意。遅れてきた罰だ。盛大に脅かしてやれ
さて、戦術情報集中室はと言つと現代でいうICOである。

現在大日本帝國海軍の全艦にはこの戦術情報集中室は標準装備となつてゐる。

「やつとこの時が来たわね。」

「おお。大和。楽しみだな。」

「ふんっ！そんな事言はずに早く撃たせなさい。」

「はいはい。怖い怖い。」

小沢が笑いながら言つている。

「主砲発射用意。」

小沢の声が響きわたる。

「主砲発射用意。」

参謀達が復唱していく。

あつ。言い忘れたが大和級全艦には主砲砲弾の全自动装填装置が装備されている。

「主砲発射つ！！！」

ドグワアアアアアアン！！！！

凄まじい音と共に遂に大和が咆哮した。

「報告します。駆逐艦村雨が曳航していた米戦艦のハリボテに全弾命中しました。結果から言うと米戦艦のハリボテは消滅したそうです。」

「何つ！？消滅しただと？本当か？」

小沢が驚いている。

「はい。木つ端微塵です。ほとんど欠片が残つていよいよです。
それと駆逐艦村雨の艦長、渡辺中佐から発射するなら連絡してください
さいよ、と言つておりました。」

「そうか。流石に私も驚いているから後で私から謝罪しておく。」

小沢が素直な気持ちを伝える。

「大和。お前の主砲の威力は恐ろしいな。」

「私も驚いてるわよ。」

大和（早紀）が自分の主砲の威力に驚いている。

「これから忙しいぞ。」

小沢が全員に言った。

これから11月まで第七独立機動艦隊は24時間戦えますか？と言
わんばかりに訓練に励んだ。

これにより11月には恐るべき熟度になっていた。
さて11月5日。

この日は第七独立機動艦隊にとって記念すべき日になつた。

えつ。何が記念日かつて？それは読めばわかります。

「さて。今日はこれくらいでいいだろ。」

小沢が言った。

「よし。呉に帰還するぞ」「やつと終わつた。もつクタクタだよ。」

「おい。大和。お前は何もしてないじゃないか。」

小沢が呆れたように言つ。

「長官も命令するだけだから何もしてないじゃないですか。」

大和（早紀）が言つ。

「まあそっだが。」

小沢が照れでいる。

「ハハハ。」

艦橋が笑いに包まれた。

「長官。艦首バルバス・バウのソナーが右舷、30海里に潜水艦を捕らえました。いかがしましょう。」

「ほつておけ。この艦隊のどの艦も、魚雷の一発や二発ぐらい命中しても大丈夫だ。ただし、魚雷を射つたら反撃だ。」

「了解しました。」

確かに小沢の言う通りだ。この大和級（大和級が設計図だけだったので改大和級が正式な大和級になつた。信濃級も同じである。）は防水区画が四百トンまで細分化している。

それだけではなく、外部装甲のすぐ内側にゴムを注入した層を設け爆発時の衝撃を吸収するのだ。

そのまた内側にはスポンジの層を造り、浸水を吸収して水圧から隔壁を防御し浮力を増大させる。

水中弾の対策には喫水線下の装甲の傾斜角を工夫して爆圧を減殺する。

重装甲に対する浮力の問題だが、史実の大和級の煙突上部や甲板面に使つた『蜂の巣鋼板』を応用して何層にも平板鋼にサンドイッチすれば半分程度の重量で同じ強度が得られる。

穴の直径を一五ミリにすれば前後を挟む鋼板は一ミリで十分だという実験結果を得ていた。

そして十分な浮力を得るため『大和』を拡大、発展させて艦幅を十分に取りバルジを設け。

速力が落ちるぶんタービンを増やした結果三三ノットの速力を得ら

れたのだ。

「おひつ……なんて大きさだ。見てみろよバーク少尉」

「ＺＯＷ！——オーガン艦長。あの馬鹿でかいのを雷撃しましょう。」

「もちろんだ！日本の対潜哨戒技術は遅れてるからな絶好のカモだ！――」

さてこの間抜けな潜水艦を『シーウルフ』といつ。

誠にもつてかわいそуд、彼らは日本の対潜哨戒技術が遅れていると言つたが実は日本の方が上であり小沢がほつておいたと聞いたら彼らは怒り狂つただろう。

「よし、魚雷発射用意。」

「前部発射管一番二番魚雷装填。」

「発射管開け。」

「魚雷準備よし。」

「発射装置異常なし。」

「発射。」

「右舷より魚雷接近。一本です。」

「進路そのまま。前進。」

「了解。」

小沢が迷わず命令した。

ドンッ！

わずかにだが大和が揺れた。

「被害知らせよつ！」

「右舷中央に魚雷一本命中しました。しかし被害らしきものなし。わずかにへこんだだけです。」

「よし。流石は大和だ。大和怪我はないか？」

「もちろんよ。ちょっととかゆかったぐら」よ。」

大和（早紀）が笑いながら答える。

めっちゃかわいい！！！

さてその頃『シーウルフ』は何を思っていたか。

「OH! MY GOD!! 魚雷を一本もくらしながら。モンスターめつ……」

……混乱していた。

「よし。黛砲術長。主砲射撃で沈めてやれ。」

「了解。」

「砲弾には四式弾を使用します。」

「わかった。」

「主砲発射。」

「発射つ！」

「ドグワアアアアアン！…！」

「ううつー？…………敵戦艦からの主砲射撃です。」

「ドドオオオオオオン！…！」

「わわつ！…！」

「なんだ。」

「敵戦艦からの主砲射撃です。ソナー員が鼓膜をやられました。」

「直撃か！？」

「いいえ。それが一メートル以上はあつたみたいです。」

「艦長つーー方向舵が効きませんつーーそれに排水ポンプが作動しません。修復不能。」

「直撃でもないのに海中の潜水艦にこれだけのつーーそんなつーーそんな戦艦があつてたまるかーーつーーゴグアーーーー！」

「敵潛。撃沈。」

「あつけないわね。全く
大和（早紀）が言った。

「そうだな。」

小沢が答えた。

「さて帰るか。」

こつして第七独立機動艦隊の初めての戦闘は終わった

第6話 完熟訓練後編（後書き）

初めての戦闘シーンでしたがどうでしたか？

余りにも一方

的でしたので面白みはなかつたと思いますがすいません。

次回は第七独立機動艦隊の出航前の宴会を書こうと思います。

次回は艦魂中心ですのでお楽しみ。

第7話 出撃前の大宴会（前書き）

艦魂中心に書いてみました。期待ください。
的に戦闘が始まります。

次回から本格

第7話 出撃前の大宴会

昭和17年11月7日、この日は第七独立機動艦隊の出撃前夜といふことで盛大に宴会が開かれていた。

「まあ有賀も飲め。」

小沢が有賀艦長に酒を注いでいる。

「ありがとうございます。閣下。」

有賀が礼を言いながら酒を飲んでいる。

隣では草鹿参謀長と黛砲術長が刺身に手を出している。

「皆、いよいよ明日が出航だ。これまでの訓練に良く耐えてくれた。だから今日は盛大に飲んでくれ。」

小沢が全員に言った。

「長官の言つとつだ。皆、今日飲まねば何の為に訓練に励んできたかわからぬからな。」

黛が笑いながら言った。

「まあ飲め。」

有賀が黛に酒を注ぎながら言った。

その時小沢はふと思いついた。

(確か大和達も宴会をしているだらうな。あいつらも楽しんでいるだらう。)

小沢はそつ思いながら酒を飲んでいた。

その頃大和達はといづと。

「 ハビエ。由美は可愛いわね。」

酔っていた。

「 ちよっと。姉さん、大丈夫?」

喜恵が心配している。

「 情けない。それくらいで酔うなんて。」

亞由美がそつ言いながら新しく一升瓶を開けていた。
よく見ると後ろに一升瓶が数本転がっている。

「 しかし、由美は可愛いわね。今からいい事しない?」

早紀が由美の耳元で囁いている。

「 あつ……早紀……司令……ダメ……です。」

由美が辛うじて答えていた。

「」の分だと早紀は由美の弱点を熟知している見たいだ。

「そんな事を言ひた・・・や・・・した事を皆口直りわよ。」

「……わつまつわやつてるんですかべ。」

「ちよっと。姉さん。そんな事したの?」

喜恵が聞く。

「えつ?何の事。」

早紀が聞く。

「どうやら早紀は自分が何を言つたか覚えていなこよつだ。」

「何つて、・・・や・・・した事。」

「あら。そんな事言つたの私。ハハハ」

早紀が笑つてゐる。

「笑つてゐる場合じやない。艦隊司令ともあらう御方が部下に手を
出すなんて。何を考へてゐるの。」

喜恵が怒つてゐる。

「何を考へてゐる。つて言われても。まあ美味しいいただきました
よ。」

「なつ！？美味しくいただきました！？もしかして」
喜恵が心配そうに聞く。

「ええそ'つよ。美味しくいただきました。」

この一人の会話に清純な舞、乱、華が鼻血を出しながら倒れた。

「ちよつと。あなた達大丈夫？」

亞紀、美紀、美香、渚が慌てて助け起こす。
「あの三人には刺激が強すぎたかしら？」

綾夏が言った。

「ちよつと。綾夏。それはびじゅう意味なの。」

喜恵が怒りながら言つ。

「ちよつと。綾夏。それは言つて過ぎよ。」

由香が注意する。

「わうね。ちよつと言つて過ぎたわね。謝るわ。」

綾夏が謝る。

「はいはい。そこまで。そんなに怖い顔しないの。笑顔で帰りおつ。

」

早紀が右の拳を突き上げた。

だいぶ酔ってるや」れば、誰か止めないと由美を襲いかねないぞ。

「ちょっと姉さん。大丈夫?」

「うるさいあい…おだまりなさい…」

喜恵が節介心配してくれたのに早紀は何故か立腹のようだ。

「もう我慢出来ない。由美来なさい…」

「あ…」

「うやら早紀は由美を襲いたかったようだ。」

由美は早紀に連れられて何処か行ってしまった。

無事に帰つてくるだろつか?

「姉さん。あんまり酷い事しなければいいけど」

喜恵が心配している。

「あの変態、レズ、ドリの姉に捕まつたから大変だろつな。」

由美が呆れたように言つている。

その言葉に全員が笑いに包まれた。

「所で喜恵、明日私達は何処にいくの?」

由香が喜恵に質問する。

「さあ、私も知らないわ。亜由美は知ってる?」

喜恵が亜由美に聞いた。

「私が知っている限りではまず明日〇五〇〇時に呉を出航してまずはフィリピンのマニラに向かうわ。そこで燃料を補給した後シンガポールに寄港する。そこでまた燃料を補給した後、マレー沖海戦で大破したP・Oウエーラズとレバルズが逃げたセイロン島に殴り込みをかけるのよ。」

さてここで説明するところの世界では南雲艦隊が南方地帯に派遣された事は先に書いた。

そのお陰で南方地帯は昭和一七年八月には完全に日本が占領していった。

中国東部が日本の友邦である中国国民党の制圧下にあり今現在中國国民党と日本陸軍が共同で西部進攻を行つており来年春には中国全土を占領する事が出来るだらう。

そして今回の第七独立機動艦隊の初陣がセイロン島制圧及び英東洋艦隊壊滅作戦が立案された。

「そりなんだ。なんかめんどうな作戦ね。」

綾夏が言った。

「そんな事言わないの。綾夏。英東洋艦隊を叩き潰すんだから。」

「まあそりゃね。でも最初の戦ひ相手が英國とはね。」

由香が言った。

「そりゃね。英國は日本海軍の師匠じやない。最初の相手が日本海軍の師匠とはな

喜恵が言った。

「まあそりゃ戦ひても仕方ない。敵が誰であれ、叩き潰すのみ。」

亜由美が迷わず言った。

「まあ。明日から頑張りましょ！」

亜由美がそう言つて宴余の終了を宣言し、他の艦魂は自分の艦へ戻つていった。

その頃早紀と由美はとこいつと……

ピシッ！

「あつん……もつと

「由美は可愛いわね。ナビゲーションを由美が私の手を由美が取るのよ。

」

今の状況を説明すると由美は両腕を天井からの紐でつるわれておつ、それを早紀が鞭で叩いているのだ。

早紀はドミに由美を、由美はドミに由美をめた。
ちなみに作者は超がつくほどだ。

特に女人の人にはやられるのが大好きだ。

……一部話からそれが遂に明日第七独立機動艦隊が出航する。

彼女達の活躍やいかに！？

第7話 出撃前の大宴会（後書き）

いかがでしたでしょうか？艦魂を盛大に出させていただきました。
次回から本格的に戦闘シーンが始まりますので、ご期待ください。

月25日は初めて神風特別攻撃隊が出撃した日です。祖国を守る為に自分の命をかけた青年達の冥福を祈り、この小説を読んだ後に黙祷をしていただければ幸いです。
ご協力ください。

第8話 セイロン島へ向けて（前書き）

人物紹介	『大和』	大和型戦艦一
番艦	出身地 旅順	身長 158センチ
体重	聞いたら殺す！！	髪型 長髪
実年齢	0歳10ヶ月	外見年齢 18歳
誕生日	1月5日	家族構成 妹・武藏、信濃好きな物 妹達、由美、女の裸体、平和 嫌いな物 米、英、戦 争 大和型戦艦一番艦である。艦魂達の間では『早紀』と呼ばれて いる。
レズ、変態、D/Sである。	周囲が引くほど由美を溺愛している。	

第8話 セイロン島へ向けて

昭和17年11月8日遂に第七独立機動艦隊が県を出航した。

「長官。遂に出撃ですね」

草鹿がやや興奮氣味に言った。

「そう大きな声をだすな。まだ出航したばかりだぞ」
小沢が冷静に言った。

「確かにそうですね。」

草鹿が笑いながら言った。

「そうだよ。何も慌てる事はない。セイロン島は逃げないからな。」

小沢が艦橋の全員に言い聞かせた。
さて、現在の第七独立機動艦隊の状況を説明すると。
0500時に予定通り出航して、現在フィリピンのマニラを目指し
て南下中だ。

「なあ大和。俺達は勝てるよな?」

大和艦長の有賀幸作は大和（早紀）に聞いていた。

「何言つてるのよ。私の艦長なんだからしつかりしてよね。私達が
負ける訳ないわよ。」

大和（早紀）が怒りながら言った。

「おいおい。そんなに怒るなよ。冗談だよ。冗談。」

有賀が謝る。

「ふんっ……ばあか……」

大和（早紀）はそういうどこかへ行ってしまった。
「全く。そんなに怒らなくともいいだろ？」「」

有賀が呆れて言つ。

「有賀艦長。お電話です」

初陣で緊張しているのか震えた声で伝令が言つている。

「おお。ありがとせん。」

有賀が電話に出ると声の主は馴染みのある声だった。

「よお。有賀調子はどうだ？」

武藏艦長の森下からだつた。

「別に何ともないぞ。どうしたんだ？」

有賀が聞く。

「いやあな。この艦隊としては初陣だからお前が緊張していないか心配していたんだ。」

森下が笑いながら言つた。

「馬鹿野郎。俺が緊張すると思つていたか？」

有賀も笑いながら言つ。

「思つちやいねえよ。ただ単に聞いてみただけだ。」

森下が言つ。

「全く。お前つて奴は。」

有賀が笑う。

「じゃあわうゆう事だ。精々樂せりよ。」

それだけ言つと森下は一方的に電話を切つた。

有賀は、相変わらずの野郎だと思いながらそれを伝令に渡した。

と、そこへ連絡が入つた。

「連邦商路護衛艦隊から入電です。」

伝令が言つ。

「なんだ?」

小沢が聞く。

「言ひます。貴艦隊は第七独立機動艦隊と見ゆ。貴艦隊は極秘艦隊の為貴艦隊と遭遇した事は秘匿する。です。」

伝令が言つた。

「つむ。流石は鈴木の艦隊だ。我が艦隊の情報を入手していくとはよし。返信だ。心ずかい感謝する、とな。」

小沢が言つた。

「了解しました。返信します。」

さてここで連邦商路護衛艦隊と鈴木について説明する。

鈴木とは実在した『鈴木商店』である。

鈴木商店は1874年に兵庫の弁天浜に開業し、金子直吉と柳田富士松の両番頭が鈴木よねに経営を任せられ、戦前の日本の財閥に育てた。

砂糖事業などで利益を上げ、製糖・製粉・製鋼・タバコ・ビールなどの事業を開拓し、さらに保険・海運・造船などの分野にも進出した。

1920年の全盛期の売上げは、16億円（日本のGNPの約1割）に達した。

しかし、第一次世界大戦後の反動でバブルが崩壊。

銀行からの借り入れのみで運営資金をまかなっていた鈴木商店は大打撃を受ける。

台湾銀行は、鈴木商店への新規融資の打ち切りを通告、系列銀行に鈴木商店を支える体力はなく資金調達が不能となり、事業停止・清算に追い込まれた。

鈴木商店の流れを継ぐところは神戸製鉄所・帝人・ナブテスコ・エイ・いすゞ自動車・日本化薬・双日などである。

さて、本題の連邦商路護衛艦隊であるが、

台灣銀行が鈴木商店に新規融資を打ち切った時に帝國政府が鈴木商店救済法案を可決し、鈴木商店に対する援助を決めた。

しかし、帝國政府は自分が金を出すのはもつたいないと考え、鈴木商店に対して商路警護委託法案を鈴木商店側に提示した。

それに対し、鈴木商店側は商路警護委託法案を承諾して帝國政府からの援助を受け、倒産の危機を脱する事に成功した。

これから後の鈴木商店の動きは迅速だった。

早々と連邦商路護衛艦隊を創設し、太平洋戦争の始まる昭和16年12月8日には早速業務をはじめた。

業務内容は占領地からの輸送船団の護衛などであった。

これにより、帝國海軍は敵艦隊との戦いにのみ集中出来るようになつた。

それが連邦商路護衛艦隊である。

「さて後はフィリピンのマニラへ行くだけだな。」

小沢がつぶやいた。

数時間後の1100時には第七独立機動艦隊は無事にフィリピンのマニラに到着した。

「南方つていい所ね。」

早紀が言った。

「本当ね。姉さん。」

喜恵が応える。

「ナビゲーションと前まではまだ血が流れていったんだよ。」

畠由美が言った。

確かに畠由美の言つ通りで少し前まで、ここは戦場だった。

「まあ。いいじゃない。私達の田的島はまだ先だよ。」

早紀が言った。

早紀の言つ通りだ。

彼女達の田的島はセイロン島だ。

「わい。やあやあ出航ね」

畠由美が言った。

「わい。行きますか。」

早紀が言った。

その後第七独立機動艦隊は無事にシンガポールに到着し、燃料を補給した後、セイロン島へ向け出航した。

今回はセイロン島制圧及び英東洋艦隊壊滅作戦の為、第七独立機動艦隊の輸送船30隻の内10隻が特別陸戦隊一個師団を乗せており、セイロン島の占領も考えていたのだ。

セイロン島を占領した後は陸軍を派遣してくる事になつていた。
さて、いよいよ次回。

第七独立機動艦隊が派手に暴れます。
ご期待ください。

第8話 セイロン島へ向けて（後書き）

皆さん。

申し訳ありません。

今回、

戦闘シ

ーンを書くといいましたが次回にズレてしましました。
本当に申し訳ありません。見捨てないで下さい。

第9話 セイロン島空襲（前書き）

『武蔵』

大和型戦艦一一番艦

出身 旅順港

身長 155センチ 体重 聞かない方がいいよ

髪型 長髪

通称 亜由美

実年齢 0歳

10か月 外見年齢 18歳

誕生日 1月5日

家族構成 姉・大和、妹・信濃

好きな物 姉、

妹、平和 嫌いな物 戰争

艦魂達の間では『亜由美』と

呼ばれている。

姉の早紀ではケン力をすることがあるが実は姉の事を尊敬している。

第9話 セイロン島空襲

昭和17年11月13日。遂に第七独立機動艦隊はセイロン島の東400キロに位置していた。

「よし。大和改に連絡。機動群は第一次攻撃隊を編成し、セイロン島を空襲せよ。」

小沢が言った。

「よし。これで一段落だな。」

「やれやれですね。」

草鹿が応えた。

「しかし、警戒は厳重にしろよ。英東洋艦隊の所在が掴めないんだからな。」

小沢が心配している。

それもそつだらう、未だ英東洋艦隊が見つからないのだ。

小沢はもとより、第七独立機動艦隊の誰もが躍起になっていた。

「もひ。まだ見つからないの?」

大和(早紀)が呆れたように言っている。

「まあそつ言ひな。皆躍起になつて探しているんだ。もう時間の問

題だろ？』

小沢がなだめるように言った。

「そうね。もうすぐ見つかるよね。』

『そうだ。見つけたら盛大に迎えてやれ。』

小沢が言った。

さてその頃大和改、武蔵改、信濃改の三空母はてんてこ舞いだった。

『急げ。第一次攻撃隊の出撃はもうすぐだぞ。』

総指揮官である『大和改』飛行隊長の木月武中佐が激を飛ばしている。

『張り切つてるわね。』

『おお。大和改。張り切るに決まってるだろ。』

大和改（由香）が木月に話かけた。

『あんまり無茶しないでね。あんたが死んだら殴る相手がいなくな
るからね。』

『あたぼうよ。お前の為に死ねるかよ。』

『なつ！..誰があんたの為よ。勘違いしないでよね。』

『ハハハ。そう慌てる所が怪しいな。』

木月が言つ。

「 もう。 ふざけないで。 」

大和改（由香）が木月を殴り飛ばした。

「 ぐふつ。 人が出撃前なのにこんな事をするとは」

「 あんたが悪いのよ。 」

大和改（由香）はそう言つと、ビニカへ行ってしまった。

「 全く。 あいつは。 」

木月が呆れて言つ。

「 よし。 出撃だ。 」

大和改、武藏改、信濃改の三空母の飛行甲板はまさに新時代の空母といった感じだった。

従来の飛行甲板から蒸気力タパルトに射出される航空機の横で斜めに射出される航空機があった。

これこそが世界初となるアングルドデッキである。

元々は山本の思いつきに牧野が建造中の三空母に取り付けたのである。

（しかしなあ。 一昔前じゃあ想像つかなかつたぞ。 何せ斜めに打ち出されるんだからな。 ）

木月が部下が飛び立つてぐるのを上空で見守りながら考えていた。

(よし。全員無事に上がってきたな。あのカタパルトが付いてから出撃にかかる時間が短くなつたな。)

木月が率直な気持ちを思つてゐる。

木月は全機に直通の無線を入れた。

「よし。全機無事に上がってきたな。それではセイロン島空襲に出撃だ。」

この世界では日本の無線は世界各国のそれより、はるかに凌駕していた。

第一次攻撃隊としていたがその実は、彩雲以外の全力出撃である。

「全機に告ぐ。これよりセイロン島を空襲するが、第一目標はドンドラ岬の要塞だ。陸戦隊がドンドラ岬に上陸するから重点的に空襲しろ。陣風隊は敵に流星隊に絶対に手を出させやんな」

木月が全機に命令を下した。

その後木月率いる第一次攻撃隊はセイロン島の南、ドンドラ岬要塞を徹底的に破壊し意氣揚々と帰還した。

何せ被害機及び被弾機は皆無だったのだ。

この知らせを聞いた小沢は

「流石は木月だ。あいつに総指揮官を任せて正解だったな。」

と言つてゐる。

その後第七独立機動艦隊に待ちわびた報告が届いた。

「我。敵英東洋艦隊を発見す。南南西の方角、距離1200キロにて13ノットで進撃中。」

信濃改が放つた彩雲偵察機の快挙だつた。

この報告を受けて小沢は、「全艦最大速力。南南西へ進路を取れ。英東洋艦隊を擊破するぞ。」と言つた。

「やつと私が活躍出来そうね。」

「大和。期待してゐるぞ」

小沢が大和（早紀）に言つてゐる。

「任せて。私の51センチ砲で粉碎してやるわ。」

大和（早紀）が言つた。

さてその頃、英東洋艦隊はと言つと。

「長官。紅茶が入りました。」

「おお。リーチ艦長。有り難う。」

英東洋艦隊長官のサー・トーマス・フィリップス中将が紅茶を飲んでいる。

呑気な風景だが、英國紳士はレディファーストであり服装は完璧であり紅茶をたしなむものだと思っている。

作者もこう思つており、レディファーストを常に心がけている。

朝と三時のティータイムは欠かした事がない。

まあ五年前からだが……

「それより。ウェールズ。これから敵艦隊との砲撃戦が予想される。頑張ってくれよ。」

フィリップスがウェールズに言つている。

「任せてよ。私頑張るからね。」

ウェールズが応えた。

「うむ。頑張れよ。」

さて。ゆつくりとだが、確実に接近していく第七独立機動艦隊と英東洋艦隊。

両艦隊が激突するのは時間の問題だ。

第9話 セイロン島空襲（後書き）

次回。
撃戦。

お楽しみに。

第七独立機動艦隊と英東洋艦隊の一大砲

第10話 セイロン島の決戦（前書き）

『信濃』

大和型戦艦三番艦

出身 旅順港

身長 150センチ 体重 秘密です

髪型 長髪 実年齢 0歳10か月 外見年齢 1

8歳 誕生日 1月5日 家族構成 姉・大和、武蔵

好きな物 姉たち、平和 嫌いな物 戦争、ルーズベルト、チャーチル 艦魂達の間では『喜恵』と呼ばれている

大和三姉妹の中では一番眞面目である。

第10話 セイロン島の決戦

昭和17年11月13日の夜半。

遂に両艦隊共相手を発見した。

「よし。機動群は輸送船団を率いて戦域を離脱せろ。」

小沢が言った。

「了解。機動群に連絡。
参謀達が復唱していく。」

「大和。今から派手にやるから頑張つてくれよ。」

小沢が大和（早紀）に言った。

「まかせて。私にかかるば敵なんてイチ「口よ。」

大和（早紀）が笑いながら言った。

「おいおい。沈めたら意味がないだろ？ 僕達の目的は敵主力艦の
鹹獲だぞ。」
有賀が言った。

「わかつてゐわよ。そんな事をいちいち言わなくていいのよ。」

大和（早紀）が怒っている。

「すまんすまん。」

「まあそつ怒るな。」

有賀が謝り、小沢が宥めている。

「艦長。敵艦の観測機です。どうしますか？」

艦内放送で防空指揮所からの連絡が入った。

「よし。一一番主砲塔、二式弾装填。装填したら敵機を撃墜せよ。」

有賀が言った。

なお、二式弾と言つても史実と同じではない。

この世界の二式弾はV-T信管が付いている。

この世界ではV-T信管すでに開発していたのだ。

その他に潜水艦用の四式弾があり、対地用に開発された今で言つてラスター弾の五式弾がある。

「了解しました。」

一番主砲塔から連絡が届いた。

その頃、英東洋艦隊はといふと。

「弾着観測機は、発進させたか？」

フィリップスが言った。

「もちろんです。長官。悔しい事に我が軍のレーダーより、日本軍の方がレーダーは優秀ですからね。」

リーチ艦長が応えた。

「フィリップス長官。」

若い士官が慌てて艦橋に入ってきた。

「どうした。」

フィリップスが尋ねた。

「弾着観測機が全機叩き落とされました。」

「何!? それは本当か?」

「はい。」

「つむ。」

フィリップスが悩んでいる。

「よし。レーダーがあるんだ。レーダー射撃だけで迎え撃とう。」

フィリップスがそう言い切った。

さてもう一度我が独立機動艦隊はどういう状況かといつと。

「よし。全速前進。敵に先に撃たせるのだ。」

小沢が言った。

「ねえ。大丈夫なの？」

大和（早紀）が言った。

「どうした。大和。お前は丈夫だから大丈夫だよ。」

「別に何もないわよ。」

「大丈夫だ。お前は世界中のどの戦艦の主砲にも耐える事が出来るからな。」

小沢が言った。

確かに小沢の言うとおりだ。

大和級は世界中のどの戦艦の主砲にも耐える事ができる。

現在の所、大和級が耐える事の出来ないのは自身の主砲だけである。

大和級の装備する主砲弾の超々重量徹甲弾は世界一の威力を持つている。

「敵艦隊。射程内に入りました。」

防空指揮所から連絡が入る。

「発射は控える。先に敵に撃たせるのだ。大丈夫だ。ウェーレズの主砲は35・6センチだから被害はないはずだ。」

「敵艦発砲。」

防空指揮所から連絡が入る。

ウェーレズからの砲撃が大和に向かって飛んでくる。八発の主砲弾は、隔壁を粉碎しつつ船体に浸透、ヴァイタルパートへと接触し……

全弾が、あさつての方向へ弾き飛ばされた。

「被害報告。」

小沢が言った。

「被害皆無。」

報告が各所から入った。

「よし。反撃だ。一番主砲塔は重巡洋艦群。二番主砲塔は駆逐艦群に三番主砲塔は五式弾を装填し敵空母群を狙え。」

「了解。」

各砲塔から返事が返ってきた。

その後、英東洋艦隊の重巡洋艦群及び駆逐艦群は全滅し空母群も飛行甲板が大破させられ、戦艦群も大和、武藏、信濃の前には子供のようなものであり戦況はけつした。

その後の第七独立機動艦隊の降伏勧告を英東洋艦隊は受け入れ、戦闘は終結した。

フィリップスなど主要幹部は大和に乗り移り、戦艦P.O.ウェーハーズ及びレパルス空母インドミタブル及びフォーミダブルは第七独立機動艦隊に鹹獲された。

その後、第七独立機動艦隊は更に強大になるがまたそれは次回に。

第10話 セイロン島の決戦（後書き）

皆さん。

申し訳ありません。

物足りないの

はわかつています。

米太平洋艦隊との戦いでは

派手にしまでのこれからもよろしくお願いします。

第11話 第七独立機動艦隊改修計画（前書き）

今回お題名のとおりです。

第11話 第七独立機動艦隊改修計画

昭和17年11月15日

第七独立機動艦隊はセイロン島のドンドラ岬に上陸を開始した。

上陸にあたり、艦砲射撃及び航空攻撃を行つた。

大和、武藏、信濃は五式弾による艦砲射撃を行つた。その射撃により、セイロン島の建物という建物は粉々になりその後を対地ロケット弾を装備した『陣風』、ナパーム弾を装備した『流星』が空爆を行い、英軍守備隊は戦う前から戦意を喪失していた。

そこに第七独立機動艦隊の輸送船がドンドラ岬の砂浜に乗り上げた。

実は、陸戦隊を乗せた10隻の輸送船は強襲揚陸艦であった。

一個師団の半数は20式重戦車を配備していた。

20式重戦車は陸軍ではなく海軍が開発したものである。

20式重戦車の概要是主砲115mm砲を装備し、最大装甲厚は170mm、時速55kmである。

陸軍は現在海軍に要請し、20式重戦車を大量生産中である。

この20式重戦車を主軸とし、歩兵隊も軍用トラックに乗つて進軍を行つたので翌日の昼にはセイロン島は第七独立機動艦隊が占領するに至つた。

その後、セイロン島は『連邦商路護衛艦隊』に任せて第七独立機動艦隊は昭和17年11月20日には旅順港に帰港した。

小沢達が旅順港に上陸するとそこには懐かしい人物達が待っていた。

「おお。 小沢君に草鹿君。 セイロン島では頑張ってくれた。」

近衛が言った。

「小沢、草鹿。 よくやった。」

山本が言つ。

「お疲れ様でした。」

豊田が疲れを労う。

「近衛総理、山本長官、豊田君。わざわざありがとうございます。」

小沢が応える。

「まあ小沢。そう固くなるな。今回は作戦の成功祝いだけじゃなく、艦隊の改修をいいにきたんだ。」

山本が言つた。

「…………改修ですか？」

小沢が驚いたように言つた。

「そうだ。第七独立機動艦隊全艦及び歯獲艦の改修だ。」

山本が言つた。

「詳しい事は牧野君に説明してもらいつから早速聞きに行こうではないか。」

近衛はそう言つと一人で基地の方へと行つてしまつた。

残された4人は慌てて後を追い掛けた。

「それでは説明をはじめてくれ。牧野君。」

近衛が言った。

「わかりました。それでは第七独立機動艦隊全艦及び鹵獲艦改修計画案についてご説明させていただきます。」

牧野が説明を始めた。

「まずは第七独立機動艦隊全艦の改修計画案から説明させていただきます。大和級戦艦から説明します。まず大和級は三艦共に艦首尾を撤去し新艦首尾を接合します。」

牧野がそこまで言つと小沢が質問した。

「新艦首尾と言つたが何が新しくなったんだ？」

小沢の質問はもつともな物だった。

「新艦首尾ですが。まず艦首はバルバス・バウから艦首部の予備浮力確保及び抵抗低減をさらに推し進めたシリンドリカル・バウ（円筒状突出艦首）に更新します。艦尾はただ単に延長しただけですが。」

「

牧野がそう説明すると小沢納得して手元の資料を読み始めた。

「それでは、続けます。」

「」

ル延び370メートルになりました。これにより旋回性能の是正のため、艦首下艦底中央部に引き込み式副舵（並列一枚配置）を追加装備します」

「その他大和級は生物、化学、放射性、核兵器（CBRN）対策の全面的導入をします。主に対放射性塵、汚染物質対策の為、木甲板を廃止し鉄、鉛粉末混合コンクリート層による耐熱表面被覆に更新します。また放射能塵除洗用散水装置を設置して区画の一部に含水層を追加し火災、弾片防御、対核防御の向上を目指します。」

「その他、主計科倉庫、被服庫、糧食庫、給水所を各所に分散配置。全配置で戦闘配食と負傷者の応急措置が可能な『戦う大和ホテル』に。」

「「」の他に艦尾の弾着観測機を水上機からヘリコプターに変更します。」

牧野が言つと。

「へりこふたー？」

小沢が始めて聞いたぞと言わんばかりに言つた。

「そうだ。ヘリコプターだ。私から説明しよう。」

山本が説明を始めた。

「ヘリコプターは陸軍と海軍の協同で開発した物だ。ヘリコプターはその使い道の多さから陸軍では対地ロケット弾を装備したヘリコプターを海軍では対潜水艦ロケット弾を装備したのをそれぞれ生産中だ。大和級及び最上級及び雪風級には海軍仕様を配備し、信濃級

には陸軍仕様と海軍仕様をそれぞれ10機配備する。まあそれがヘリコプターと言つ奴だ。」

「はあ。なんとなく解りました。」

小沢が言った。

「よし。説明を再開してくれ牧野君。」

「わかりました。」

牧野が言つ。

「それでは次に信濃級ですが、信濃級は艦首部をシリンドリカル・ハウに変更し陸軍、海軍各仕様のヘリコプターを10機搭載した以外は変わりません。」

「最上級は20センチ砲を装備し海軍仕様のヘリコプターを搭載しただけです。雪風級は海軍仕様のヘリコプターを搭載しただけです。」

「以上が第七独立機動艦隊の改修計画案です。次に鹹獲した英艦の改修計画案ですが……」

その3ヶ月後、第七独立機動艦隊は更に強大になり、アメリカ太平洋艦隊撃滅に出撃していった。

第11話 第七独立機動艦隊改修計画（後書き）

如何でしたでしょうか？　話はいきなり3ヶ月飛びますがまたまだ太平洋戦争は続きます。　これからも頑張っていきますので応援よろしくお願ひします。

新生第七独立機動艦隊（前書き）

大改修を行つた第七独立機動艦隊の陣容を書きました。
更にパワーアップした第七独立機動艦隊をご覧ください。

新生第七獨立機動艦隊

第七獨立機動艦隊

司令長官：小沢治三朗中將參謀長：草鹿龍之介少將

總旗艦・戦艦大和

戦艦武藏

戦艦信濃

機動郡旗艦・空母大和改

空母武藏改

空母信濃改

防空重巡洋艦最上

防空重巡洋艦鳥海

防空重巡洋艦青葉

防空重巡洋艦松島

防空重巡洋艦高雄

駆逐艦雪風

駆逐艦谷風

駆逐艦初風

駆逐艦海風

駆逐艦山風

潜水艦伊一　一号

潜水艦伊二　二号

潜水艦伊三　三号

輸送艦二十隻

強襲揚陸艦十隻

戦艦近江（旧P.O.ウエールズ）

戦艦尾張（旧レパルス）

空母海神（旧インドミタブル）

空母風神（旧フォーミダブル）

各艦の性能は以下の通り。

超弩級戦艦大和級

全長 370 メートル

最大幅 50 メートル

満載排水量 1350000 トン

速力 35 ノット

主砲 51 センチ 3 連装 3 基 9 門

副砲 25 センチ 3 連装 3 基 9 門

高角砲 127 ミリ速射砲 単装 12 基 12 門

80 ミリ速射砲 連装 16 基 32 門

噴進砲 18 センチ 40 連装 6 基

対空機銃 40 ミリ 4 連装 50 基 200 門

4 連装対潜魚雷発射機 2 基 対潜哨戒ヘリコプター 3 機搭載

主砲には二式重戦車の主砲が装備していたサーマルジャケットと冷水放射基を装備した。

電装関係だが発電機をターボ発電機、ディーゼル発電機に変更した。これにより砲塔駆動を水圧方式から電圧方式に変更した。

『三式射撃レーダー』及び『二式水上レーダー』及び『二五式対空レーダー』及び『三三式ソナー』を装備している。『三式射撃レーダー』は対水上、対空間わざに一五の目標に対するリアルタイム照準と追尾が可能になった。

バルバス・ハウに変わりシリンドリカル・ハウに更新した。シリンドリカル・ハウ内にソナーが装備されている。

超弩級航空母艦大和改

全長 330 メートル

最大幅 75 メートル

満載排水量 1250000 トン

速力 35 ノット

高角砲 130 ミリ速射砲 単装 20 基 20 門

噴進砲 15 センチ 30 連装 8 基

対空機銃 40ミリ4連装60基240門

搭載機数 150機

艦上戦闘機・陣風40機

艦上攻撃機・流星40機

艦上偵察機・彩雲25機

早期警戒機・極星25機

攻撃ヘリ・10機

対潜ヘリ・10機

『アングルドデッキ』及び『蒸気カタパルト』を世界に先駆けて装備した。

大和級と同じくシリンドリカル・バウに更新し、その中にソナーを装備している。レーダー等は大和級と同じ装備である。

防空重巡洋艦最上級

全長190メートル

最大幅25メートル

満載排水量9800トン

速力35ノット

主砲25センチ連装4基8門

高角砲130ミリ速射砲単装20基20門

噴進砲15センチ30連装8基

対空機銃40ミリ4連装60基240門

対潜ヘリ2機搭載

対空戦闘を主眼にした防空艦である。

防空艦の為、セイロン島沖海戦までは主砲は装備していなかつたがセイロン島沖海戦後に、砲撃数が多いほうが多いと言つ事で最上級にも主砲が取り付けられた。

バルバス・バウを装備している。

電装関係は大和級等と同じである。

駆逐艦雪風級

全長150メートル

最大幅 15 メートル

満載排水量 7500 トン

速力 35 ノット

主砲 15 センチ連装 4 基 8 門

高角砲 127 ミリ速射砲単装 10 基 10 門

対空機銃 40 ミリ連装 40 基 80 門

噴進砲 15 センチ 30 連装 4 基

魚雷発射管 4 連装 4 基 12 門

対潜ヘリ 1 機搭載

駆逐艦ではあるが軽巡洋艦なみの武装をもつてている。バルバス・バウを装備している。

電装関係は大和級等と同じである。

潜水艦伊一級

全長 100 メートル

最大幅 23 メートル

満載排水量 7500 トン

速力 35 ノット

70 センチ魚雷発射管 6 門 最大潜航震度 180 メートル

世界で初めてポンプ式噴流エンジンを搭載した潜水艦である。このエンジンのお陰で 35 ノットの速力がだせる。

20 式重戦車

主砲 115 mm 砲

機銃 30 mm 重機銃

最大装甲厚 170 mm

時速 55 km

日本海軍が開発した重戦車である。

陸軍用も現在大量生産中である。

現時点では世界最強の戦車である。

艦上戦闘機陣風

最大速度770キロ

実用上昇限度15800メートル

武装30ミリ機関砲門

13ミリ機関砲門

対地口ケット弾6発

航続距離7500キロ

ジェットエンジンを搭載する予定だったが開発が難航し現有のエンジンの馬力アップを狙つた。

速度、上昇限度、航続距離が上がった。

艦上攻撃機流星

最大速度650キロ

実用上昇限度11500メートル

武装対艦口ケット弾8発

爆装1トン徹甲弾及びナパーム弾4発

雷装850キロ長魚雷

航続距離7300キロ

主翼は世界初となる逆ガル型の主翼を採用した。

その為、流星は世界初の急降下爆撃、雷撃兼用の航空機となつた。

艦上偵察機彩雲

最大速度880キロ

実用上昇限度2300メートル

航続距離9300キロ

世界最速の艦上偵察機である。

実用上昇限度が低いのは速度に重点を置いた為である。

早期警戒機極星

最大速度850キロ

実用上昇限度8000メートル

航続距離9000キロ

対空、水上の両レーダーを装備した航空機である。

世界初の早期警戒機である。

攻撃ヘリコプター

最大速度 510 キロ

実用上昇限度 4500 メートル

武装 30ミリ機関砲 1門

対地口ケット弾 12発

対艦口ケット弾 10発

航続距離 2500 キロ

世界初となる実用ヘリコプターである。

対潜ヘリコプター

最大速度 500 キロ

実用上昇限度 4300 メートル

武装 30ミリ機関砲 1門

対潜魚雷 4 発

航続距離 1800 キロ

対潜水艦を攻撃に重点を置いたヘリコプターである。

戦艦近江（旧 P.O.ウェーラーズ）

全長 228 メートル

最大幅 29 メートル

満載排水量 38500 トン 速力 35 ノット

主砲 38センチ連装 4 基 8 門

高角砲 127ミリ速射砲 単装 8 基 8 門

対空機銃 40ミリ 4 連装 30 基 120 門

U.P 空中機雷発射機 4 基

セイロン島沖海戦で鹹獲した P.O.ウェーラーズ を誠意改修した。

U.P 空中機雷発射機は日本軍が現在大量生産中であり、近々全艦艇に
装備される。

シリンドリカル・ハウを装備した。

電装関係も大和級と同じ装備にした。

戦艦尾張（旧レパルス）

全長245メートル

最大幅28メートル

満載排水量29000トン

速力35ノット

主砲38センチ連装2基4門

高角砲157ミリ速射砲単装10基10門

対空機銃40ミリ4連装30基120門

UP空中機雷発射機4基

POウェールズと同じ誠意改修を行つた。

シリンドリカル・ハウを装備。

大和級と同じ電装関係を装備。

空母海神、風神（旧インドミタブル、フォーミダブル）

全長230メートル

最大幅50メートル

満載排水量35000トン

速力35ノット

高角砲127ミリ速射砲単装10基10門

搭載機数80機

艦上戦闘機陣風30機

艦上攻撃機流星30機

艦上偵察機彩雲10機

早期警戒機極星10機

シリンドリカル・ハウを装備。

大和級と同じ電装関係を装備。

アングルドデッキ及び蒸気力タバートを装備。

新生第七独立機動艦隊（後書き）

如何でしたでしょうか？パワーアップした第七独立機動艦隊。

次回から派手な戦闘といきたいですが……

次回はセイロン島沖海戦の結果を聞いたアメリカの対応などについて書きたいと思います。

遂にアメリカに知られてしまった第七独立機動艦隊。

彼らの次なる戦略は？その次こそ戦闘シーンといきたいですが……

連合艦隊について書きたいと思います。海軍の本家の動向について書かないと書いてませんからね。

第12話 アメリカ合衆国政府の苦悩前編（前書き）

アメリカ合衆国がついに第七独立機動艦隊について情報を得た。
その艦隊についての対抗計画を考えるアメリカの苦悩について書きました。

第12話 アメリカ合衆国政府の苦悩前編

さて今回は第七独立機動艦隊が大改修を行なっているときのアメリカの対応について書きたいと思います。

1942年11月13日に起こったセイロン島沖海戦を受けてのアメリカの対応です。

アメリカ海軍省。

海軍省長官フランク・ノックスの気分は朝から優れなかつた。

11月の肌寒さの中セイロン島沖海戦にて敵連合艦隊に未確認の艦隊が英東洋艦隊と海戦を行つたという。しかもそのX艦隊は強敵らしく（アメリカ海軍はその未確認の艦隊をX艦隊と呼んでいる。）P.Oウエールズ、レパルス、インドミタブル、フォーミダブルを鹹獲したというのだ。

頭痛の種はこのところいくつもあつたが、今日はまた特別だ。

午前7時30分。

まだコーヒーも口にしていない時間に、その人物は海軍省に現われてノックスの席に腰を据えてしまつた。

つまり海軍長官の席にある。

ほかの人間であればただちに尻を蹴飛ばして厳寒の通りに放り出すところだがその人物に限つては苦笑い程度で我慢するしかなかつた。

「やあ。 フランク」

椅子に座っているのはフランクリン・D・ルーズヴェルト・アメリカ合衆国第三十二代大統領その人だ。

「大統領。 私の記憶違いでなければお約束は8時ではなかつたかと
……」

「どうしても一度この椅子に座つてみたくてね。」

フランクリン個人だけでなくルーズヴェルト一族は海軍に強い影響力を發揮していた。

『マイ・ネイビー』

フランクリン・ルーズヴェルトはそう公言していた。
イギリスの後ろ盾にとどまらずついにアメリカは大戦の荒波に乗り

出した。

相手は世界の三大海軍の一つの一つ。

英東洋艦隊は壊滅した為、日本海軍との一騎打ちとなつた。

ルーズヴェルト一族が育てあげてきた海軍『マイ・ネイビー』の成果がいよいよ試されるのである。

と言つてもハワイのダイアモンドヘッドが噴火した為海軍が壊滅した為、フランクリンが再建したからルーズヴェルト一族のではなくフランクリンの『マイ・ネイビー』と言つたほうが正しいだらう。

「次官をしていたのはもつ30年も昔の話だが。その時の願望がやつとかなつた。」

ルーズヴェルトが言つた。

本来の約束時間8時。

コッコッ

誰かがドアをノックした。

「入りました。」

ルーズヴェルトが言つた。
六フィートを超す長身。

その男が入つて来ただけで部屋の気温が五、六度下がつたようにな
ックスを感じた。

大西洋艦隊司令長官アーネスト・J・キング大将。

アナポリス海軍兵学校教官、大西洋艦隊参謀、潜水艦戦隊司令、空母「レキシントン」艦長、航空局長、航空艦隊司令長官、将官会議メンバーを経て、1940年12月、キング少将は大西洋哨戒艦隊の司令官となつた。

41年2月1日の改編により合衆国艦隊は廃止され、アメリカ海軍は大西洋艦隊、太平洋艦隊、アジア艦隊に三分割された。

キングは大西洋艦隊の新編なつた司令長官に就任。

大統領の息のかかったルーズヴェルト・サークルくの外からの抜擢は、それだけキングの力量を示すものといえた。

「オラン沖では見事だつたなキング大将。うまいこと飛行機を使つた。」

「最善を尽くしたままでです。大統領閣下。」

キングが無表情で答える。

「オランダに比べてフィリピンや南方地帯は残念だつたな。」

「確かにそうですね。閣下。」

キングが答えた。

「しかし、閣下。問題はそれだけではないとお聞きしましたが。」

キングがルーズヴェルトに聞く。

「ああそうだ。大きな問題がある。」

ルーズヴェルトが続ける。

「セイロン島沖海戦で英東洋艦隊を壊滅させた謎の艦隊が出てきた。

」

「我々はその謎の艦隊をX艦隊と読んでいるのだ。」
ノックスが説明した。

「海軍長官の言つた通りそのX艦隊は全ての艦がまったくの新型艦
みたいなのだ。」

ルーズヴェルトが落ち着きながらいう。

「そのX艦隊に対抗出来るように現在、太平洋艦隊の増強を推し進
めている。」

ノックスが自慢気に言った。

「話の内容は分かりました。そのX艦隊に対抗する為に太平洋艦隊
を増強する、その為大西洋艦隊は規模を縮小する。それを認めさせ
る為に私を呼んだ。そうでしょう。大統領閣下。」

キングが笑いながら言う。

「いやいや。違うよキング君。確かに太平洋艦隊は増強するが大西
洋艦隊の規模は縮小しない。」

ルーズヴェルトも笑いながら言う。

「君には別のポストについてもいらう。」

「フィリピンや南方地帯の件を持ち出したといつゝとはキンメル大將の代わりに対日戦の指揮を？」

キングが驚いたように言ひ。

「いや。キンメルはそのまま太平洋艦隊をみてもらひ。君はその上のポストだ。私は合衆国艦隊を復活させたいと思ひ。海軍内に太平洋・大西洋両面の統合指揮官が必要だ。」

ルーズヴェルトが言ひた。

「レインボー七色のうちのオレンジをなんとしても塗り潰さねばならんのだからな。」

レインボーとはレインボー・プランの事である。

日露戦争後、加速度的に膨張を続ける日本の軍備をアメリカは極度に警戒した。

日本を仮想敵国として作戦を練り上げたものが、1904年のオレンジ・プランである。

30年以上にわたって研究されたオレンジ・プランは1939年6月に破棄され、代わりにレインボー・プランが採用された。

一国のみを相手にするのではなく、複数の国と戦う場合を想定した戦争計画だった。レインボー七色のうちオレンジが従来通り日本、レッドがイギリス、ブラックがドイツ、グリーンがメキシコである。

オレンジ・プランは太平洋を西進し、日本艦隊を撃破。

日本を海上封鎖し、降伏させる。

といったふたつのステップからなる。

「つまり大統領閣下。ゲルマンだけでなくジャッブを潰す役も私に？」

「その通りだ。」

ルーズヴェルトが言った。

（ドイツ人嫌いで知られる私だが日本人はそれ以上に嫌いだ。やらを叩く事ができる！）

（実戦部隊の最高位に立つたことよりも悦びは大きいぞ！）

「了解しました。大統領閣下。合衆国艦隊司令長官の役職におつきします。」

「そうか。ありがとうキング君。」

二人は固い握手を交わした。

第12話 アメリカ合衆国政府の苦悩前編（後書き）

アメリカ合衆国政府の苦悩はまだまだ続きます。

第1-3話 アメリカ合衆国政府の苦悩後編

キンググが合衆国艦隊司令官補佐を引受けたから五日後。

合衆国艦隊司令部長官補佐のフリードマン中佐は車を走らせていた。

(シャープエッジを怒らせてほいけない。)

フリードマン中佐は更に車のアクセルを踏んだ。

合衆国艦隊旗艦ドーントレスに到着した。

「おはようございます。サー。」

「用意がいいな中佐。」

8時半より前にキンググは現れた。

「キンメル大将の入院は長引くとのことです。」

「ふん。そうか。しかし計画には支障はない。遅かれ早かれキンメルは更迭するつもりだった。」

「キンメルにやけ酒を飲ませて正解だったな。」

キンメルは開戦以来負け続けの戦果に嫌気がさしていた。

その為キンメルのみならず太平洋艦隊司令部の職員は軒並みアル中になつてゐる。

(はい……もしや……)

「もしや長官はわざとキンメル長官に酒を飲ませ続けたのですか？アル中になれば更迭のもうともな理由になる……」

「ああそうだ。キンメル大将に酒を飲ませ続ければ奴はアル中になる。そうすれば更迭はいつでも出来る」

（これが最初からキングの思惑通りだとすれば実に恐ろしい計算だ！）

（壮大かつ非情！）

「フリードマン中佐。」

突然のキングの呼び掛けにフリードマンは心臓が止まる勢いだった。

「貴官は頭が切れる。わしはいいに掘り出し物を当てたようだ。しかしこの件については他言無用。」

キングが続ける。

「誰かに漏らすことがあれば『ドーントレース』のアンカーにつながることになる。ポトマックの水はまだ冷たい」とを忘れるな。」

「イ……イエッサー。」

フリードマンは シャープエッジ の本当の意味を知った。

キングは先日ハロルド・R・スタークから海軍作戦部長を引き継ぎ、合衆国艦隊司令長官と兼任していた。

指揮権の一本化をはかった結果だが。

これにてキングは名実ともにアメリカ海軍のトップに立った。

キングはすべて自分の希望する人材をスタッフに集めている。

参謀長にはアナポリスの校長だったラッセル・ウィルソン。

参謀副長には大西洋潜水艦隊司令長官だつたりチャード・S・エドワーズ。

その他にはやはり大西洋艦隊から旧知の仲のフロッグ・ロウ、海軍作戦部からは戦争計画部のリッチモンド・K・ターナーといった面々を幕僚として引き入れた。

さらにキンメルの下で知略を持てあまし氣味の『ペンシルヴァニア』
艦長、チャールズ・M・クックを先任参謀に予定していた。

キングという人間は会議で時間がつぶれることを嫌い、定例会議といつものを開かない。

直に会つのは参謀長のウィルソンか参謀副長のエドワーズのどちらの命令が多かった。

ところが今日は様子が違つていた。

「日本に対する基本戦略でありますか？」

フリードマンは驚いた。

「腹面の身では口出しできませんが。」

「かまわん。マハントもつと若いうちから著作の構想を温めていたぞ。」

さてマハントについて説明すると

アルフレッド・セイヤー・マハント（1840～1914）は、著作『海上権力史論』によつてシーパワーの重要性を訴え、当時のセオドア・ルーズベルト大統領のみならず、世界各国の海軍関係者や政治家に影響を与えた人物である。

現在もマハントの書は海軍関係者にとっては聖書みたいなものである。

マハント流の海洋地政学の二大テーマは

・海を制する者は世界を制する。

- ・いかなる国も大海軍国と大陸軍国を同時に兼ねることはできない。
- ・シーパワーを得るために、その国家の地理的位置、自然条件、国土の広さ、人口、国民の物質、政府の性質の六条件が必要。

アメリカはこれまで、

- 1、大海軍の建設
- 2、海外海軍基地の獲得
- 3、パナマ運河建設
- 4、ハワイ王国併合

など米国西方世界戦略はすべてにおいてこのマハーン理論を具現化していた。

作者も一度この『海上権力史論』（3500円位で発売している）を読んだ事があるが、一回だけでは全くもつて意味がわからなかつた。

二回読んでようやく意味が理解できた。

さてマハーンのシーパワー理論が出てきたからついでにイタリアのジヨリオ・ドゥーリーの爆撃機用兵理論を紹介する。

イタリアの将軍ドゥーリーが1920年代に著した『19XX年の戦

争』という未来戦予想記の中の一説で『明らかな攻撃意図をもつて
国土上空へ侵入してくる、敵爆撃隊はいかなる手段をもっても百パ
ーセント阻止することは不可能だ』と著している。

攻撃側はいつどんを攻撃するかといつ点で常に主導権を握つておる
だけに防御側は、はなはだ不利な立場に立たざるを得ない。

この爆撃機用兵理論を応用したのが史実におけるアメリカ軍である。

ヨーロッパの第八空軍、マリアナでB29を率いたルメイである。

日独双方共に爆撃によつて息の根を止められた。

本土爆撃は戦争の最終局面に入った合図と捉えてもいいだろう。

一部本編からはなしづれたが気を取りなおして続けよう。

フリードマンはこれを好機と考えた。

キングに認められるということは大きなステップアップとなるはず
だ。

もちろんここで見放されることがある。もある。

フリードマンは慎重に言葉を選んだ。

「太平洋の脅威として、日本だけを考えていればよかつた時代は終

わりました。」

「状況は変わり、同盟を結んでいませんがドイツも敵として存在します。」

「また、長官の慧眼通り海戦の主力は戦艦ではなく、空母と潜水艦に移ったかと思つます。」

「…………しかし、それでもオレンジプランの基本に間違いはないと私は考えます。」

キングは黙つてうなずく。

「いま現在、日本軍は東南アジアからフランス、オランダ勢を一掃してしまいました。」

「――コーギー』アも占領し、オーストラリア、ニュージーランドが陥伏するのは時間の問題だと思います。」

「現在の状況でもシンガポールからスマトラ、ボルネオ、セレベス、ニコーギー』アに至る『マレー・バリヤー』が構築されました。」

「いかなるアメリカ軍といえど『マレー・バリヤー』を突破するのは至難の業です。」

「正面から攻略しようとすれば膨大な物資と時間、そして大勢の将兵たちの生命が失われるるのは確実。」

「やうなれば厭戦気分が蔓延し、戦争継続すら危うくなります。」

フリードマンは続ける。

「南方ルートを放棄するとなると中部太平洋を突っ切るルート、もしくはアリューシャン・チシマ列島に沿った北方ルートが考えられます。」

「しかし北方は一年中霧が立ち込めており、大部隊の移動には難があります。」

そう言つとフリードマンは大きく息を吸い。

「中部ルートからの進攻を提案します。」

「進攻法については……」

キングは冷たく言つた。

「日露戦争でのバルチック艦隊がイギリスの監視網から逃れることが出来なかつたように我が艦隊も『マレー・バリヤー』からやつてくる偵察部隊の目をくらますことは出来ないでしょ。」

「最悪の場合には退路を断たれます。」

「ここはギルバート、マーシャル、マリアナといった諸島を攻略し、兵站線を築いてから進撃すべきでしょ。」

「いずれにせよ史上かつてないほどの大規模な作戦となります。機動部隊や攻略部隊が完成するまでは時間が、かかりますのでそれまで敵を潜水艦で叩いておくことも必要かと」

「ボルネオ周辺にて通商破壊戦を展開すれば日本の動きは著しく封

じ込められます。」「

「奴らの弱点は海外に石油を頼っていることだ。」

「フリーダマン中佐。貴君の戦略眼は実に興味深かつた。明日の統合参謀長会議の参考になつた。」

キングはそう言つた。

「西半球。特に大西洋で一手打つ」とも有効です。ジョンブルたちに頑張つてもらい我々は太平洋に主軸を持つていくためにも。」

「そのためにはジョンブルたちの尻を蹴飛ばす必要があるな……」

…

「よし。続きをランチを食べながらだ。」

キングはそう言つとそそくわと出ていってしまった。

フリーダマンは朝の挽回ができたことを知つて安堵のため息をついた。

もっともシャープエッジとの食事は何を食べても味などわからないだろうが。

第13話 アメリカ合衆国政府の苦悩後編（後書き）

次回から連合艦隊の動向についてかきます。そして後書きコーナーを作り、より一層艦魂を楽しんでもらえるようにしたいです。

第14話 大日本帝國海軍連合艦隊動向

さて今回は連合艦隊の動向について書きたいと思います。

先程、今まで投稿した小説を読んでみたんですが。

途中から普通の架空戦記になつてましたね。

しかも説明が多い！－！－！

まあ今回も連合艦隊の説明ですが……

怒らないでください。

次回から艦魂の出る架空戦記になるので今回もお付き合いください。

わたくしで、この小説には多数の艦隊が登場する。

日本・連合艦隊、第七独立機動艦隊、連邦商路護衛艦隊。

アメリカ・合衆国艦隊、太平洋艦隊、大西洋艦隊、アジア艦隊（すでに壊滅）

イギリス・イーストフロート（本国艦隊、地中海艦隊）イーストス

テーション（北大西洋艦隊、南大西洋艦隊、東洋艦隊、東洋艦隊はすでに壊滅）

ドイツ・大西洋艦隊

ソビエト連邦・黒海艦隊、地中海艦隊、極東艦隊

などが登場する

さて今回は大日本帝國海軍連合艦隊とは何か？

この小説の中での活躍。

この小説の中での建艦計画について書く」とこしたいと思います。

連合艦隊だけでなくそもそも海軍というのは国力の基準であった。

現在のように、国民総生産（GNP）や国内総生産（GDP）は国力の基準ではなかった。

七つの大洋のどこにでも出動して、戦場に兵力を運んだり、紛争地に睨みをきかすことの出来る海軍力こそが、国力の象徴だった。

日露戦争の日本海海戦でのバルチック艦隊壊滅を受け、世界各国はまさに海軍の大拡張時代を迎える。米英共にいかに大きな軍艦をたく

さん造るかに血道を上げた。

そのような状態で第一次世界大戦に突入。

ジユットランド沖海戦などもあり、第一次世界大戦後も世界主要国の海軍拡張政策はとどまるところを知らなかつた。

その建艦競争にブレークをかけたのが、アメリカが主導したワシントン会議であり、そこで協定された条約の一つが海軍軍縮条約である。

ワシントン海軍軍縮条約から約十五年間、日本をふくむ五大国（日本、英仏伊）は軍縮条約を通じて、世界の平和に貢献したわけである。

これがいわゆる建艦休止期である。
ネーバルホリデー

まずは大日本帝國海軍連合艦隊とは何か？

連合艦隊とは、国民にとつては帝國海軍のいわば代名詞だった。

一隻以上の軍艦が一人の指揮官に指揮されるとき、艦隊と呼んだ。

二個以上の艦隊を一人の指揮官で指揮するとき、連合艦隊と呼んだ。

連合艦隊は当初、大演習のときや戦争のときに編成されていた。

連合艦隊の制度は明治17年（1884）にできたが、はじめて連合艦隊が編成されたのはそれから十年後の明治27年（1894）だった。

それまでは艦隊の規模が小さく、連合艦隊を編成するほどではなかった。

ところが、清国との戦争が現実の問題となつて、常備艦隊に当時の小さな艦隊をまとめてはじめて連合艦隊とし、伊藤中将が司令長官となつた。

日清戦争が終わると連合艦隊は解散した。

再び連合艦隊が編成されたのは十年後、日露間に戦雲がただよい始めてからである。

この連合艦隊も戦争が終わると解散した。

しかし、明治末に一回、大正4年（1915）からはほぼ毎年、大演習のたびに連合艦隊が編成され、演習が終わるて解散した。

昭和8年（1933）5月に連合艦隊が編成され、以後は解散することなく、常置することになった。

連合艦隊司令長官は、帝國海軍の主要艦艇をほとんど指揮下にいた、その重責を担つた者は初代以来31代24人である。

簡単ながらこれを連合艦隊についての説明とする。

次にこの小説の中での活躍を説明する。

この小説では大日本帝國海軍連合艦隊の南雲機動艦隊はハワイ真珠

湾を奇襲していないのは先に書いた。

南雲機動艦隊は南方地帯におもむき、フィリピンを奇襲した。

フィリピンを奇襲した事により、マッカーサーは戦死した。

そのおかげでフィリピンは1週間で陥落。

その後南方地帯で南雲機動艦隊は上陸作戦の援護を担当。

マレー半島・スマトラ・ボルネオ・セレベス・ニコーギニアを占領するにいたる。

そして問題のミッドウェー島はとづつと、『赤城』『加賀』『蒼龍』が大破するも上陸作戦に成功。

ミッドウェー島を占領するに至った。

その後『赤城』『加賀』『蒼龍』は『霧島』『榛名』『飛龍』『瑞鶴』『翔鶴』の曳航作業により日本に無事帰還することに成功。

その後『赤城』『加賀』『蒼龍』は修理のついでにアングード・テツキと蒸気力ターパルトを装備する改修を受けた。

『飛龍』『瑞鶴』『翔鶴』も3隻の修理改修後に同じ内容の改修を行つた。

今後はニューブリテン島、ブーゲンビル島、ソロモン諸島の攻略を検討している。

以上がこれまでの連合艦隊の活躍である。

さて次にこの小説の大日本帝國海軍連合艦隊の建艦計画について説明する。

まず空母について説明する。

重装甲空母大鳳級

全長280メートル
最大幅58メートル
速力35ノット

高角砲100ミリ速射砲単装10基10門

噴進砲13センチ20連装4基

対空機銃40ミリ4連装40基160門

搭載機110機

艦上戦闘機陣風40機

艦上攻撃機流星40機

艦上偵察機彩雲10機

早期警戒機極星10機

攻撃ヘリ5機

対潜ヘリ5機

同型艦・葛城、天城、阿蘇、生駒、笠置

シリンドリカル・バウを装備。

アングードテッキ及び蒸氣力タパルトを裝備。

甲板に95//1のシズシ甲板を敷き詰めている。

昭和18年の正月には完成を予定している。

まあそれ以外はそれといった艦はない。

以上が1911までの連合艦隊の動向などである。

（後書き）

作者

「さあ、ついに始まりました。」

作者

「艦魂さんいらっしゃいです。」

早紀
「なに騒いでるのよ作者。」

そつ言いながら作者に飛び膝蹴りを炸裂させる。

作者 「グハツツーーー！」

作者 「なにあるんですかーーー早紀様。」

亜由美

「何をおひぱじめるつもつだ。作者。」

喜恵

「教えて下せーい。」

喜恵

作者 「それではお教えしよー。」

作者

「艦魂さんいりひしゃーことは極上艦魂会に所属する先生方の艦魂をお呼びして楽しくじょーとこーつ企画です。」早紀

「ふん。ひまなのね。」

作者

「早紀様。早紀様が何かしらと書いたから企画したのに酷いです。」

早紀

「男がギャーギャーギャーギャー言つたな。」

作者

「はい！ーーー申し訳あつません。ですから何もしないでください。」

「

早紀

「

「まあ確かに私が言つたからね。その行動力には感心するわね。」

亜由美

「よくやつた。大儀であった。」

喜恵

「やりましたね。作者さん。」

作者

「ありがとうございます。いや～。嬉しいですね。こんなに褒めてもらえたとは。」

早紀

「ピキッ！」

作者

「…？」

喜恵

「何か変な音が聞こえたような……」

早紀

「ちよつと亜由美。」

亜由美

「何？姉さん。」

早紀

「例のやつ頂戴。」

亜由美

「はい。どうぞ。」

早紀

「フフフ。これで奴は私の奴隸に」

作者

「あの~。何をしてるんですか?」

早紀

「フフフ。」

作者

「.....怖いです。」

???

「なんなら早紀と一緒にいじめてあげようか?」

作者

「!?

作者

「この声はエリーゼ様のお声つーーー。」

作者

「助けてください。」

フルマラソンを完走出来そうな勢いで走っていた。

早紀

「フフフ。」れいが私の秘密兵器。『エリーゼ声発生機』

喜恵

「どうしたの？それ。」

亜由美

「昨日テレビみてたらタカタの社長さんが紹介してた。」

喜恵

「！？」タカタの社長さん？」

早紀

「8000円で『』提供しますって言つたから。」

喜恵

「それで買つたの？」

早紀

「まあね。」

亜由美

「あなたの貯金から買つたわ。」

喜恵

「うん。」

早紀

「本当？。」

亜由美

「まあこれがあれば、あやつを奴隸にする」とも出来る。」

喜恵

「フフフ。奴隸。」

早紀

「喜恵も私達と手を組まない?」

喜恵

「組むつ……！」

亜由美

「決まりだね。」

早紀

「あいつの奴隸は決まりね。」

「うして悪女3人による作者奴隸計画がスタートした。」

第14話 大日本帝國海軍連合艦隊動向（後書き）

これにて説明などは終わりです。
もどります。

次回から話に

第1-5話 帝國陸軍の反乱（前編）

帝國陸軍のクーデターが計画されていた！――

第15話 帝國陸軍の反乱

昭和も18年に入つてまだ3日しかたつてない1月3日。

この日は大日本帝國にとつては忘れることの出来ない日になった。

帝國陸軍がクーデターを計画している。

この報告は当初、誤報だと思われた。

しかし情報の出所が鈴木商店という事になり、近衛を中心とする帝國政府は鈴木商店の大番頭の金子直吉と高畠誠一との秘密会談を行つた。

昭和17年12月20日

帝國政府代表として

近衛文麿首相

豊田副武海相

栗林忠道陸相

特別に山本五十六連合艦隊司令長官も呼ばれた。

鈴木商店代表として

金子直吉大番頭

高畑誠一社長

なお、金子直吉大番頭とあるが要は会長職である。

豊田は実は両方の代表になつている。

かたや帝國政府の海相、かたや鈴木商店の豊田自動車の社長。

豊田自動車は、戦後に日本を代表する企業の『トヨタ自動車』の前身である。

「金子さん。その陸軍のクーデターはいつなんですか?」
近衛が金子に聞く。

「まあまあ。そつ焦りなさんな。」

「」の高畑が説明するわ。

金子がそつ言つと高畑が説明を始めた。

「それでは帝國陸軍のクーデターがいつ起るかを言います。」

「昭和18年1月3日に帝國陸軍がクーデターを起こします。」

近衛、豊田、栗林、山本が息をのんだ。

「高畠くん。それは確実なんだね。」

山本が高畠に聞く。

「残念ながら山本さん。確実です。」

高畠が続ける。

「昭和18年1月3日には確実に帝國陸軍がクーデターを起こします。首謀者は牟田口廉也、山下奉文、海軍からも嶋田繁太郎が賛同し合計三人です。」

高畠の説明を受け、山本は絶句した。

陸軍だけでなく身内の海軍からも反逆者がでたのだ。

「もう一度聞く。高畠くん。間違いないのだな。」

山本が再度、確認の為に聞いた。

「確かに間違ひありません。我が社の諜報力は戦前のシーメンス事件でお分かりのはずです。」

「まあ。確かにシーメンス事件では世話になつたんだ。鈴木商店の

情報は正しいよ。」

近衛が宥めるよつて言つた。

「わかりました。」

山本が諦めるよつて言つた。

れてシーメンス事件はと言つと。

戦前にドイツのシーメンス社による海軍高官への大贈賄事件である。

この事件も鈴木商店の諜報活動により、極秘の内に解決された。

「そつと決れば第七独立機動艦隊に硫黄島に待機するよつ連絡しなければな。」

山本が言つた。

「長官。なぜ硫黄島なんですか?」

豊田が聞く。

「わからんか?反乱軍が行動を起こすとなれば帝都で行動を起こすに決まつてゐる。だから第七独立機動艦隊を硫黄島に待機させておいて反乱軍が行動を起こしたらすぐさま東京湾に向かわせる。そう考えれば硫黄島に待機させるほつがいいだろ。」

山本は笑いながら言つた。

「最後にじゅが。」れも言わないといけないな。」

金子が最後に言った事は他のものを畠然とさせたことだった。

「陛下を守るべき近衛師団もクーデターに加担する恐れがある。」

「Jの金子の言葉を一回は理解できなかつた……

早紀

「テンション高いわね。作者。」

作者

「早紀様）。愛してまあ～す。」

早紀

「死ねえ～！！！！！」

ドグワアアアアアアン

早紀

「亜由美、喜恵。一斉砲撃！！！！！」

亜由美、喜恵

「了解！！！」

早紀

「由香（大和改）、綾夏（武藏改）、理華（信濃改）。全航空機の
全力出撃！！！」

由香、綾夏、理華

「了解！！！！！」

作者

「や…………めて…………だれ…………い…………」

一同

「問答無用！…………死ねえ！…………」

作者
「ギャー——————」

早紀
「ふつ……馬鹿作者めつ！」

亜由美
「もう復活するな。」

喜恵
「奴隸になるなら復活してもいいですよ。」

作者

「奴隸にでも何でもなりますからもう何もしないでください。」

早紀

「わかつたわ。じゃあこれにサインして。」

作者

「…………。これって人権を無視した内容だよね。」

亜由美

「そんな事ない。」

喜恵

「最低限の人権はあります。」

作者

「だつてこれじやあ。一生奴隸になれつて事じやないか。」
「

早紀

「文句あり?」

作者

「うう……。何もありません。」
「

喜恵

「じゃあサイン。」

作者

「はい。」

こつして作者は悪女達の奴隸になつた。

早紀

「といふで、奴隸。」

作者

「はい。何か御用でしょつか？早紀女王陛下様。」

早紀

「草薙とエリーゼに謝らないといけないんじゃないの？」

作者

「あつ。そうでした。」

作者

「草薙先生。エリーゼ様。申し訳ありませんでした。あれは書いてる途中で思いついたので、確かめをせずに書いたので、あのような間違いを犯してしまいました。申し訳ありませんでした。しかし修正はしません。そのままの方が話的に面白いですから。…………」

亜由美

「そんなに急いで書かなくて良かつたのに」

喜恵

「そうですね。急いで書いて間違いが多いより、ゆっくり書いて間違いが無いほうがいいですよ。」

作者

「ありがとうございます。亜由美女王陛下様、喜恵女王陛下様。」

早紀

「それじゃあ。次回から他の艦魂が出てくれるのね。」

作者

「はい。艦魂を出してもことわり先生がいたりメッセージを送つてください。」

早紀

「そんな事しなくても勝手に書いて投稿したらいいんじゃないの？」

作者

「そんな事言つても早紀女士陛下様。初めて書くんですからどうの先生の艦魂を出すか悩むんですよ。」

亜由美

「優柔不断。」

作者

「申し訳ありません。亜由美女王陛下様。」

喜恵

「まあ。仕方ないです。それでどうするの。」

作者

「最初にメッセージを送つてもうった先生の艦魂を出します。それからはその後の順番に送つてもうった先生方の艦魂を順番に出します。」

亜由美

「回りくどいわね。」

作者

「申し訳ありません。」

早紀

「す、ぐ。オープンな企画ね。」

作者

「はい。早紀女王陛下様。オープンな企画です。」

喜恵

「こんな事しなくて直にメッセージ送つたら良一じゃないですか？」

作者

「はい。確かにそうですが。このような開かれたようにすれば、読者の皆様も楽しんで貰えますから。」

早紀

「やうね。頑張ってよ。」

作者

「わかりました。早紀女王陛下様の為なら何でも致します。」

早紀

「まあ頑張りなさい。我が奴隸。」

さて先生方にご協力お願いします。

どの先生方の艦魂もいいものばかりですから、すいへ悩むんですね。
メッセージの『届いた順番に登場させますので』協力お願いします。

第15話 帝國陸軍の反乱（後書き）

今回は1・3事件発覚編でした。
事件勃発編。お楽しみに。

次回。
1・3

第16話 1・3事件勃発（前書き）

長いです。

第16話 1・3事件勃発

昭和18年1月3日は午前2時から雪だった。

午前3時には雪は激しくなり、間もなく、視界が利かなくなつた。

その中で、麻布歩兵第一連隊の衛門から一台の黒のリムジンが、栗原中尉たちに見送られて、出発した。

目標は大蔵大臣高橋是清の命だつた。

午前3時30分には麻布歩兵第一、第五、第八、機関銃隊の将兵530名が桜田門の警視庁前に到着した。

ただちに正面玄関はおろか建物の出入口すべてに向かつて機関銃が備えられ、小銃分隊が配備された。

そうしておいて、野中大尉は庁内で特別警備隊長岡崎英城に決起の趣旨を読み上げ、警視庁明け渡しと、警視総監への面会を強要した。

岡崎警備隊長は、毅然として拒絶したが、機関銃の前に折れた。

ただちに野中たちは警視庁内に乱入、警視総監の姿を求めた……。

しかし、警視総監は警視庁には居なかつた。

それだけではない。

高橋是清蔵相も居なかつた。

その後も海軍省、陸軍省に押し入つた近衛師団も各大臣が居ない事に気付く。

各大臣及び警視総監は何処に消えたか？

実は全員、横須賀鎮守府に居たのだ。

鈴木商店の情報提供により前日に横須賀鎮守府に集まっていたのだ。

横須賀鎮守府には海軍陸戦隊が20式重戦車を配備して警備を行つていた。

「陸ト。」このよつな場所ですがおくつりకトセー。」

「いや。そのような気は使つでない。」

天皇裕仁は答えた。

「しかし。朕を守るべき近衛師団までもが反乱に賛同するとは……。
…………。情けない。」

天皇裕仁は深くため息をはいた。

「御上」

山本が天皇裕仁に言つた。

「なんだ？ 山本。」

天皇裕仁は聞いた。

「（）の陸軍の反乱は必ずや海軍が解決させます。」

「つむ。朕の信用出来るのは海軍だけだ。頼んだぞ。山本。」

「はつ。必ずや。」

山本は最敬礼をした。

「失礼します。」

伝令が部屋に入ってきた。

「山本長官です。」

「伝令が山本に紙を渡した。

「つむ。」

山本は一息吸いつぶ。

「徒党を組んで陛下に歯向かう輩に天誅を下す。午前6時に陸軍に對して宣戦布告だつ……！」

帝國陸軍versus帝國海軍。

今までに、ちよつとした内戦が始まつていていた。

「やれやれ。遂に陸軍の輩が、やらかしたな。」

第七独立機動艦隊司令長官の小沢が嘆いている。

「しかたありません。いひなれば陸軍の輩に一泡吹かせてやつましよ。」

有賀艦長が小沢に言った。

「まあ有賀君の言つ通りです。陸軍の輩はガツンとやつてやらないとわかりませんからね。」

草鹿も有賀に賛同した。

「それもわづだ。」

小沢が笑いながら言つた。

と、そこへ。

「報告です。『富嶽戦略空軍』が帝都上空に差し掛かりました。」

「つむ。それでは作戦を開始する。」

「了解。」

各員が作戦の準備に入る。

さて『富嶽戦略空軍』といつのは満州北滿小興安嶺の麓にある日本海軍秘密航空基地において、設立された空軍である。

さて『超重爆撃機富嶽』の概要はといつと。

最大速度750キロ

実用上昇限度21500メートル

武装35ミリ機関砲15門

88ミリ4連装口ケット弾発射機4基

搭載爆弾 55トン

航続距離 29500キロ

以上が富嶽の概要である。

この富嶽は史実にも中島航空機の中島知久平が提唱したZ機計画でその計画が残されている。

史実では4発の爆撃機でも開発できなかつたのに6発の爆撃機だから相手にされないはずである。

この世界では中島知久平が山本に請願書を提出し山本が日本の技術力を結集しても完成させると言つた為に開発が始められた。

そのために満州で中島航空機の巨大生産工場が造られた。

そこで完全オートメーション化により大量生産されている。

富嶽は従来の爆撃機の他に爆弾を搭載せずに機関砲を200門搭載した掃射機バージョンと機関砲10門だけの武装で1個大隊と20式重戦車2台を搭載出来る輸送機バージョンの合計3バージョンがある。

さて話がズレたが帝國陸軍鎮圧計画を説明する。

まず降伏勧告のビラを搭載した富嶽にビラを投下させて陸軍に降伏を促す。

もし降伏しない場合は6時の宣戦布告後に富嶽掃射機バージョンと大和改、武藏改、信濃改の搭載している攻撃ヘリの共同で攻撃を開始。

その後横須賀鎮守府付近に強襲揚陸艦で上陸を開始。

横須賀鎮守府陸戦隊と共同で帝都奪還を目指す。

その間、第七独立機動艦隊の各艦は帝都付近に徹底した艦砲射撃を行う。

実はこれは帝都近代化計画に組み込まれたものである。

帝都を近代化させる為の解体作業を艦砲射撃でやってしまおうという事である。

なんとも豪勢だが天皇陛下がお考えになられた事なので反対は出来ない。

なお、帝都都民は年末には全員立ち退きが完了していた。

近代化に伴い、全ての資金を政府が負担するので都民は期待を胸に立ち退いていった。

「御上。時間ですが陸軍は降伏しません。攻撃の「」命令を。」

近衛が天皇裕仁に聞いている。

「うむ。朕は降伏を期待していたが無理なようだな…………。よし。
断腸の思いだが帝國陸軍に対して全面的な攻撃を許可する。」

天皇裕仁が言った。

「はつ。了解しました。山本君。攻撃許可がありました。頼んだぞ。」

「了解いたしました。御上の為にも陸軍の輩を鎮圧させてみせます。」

山本はそつと一息置いて。

「第七独立機動艦隊に命令。帝國陸軍を完全撃滅せよ。」

第七独立機動艦隊旗艦大和。

「山本長官から命令が届いた。大和改、武藏改、信濃改に命令だ。
攻撃ヘリを出撃させよ。」

「了解。」

小沢が言い、参謀が復唱していく。

「よし。強襲揚陸艦は横須賀鎮守府に向かい、その地点で揚陸を開始せよ。それ以外の艦は帝都艦砲射撃を行う。」

「了解。」

小沢が命令を言い終えると大和（早紀）が話しつけてきた。

「本当に帝都に艦砲射撃するの？」

「なんだ？今更遅いぞ。大和。」

小沢が笑いながら言った。

「まあね。仕方ないわね。」

大和（早紀）も笑った。

「もう」の後は言つまでもない。

その後、富嶽掃射機バージョンと攻撃ヘリの攻撃により、反乱軍の半数が戦死。

横須賀鎮守府に揚陸した第七独立機動艦隊特別陸戦隊と横須賀鎮守府陸戦隊は共同で帝都に進撃。

第七独立機動艦隊の艦砲射撃で廢墟となつた帝都に入った。

そこで反乱軍の残存と激突したが海軍側の圧勝。

被害は皆無だつた。

この戦闘でクーデター首謀者の牟田口廉也、山下奉文、嶋田繁太郎の3名は戦死した。

これにより、

クーデター参加者全員死亡により1・3事件は幕を閉じた。

（後書きコーナー）

作者

「第三回艦魂さんいらっしゃい。」

早紀

「え~りく威勢がいいわね奴隸。」

作者

「あつ。早紀女王陛下様。何とですね、今回は凛様、京子様、エリーゼ様が来られるといつののです。」

亜由美

「わ~うなの? 奴隸。」

喜恵

「本當に?..」

作者

「わ~うるうんでい~! ジャーこます。亜由美女王陛下様、喜恵女王陛下様。」

早紀

「で。いつ来るのかな? 奴隸。」

作者

「そひそろ来られると思いますが.....。」

亜由美

「何かきわうな感じがする。」

作者

「何がくるんですか?」

ドグワアアアアアン――――――――

作者

「――?」

宇宙戦艦紀伊登場。

凛

「はじめまして。」

京子

「じゃまあねぞい。」

エリーゼ

「初登場。」

早紀

「あなたが草薙の所の艦魂ね。」

亜由美

「いかがよひじべ。」

嘉恵

「はじめまして。これからよひじべお願ひします。」

凛

「あなたが早紀ね。」

早紀

「――?」

「アリス。」

凛

「アリス。」

早紀

「アリス。」

京子

「うむ。また新たな艦魂の友が増えたのう。」

亜由美

「京子。」

京子

「なんじや。」

亜由美

「よんじや。」

京子

「ええ。アリス。アリス。」

嘉恵

「アリス。」

アリーザ

「何?」

嘉恵

「いろいろお願いします。」

エリーゼ

「フフ。みんな。」

早紀

「ねえ。凛、京子、エリーゼ。」

凛

「何?」

京子

「なんじや?」

エリーゼ

「何か?」

早紀

「ここに一つを奴隸に出来る契約書があるわ。」

京子

「まさか。おぬし……。」

早紀

「そりゃ。そのままか。これにサインさせてあなた達も一つを奴隸にしてやいなさいよ。」

エリーゼ

「フフ。面白い。」

凜

「いいわね。」

京子

「それもいいのよ。」

早紀

「ね。いじめじょ。さあ、そつ決まつたなら早速サインさせましょ
う。」

嘉恵

「どういったの? 奴隸とかは」

亜由美

「わあ。」

作者

「フフフ。私はほひだ。」

早紀

「ん?」

作者

「もうこれ以上奴隸になつてたまるか。」

嘉恵

「奴隸さん。手に拳銃を持つてどうするんですか?」

作者

「フフフ。このダーティーハリー愛用の『44マグナム』で、その

契約書を射ちぬいてやる。」

早紀

「私はダー＝ティ－ハリ－よりもダイハ－ドの方がいい。」

凜

「私はリ－サルウェポンがいい。」

京子

「なんじゃ。私はタ－ミネ－タ－の方がよいの。」

エリ－ゼ

「あぶない刑事の方がいい。」

早紀

「そうね。」

作者

「特攻野郎Aチ－ムもいいですね。」

凜

「そうよね。特攻野郎Aチ－ムもいいわよね。」

京子

「ハンニバル大佐の作戦が面白いの。」

エリ－ゼ

「モンキーもなかなか。」

早紀

「フュイスマンもいいますよ。」

嘉恵

「コングさんもいいますよ。」

エリーゼ

「そうね。」

作者

「ちょっと待つたあー」

早紀

「何?」

作者

「なぜ早紀女王陛下様達がダーティーハリー やリーサルウェポンや
ターミネーター や特攻野郎Aチームを知ってるんですか?」

一同

「気にしない。気にしない。」

作者

「…………。まあいいです。それじゃあその契約書を灰にします。」

「

早紀

「出来るの?」

作者

「弓道部の意地です。」

「

凛

「じゃあ。射つてみたら？」

作者

「もちろんです。覚悟……！」

力チツ！！！！

作者

「！？」

亜由美

「探し物はこれかな？」

そう言いながら弾を足元へ落とす。

作者

「なぜ…………。亜由美女王陛下様が弾を。」

エリーゼ

「あなたの負けよ。」

作者

「！？なぜエリーゼ様はプレデーター（米陸軍歩兵用対戦車ロケット）と RPG7（旧ソ連対戦車ロケット）を持っているんですか？」

作者

「早紀女王陛下様も何故にM63機関銃（米陸軍歩兵用機関銃）を」

早紀

「亞由美女王陛下様と喜恵女王陛下様はM4A1 + M203 (M16 M4シリーズのハンドガード下面にM203グレネードランチャーの装備を可能にした自動小銃) を持っているんですか?」

早紀

「京子様と凜様はM4A1 (米軍全般に配備されている騎兵銃) を持つて……。」

一同

「死ねえ～～

作者
「お許しを～」

作者
「グスツ」

エリーゼ

「泣かないでサインしまじょうね。」

京子

「サイン。サイン。」

凜

「2人の笑顔がいつもと違ひ。」

作者 「うつ。すいませんでした。」

サインを終えた作者。

エリーゼ

「いいわよ。許してあげるわ。奴隸。」

京子

「奴隸。遠慮するでない。」

凛

「まあ。奴隸がいるってのはいい気分ね。」

作者

「凛女王陛下様、京子女王陛下様、エリーゼ女王陛下様。これからよろしくお願ひします。グスッ」

早紀

「そりそろ時間じゃないの?」

凛

「あらつ?本当だつ!――京子、エリーゼ。帰るわよ。」

京子

「はいはい。」

エリーゼ

「そうだな。」

嘉恵

「また来て下さいね。」

亜由美

「また会えると信じてこらだ。」

凜

「もうろこんよ。」

京子

「そりばである……。」

エリーゼ

「また会おう。」

早紀

「ちよっと。忘れ物よ。」

凜

「ああ。大事な契約書。」

早紀

「それは絶対に無くさないでね。」

エリーゼ

「任せられよ。」

京子

「それでは、次こそやうがだ」

宇宙戦艦紀伊ワープ。

早紀

「さて。これで他の艦魂との交流が始まったわね。」

亜由美

「奴隸。次回は誰を呼ぶの？」

作者

「次回は零戦先生の艦魂をお呼びします。」

早紀

「ふ～ん。頑張るのよ。」

作者

「イエス・マイロード。」

草薙先生如何でしたでしょうか？
「ご感想お待ちしております。」

第16話 1・3事件勃発（後書き）

本編は次回陸軍反乱の後始末（？）をします。
一は零戦先生の艦魂をお呼びします。

後書きコーナ

第17話 第IIの懸念（前書き）

短いです。

第17話 第IIの艦隊

昭和18年1月4日。

1・3事件から一夜明けた帝都は淡々としていた。

第七独立機動艦隊が徹底的な艦砲射撃を行つたおかげで瓦礫の山となつていた。

このような状況にあっても帝都はすでに復興に向けて作業が始まつていた。

帝都の完全復興には2年を予定していた。

しかしおかしな状況である。

皇居と国会議事堂、日本武道館を除いて瓦礫の山となつているのだ。

そして山本は皇居に呼ばれていた。

「山本。 今回は大義であった。」

天皇裕仁が讃えている。

「御上。 ありがとうございます。」

山本が照れている。

「うむ。よくやつた。」

天皇裕仁が続ける。

「しかし。山本に質問があるのでが。」

「はつ。なんでしょうか?」

山本が尋ねる。

「先日、陸軍反乱軍を壊滅させた第七独立機動艦隊とはなんだ?」

天皇裕仁が答える。

「了解しました。それでは第七独立機動艦隊について説明します。」

山本は第七独立機動艦隊について説明を始めた。

「そのような艦隊が存在していたとは…………」

天皇裕仁が考え込む。

「…………」

山本が緊張した面持ちで返事を待つている。

「では。セイロン島を占領し、英東洋艦隊を壊滅させたのも、第七独立機動艦隊なのだな。」

天皇裕仁が言った。

「はい。そうです。」

山本が緊張しながら答えた。

「さうか…………。では小沢も呼んで話を聞きたいな。」

天皇裕仁が言った。

「了解いたしました。」

山本はそう言つと小沢に連絡を入れた。

その後、天皇裕仁と山本、小沢の3人で数々の事が決められた。

- ・第七独立機動艦隊は緊急時の場合のみ、天皇及び連合艦隊司令長官の指揮下に入る。

・通常時は第七独立機動艦隊司令長官の独自判断に任せられる。

・第七独立機動艦隊は帝國臣民には公表する。

などが、決定した。

この他に近衛首相を呼んで、帝國全体の改革について話し合いたいをしました。

帝國の改革については基本的に戦後の話なので第2部で語らせてもらひます。

ここまで言つてしまつたから全て話すが、今読んで頂いているこの小説と、これが完結した後に書き始める、戦後からの日本の歩みを描く、2部構成になつております。

ですので、この小説が完結しても、第1部が完結しただけで、第2部がすぐに（？）始まりますので、よろしくお願ひします。

さて、話がそれたので話を戻したい。

皇居で、話が行われた翌日の1月5日。

帝國中が驚いた。

連合艦隊、連邦商路護衛艦隊の他に、第七独立機動艦隊と言つ第三の艦隊が存在したからである。

連邦商路護衛艦隊は鈴木商店の私設艦隊の為、設立前から国民に知れ渡つていたのである。

第七独立機動艦隊は日本国民に拍手で受け入れられた。

アメリカ合衆国との、一大戦争の真っ只中にあるのだから、当然のことである。

そして、1月6日。

第七独立機動艦隊は、ブーゲンビル島及びガダルカナル島及びツラギ島からなる、ソロモン諸島占領の為に硫黄島の南西185キロ地點にいた。

その同じ時間帯に、新生米太平洋艦隊はハワイ真珠湾を出港した。

目的地は.....

ソロモン諸島

第17話 第IIの艦隊（後書き）

皆様（？）申し訳ありません。

魂を出す予定でしたが。

思います。

せんでした。

零戦先生。

次回にしていただきたいと

申し訳ありません

零戦先生の艦

第18話 琉球海の悲劇前編

昭和18年1月10日。

第七独立機動艦隊はラバウルにいた。

南太平洋の制海権を取り、オーストラリア及び、ニュージーランドの連合国離反を狙う日本には、ソロモン諸島に居座るアメリカ軍は厄介な存在であった。

その為、艦隊をソロモン諸島に派遣し、ソロモン諸島を占領しようとしたのである。

そのついでに、太平洋艦隊を壊滅させれば、一石二鳥であると考えたのである。

しかし、そこで問題が発生した。

連合艦隊のどの艦を使っても、そのような余裕を持って作戦を行える艦隊がなかったのである。

そこへ、突然の如くに第七独立機動艦隊といつ、第三の艦隊が存在したのだ。

このチャンスを海軍軍令部は逃さなかつた。

この艦隊にソロモン諸島上陸作戦をやつてもうむりと考えたのだ。

しかし、第七独立機動艦隊に命令出来るのは、緊急時の場合のみに天皇と連合艦隊司令長官が命令出来るのだ。

その為、IJの作戦は白紙になるかと思われたが、小沢がこの作戦に出撃する事に承諾。

そして今の状況に至る。

「彩雲からの報告はまだないか？」

小沢が草鹿に聞く。

「今のことにはまだ報告はありません。」

草鹿が残念そうに言つ。

「そうか。仕方ないな。」

小沢が慰めるように言つ。

「早く見つけて欲しいわよ。」

「まあ。そう言つな大和。」

大和（早紀）が不機嫌そうに言つ。

「早く敵を叩き潰したいのに見つからないなんて……」

「わかつたわかつた。そこまで言つなら、敵に有りつけの砲弾を打ち込んでやれ。」

小沢が言つ。

「当たり前よ。弾が無くなれば体当たりしても敵を沈めてやるわ。
ねつ有賀。」

大和（早紀）が有賀に同意を求める。

「んつ？何が？」

有賀は話を聞いてなかつたみたいだ。

「有賀！人の話を聞けーい。」

大和（早紀）が怒る。

「人の話つて。お前人間じやないだろ。」

有賀が言つ。

「なつ！――！」

大和（早紀）が顔を赤くする。

この2人の会話に艦橋は笑いに包まれた。

この前の1・3事件以来、艦橋のスタッフ全員に艦魂が見えるようになつた。

そこへ。

「報告です。武藏改の彩雲偵察機からの連絡です。『我ニコージョージア島の西340キロの地点に太平洋艦隊を発見。現在、補給作業中。』です。」

待ち望んだ連絡が届いた。

「よし。太平洋艦隊攻撃の為、出港する。」

小沢が言った。

「了解。」

「ニコージョージア島近辺を哨戒していた、潜水戦隊に太平洋艦隊攻撃命令を出せ。」

小沢が続ける。

「了解しました。」

さて、太平洋艦隊攻撃命令を受けた潜水戦隊は早々と準備を済ませ、太平洋艦隊を捕捉していた。

「つよいよいいるべ。」

伊一　一艦長の橋本金伍大佐が言った。

本来、大佐といつ階級ならずでに潜水艦の艦長は卒業してワソングンク上の役職に着いているはずだが、未曾有（みぞう）と読む。何処かの總理みたいにみぞゆうと読まなによつに……の潜水艦配備の連絡に血ひりの潜水艦の艦長に志願したのである。

この他に橋本は自分と仲のいい者を呼び、各役職につかせてくる。

「艦長。どうしますか？」

砲雷長の久保田が聞く。

「もうひろひろ雷撃するや。」

橋本が言つた。

「よし。一番から三番まで魚雷発射用意。」

「一一番から三番、魚雷発射用意。」

砲雷長が復唱する。

「うう……。」

前部の6門ある発射管から3本が飛び出していった。

敵艦隊はまだ気付いてないみたいだ。

そこへ3本が3隻の駆逐艦に命中した。

凄まじい水柱があがるとともに衝撃で、弾薬庫が誘爆。

敵駆逐艦は横倒しとなり、そのまま沈没した。

絵に描いたような轟沈である。

ほかの護衛艦が事態に気付き、反撃態勢をとるまでに数十秒の間があった。

目標のタンカーは、ちょうど護衛艦の隙間に位置し、しかも止まっていたので、照準は容易であり、橋本は残り3本の発射を命じた。

3本の魚雷は護衛艦の間をすり抜け、不運なタンカー3隻の横つ腹に突き刺さった。

タンカーは3隻共に1万トン級で、航空ガソリンを満載していたからたまたものじゃない。

たちまち大爆発を起こし、紅蓮の炎が中天を焦がした。

「よし。」

橋本が喜んでいる。

「よかったです。」それで一安心です。」

伊一一（舞）が橋本に言っている。

「そうだな。」ん？……」

橋本が黙り込んだ。

「どうしたの？艦長？」

一（舞）が聞く。

「喜べ。――――お前の妹達がやつてくれたぞ――――もう数えきれない――――」

橋本が興奮気味に言う。

「あの子たち、やつてくれたんだ。」

一（舞）が嬉しそうに言う。

この時、舞の妹である伊一（乱）、伊一三（華）が全門一斉発射を行い、全弾命中。

タンカー12隻を撃沈する戦果を上げたのである。

これを一（舞）と合計すると、駆逐艦3隻、タンカー15隻を撃沈する戦果を潜水戦隊は出したのだ。

この攻撃により、アメリカ太平洋艦隊は戦う前から一方的にタンカーを壊滅させられた。

アメリカ太平洋艦隊旗艦モンタナ

「くそっ！……ジャップめつ！……！」

アメリカ太平洋艦隊司令長官のウイリアム・ハルゼーは怒り狂っていた。

何せ、突然の潜水艦の雷撃により、輸送船団が壊滅したのだ。

ハルゼーでなくとも怒り狂ったはずだ。

「敵の本隊を捜せつ！……絶対に本隊がいるはずだ」

ハルゼーの勘は当たっていた。

事実、あと4時間程で両艦隊は激突するのであった……

「後書き」コーナー

作者
「艦魂さんいらっしゃーい。」

早紀
「で。奴隸。今回はどうの艦魂をよぶのだ?」

作者
「今日は零戦先生の艦魂をお呼びします。」

亜由美

「奴隸。早く呼べ。」

作者

「はいっ！――分かりました。それではお呼びします。瑞鶴様と金剛様です。」

瑞鶴

「じやまするよ。」

金剛

「失礼する。」

作者

「はじめまして。瑞鶴様、金剛様。」

「

早紀

「いわかのよみこへ。」

亜由美

「まあ。仲良くなれ。」

嘉恵

「嘉恵と申します。よろしくお願ひします。」

瑞鶴

「よみこへ。」

金剛

「礼儀正しくてよい。」

早紀

「よろしくね。瑞鶴、金剛。」

瑞鶴

「よみこへ。みるくへ。」

金剛

「よみこへ。」

早紀

「ねえ。瑞鶴に金剛。」

瑞鶴

「何?」

早紀

「これ。なんだかわかる。」

そつ言いながら紙を出す。

金剛

「もしや。それは、作者を奴隸に出来る紙ではないのか?」

早紀

「そつよ。これであいつを奴隸にしましょ!」

亜由美

「またしても、姉が他の艦魂に作者を奴隸にさせよ!とじこるわ。」

喜恵

「姉さんは〇〇ちゃんを全ての艦魂の奴隸にしよう計画してこるわ。」

「

亜由美

「姉の考えはわからん。」

喜恵

「まあ、この後の展開を期待しましょ!」

瑞鶴

「面白い。奴隸に出来るなら奴隸にしてしまお!」

金剛

「面白い。」

早紀

「ねつ。早速あいつを呼んで、調印式を済ませてしまいましょう。」

瑞鶴

「早い方がいいからね。」

金剛

「確かに。」

早紀

「さて。奴隸は何処へ行つたかな?」

作者

「ハハハ。私はここだ。」

金剛

「おいおい。なんであんな所にいるんだ?」

作者

「よぐぞ、聞いてくれた。金剛様。これを見よ。」

大海原を疾走するアメリカ製の艦隊。

早紀

「亞由美つ――! 解説しなさい。」

亞由美

「いま奴隸が乗っているのは、戦艦ミズーリね。その両サイドには原子力空母のジョージ・ワシントンとカールビンソン。そのまたよこにエイブラハムリンカーンにステニス。その周囲にタイコンデロガ級が30隻、アーレイバーク級が90隻。その上空にはF22とF35が各100機飛んでるわ。」

喜恵

「あんな未来の艦隊が相手じゃ、手も足も出ないじゃない。凛がいればよかつたのに。」

早紀

「亞由美。全砲門一斉掃射。」

亞由美

「了解。」

主砲を発射する亞由美。

金剛

「これが51センチ砲の砲撃……」

喜恵

「でも。私達の砲弾って効くのかな……？」

早紀

「フフフ。普通の砲弾じゃないのよね。」

喜恵

「？」

バシュウツツツ……！

嘉恵

「なつ……？」

瑞鶴

「……？」

金剛

「なんで」ことだ……」

早紀

「小型核砲弾。」

亜由美

「タカタの社長さんのテレビショッピングでうつってた。」

作者

「なんで」「なん」とい……」

早紀

「ああ。調査だよ。」

瑞鶴

「早紀。」

金剛

「何？」

「 もういいではないか。」

早紀

「 と言いつと? 」

金剛

「 こんな大和魂を持つた奴は久しぶりに見た。」

瑞鶴

「 だから許してやる。」

作者

「 瑞鶴様、金剛様万歳￥（^○^）／＼」

早紀

「 それじゃあ、今回は許してあげる。」

作者

「 ありがとうございます。早紀女王陛下様。」

瑞鶴

「 それじゃあ、帰るわ」

金剛

「 失礼する。」

喜恵

「 あら。もういない……」

亜由美

「疲れたんだろ？。」

作者

「さて、零戦先生。こんなになりましたが、如何でしたでしょうか？」

作者

「ご感想お待ちしています。」

第18話 珊瑚海の悲劇前編（後書き）

次回、第七独立機動艦隊とアメリカ太平洋艦隊との艦隊決戦。
ご期待を

第1-9話 瑞瑚海の悲劇後編（前書き）

ユニーク数が1万を越えました。
ざいます。

ありがとうございます

第19話 珊瑚海の悲劇後編

昭和18年1月10日午後6時。

第七独立機動艦隊の水上レーダーが、アメリカ太平洋艦隊を捉えた。

「よし。機動群と輸送船団は戦域を離脱せよ。」

小沢が言った。

「艦長。敵の実力は未知数だ。つまいこと戦つてくれよ。」

小沢が有賀に言つ。

「お任せください。」

有賀が答える。

「艦長。敵艦隊を射程内に捉えました。」

「わかつた。5万メートルになつたら砲撃を始める。」

「了解しました。」

砲術長が答える。

『三式射撃レーダー』を装備しているので、最大射程でも初弾命

『三式射撃レーダー』を装備しているので、最大射程でも初弾命

中が出来るのである。

「覚悟しろ。アメリカ軍。」

大和（早紀）が言った。

アメリカ太平洋艦隊旗艦モンタナ。

「長官。ジャップを見つけました。」

レーダー係が言つ。

「よし。砲戦用意、目標、前方の日本戦艦。」

ハルゼーが命令した。

その時、先頭の敵艦…………見たこともない巨艦の真っ黒なシルエットがあつと、目もくらむ炎を発した。

この時日本艦隊も単縦陣を形成、敵艦に対して正体していたので、前部の6門しか使えない。

したがつて、6つの砲火が閃いた。

「敵が撃つきました。」

見張り員が叫ぶ。

「なんと、射程5万です！！！」

実は5万5000メートルから可能なのだが、ハルゼーは知らなかつた。

敵からの砲弾がモンタナの右舷にいたオハイオに命中した。

ドグワアアアアアン

田を背けたくなりそうな炎が上がる。

恐ろしい炎柱が消えると、そこには……

オハイオの姿はなかつた。

オハイオ轟沈。

「なつ…………なんて…………なんて奴だ。」

ハルゼーが言つた。

「オハイオが、轟沈？」

今の状況を認めたくない艦長が嘆く。

「機関、最大戦速。針路45に変針、敵に対して平行針路をとる。」

ハルゼーが命令する。

生き残ったモンタナ、アイオワ、ニュージャージー、ミズーリ、ウイスコンシン、ノースカロライナ、ワシントンがいっせいに45度に変針した。

変針がおわると、再び単縦陣に戻る。

そこへ、次の砲撃がやって来て、今度はワシントンの艦橋に直撃し機関室も壊滅した為、ワシントンは漂流を始めた。

「糞つ！……ジャップめ。」

ハルゼーが言った。

そこへ、待ち望んだ報告が来た。

「射程距離に入りました。」

航海長が報告した。

「よし。あのモンスターにぶちこんでやれっ……！」

ハルゼーが叫ぶ。

「イエッサー」

砲術長が答えた。

ハルゼーの怒りが砲弾に込められ敵艦に向かっていく。

50余りの砲弾が敵戦艦に命中したかと思つと、

ズガアアアアン

凄まじい音と共に砲弾が弾き飛ばされた。

「何つ？」

ハルゼーは我が目を疑つた。

今、目の前にいる敵戦艦は50余りの砲弾を弾き飛ばした。

「突撃……」

ハルゼーがつぶやく。

「はつ？」

艦長が聞く。

「突撃だつ――――――撃つて撃つて撃ちまくれつ――――――」

ハルゼーが怒り狂つたように叫つ。

「イ、イエッサー。」

艦長が答えた。

モンタナが速力を上げ始めたが、そこに。

ドガアアアアアン

ノースカロライナが中央から真つ一につになりながら沈んでいった。

「糞つ！……ジャップめつ！……！」

ハルゼーはやり場のない怒りを覚えた。

「艦長。機動群に命令だ。『航空機隊を出撃させ、敵艦隊を攻撃せよ』だ。」

「了解しました。」

艦長が答える。

「フフフ。さすがのモンスターも海空の両方からの攻撃には耐えれないだろ？」

ハルゼーは言った。

だが――――

「長面……！大変です。」

艦長が血相を変えて艦橋に飛び込んできた。

「どうしたんだ？艦長。」

「大変です。機動群の全空母の飛行甲板が大破したとの事です。」

「何つ？」

「しかも、それだけでなく、降伏勧告を受け入れて敵艦隊に降伏しました。」

艦長がそう言つと。

「何だと…………私の許可なしに降伏したこと!?」

ハルゼーは混乱した。

さて、ここでアメリカ空母群降伏の真相を語ると。

艦隊決戦の前に第七独立機動艦隊は機動群を輸送船団と共に離脱させたが、ただ単に離脱させたのではなかつた。

敵も離脱させるであつて、機動群を大破させて、鹵獲するよう命令させたのだ。

そして敵機動群を発見した第七独立機動艦隊の機動群は航空攻撃を決行。

陣風の対地口ケット弾と流星の対艦口ケット弾攻撃により、飛行甲板は一瞬の内に大破炎上。

空母としての機能を失った。

そこへ、大和改、武藏改、信濃改が到着。

降伏勧告を行うと、案の定降伏した。

これにより、第七独立機動艦隊はエセックス、ハンコック、フランクリン、キャボットを鹵獲する事に成功した。

「糞つ！……突撃だつ！……」

ハルゼーは命令した。

「了解しました。」

艦長が答えた。

ドグワアアアアアアン

「今度は誰が沈んだ？」

もはやハルゼーことつては、爆発音＝沈没が定着した。

「ウイスコンシンです。」

艦長が言った。

「糞つ……！」

ハルゼーが言つた。

「あのモンスターめつ……！……あいつにダメージを『えられたのか
？』

ハルゼーが聞く。

「いいえ。被害といえば、艦首部の火災位でしようか……」

艦長が言つた。

「艦長……」

「はい。長官何でしうか？」

艦長が聞く。

「もう、無駄だな。」

「はい？」

艦長が理解できませんでしたと云つ顔をする。

「降伏しよう。」

ハルゼーが落ち込みながら云つ。

「…………」了解しました。

艦長が言つた。

「敵艦隊に連絡だ。『我降伏の意思あり』だ。」

ハルゼーが言つた。

「了解しました。」

海戦は終わった。

結果から云ふと、アメリカ太平洋艦隊、全空母鹹獲。

戦艦モンタナ、アイオワ、ニュージャージー、ミズーリ、ワシントン鹹獲。

戦艦オハイオ、ウィスコンシン、ノースカロライナ沈没。

駆逐艦全滅。

巡洋艦は全て生き残り、ハルゼー以下、巡洋艦に乗り移りハワイへ

と帰還した。

第七独立機動艦隊の被害であるが、

大和・小破

武藏、信濃・対潜ヘリ大破

以上が第七独立機動艦隊の被害である。

第19話 瑞湖海の悲劇後編（後書き）

如何でしたでしょうか？ 次回は海戦のその後を書きたいと思います。

第20話 南太平洋戦線の終結

昭和18年1月20日

第七独立機動艦隊は旅順港に帰還した。

1月10日に太平洋艦隊と砲撃を行い、見事にそれを撃破した第七独立機動艦隊はソロモン諸島に上陸を開始し、ブーゲンビル島及びガダルカナル島及びニュージョージア島等の主要な島を占領した。

ソロモン諸島を占領し、アメリカとの連絡網を断たれたオーストラリア政府とニュージーランド政府に対し、小沢は山本と近衛とのかねての計画通りに条件付き降伏の勧告を行つた。

オーストラリアとニュージーランドにあるアメリカ軍司令部は、当然のこととこれを無視した。

しかし、アメリカとの連絡網を遮断された事実は隠しようもなく、このニュースは、一昼夜にして全世界を駆け巡ったのである。

このニュースを知ったルーズベルトは、ただちに連合国首脳と連絡を送り、動搖することがないよう注意を促した。

この時期、じつは連合国首脳のあいだには、たとえ国士の一部を占領されるようだと、けつして降伏しないとの合意事項が交わされていた。

それをルーズベルトは、たんに確認したかつただけである。

ただし……

この連合国首脳の中に、オーストラリアとニュージーランドは含まれていなかつた。

あくまでアメリカ・イギリス・フランス・オランダというヨーロッパ中心の欧米列強諸国で構成され、オーストラリアやニュージーランドは、旧大英帝國連邦の一員として、イギリス政府の下とみなされていたのである。

そこで英首相チャーチルは、オーストラリア政府に対し、焦土作戦を覚悟で敵の要求を無視せよと連絡してきた。

これにカチンときたオーストラリア政府が、一種のサボタージュを開始したのである。

しかも、もつと切実な状況に陥つたニュージーランド政府は、単独で帝國政府に条件付き講和を受け入れるむね、申し出てしまつた。

その条件とは、あらゆる戦争責任を問わぬ事と、今次大戦における非武装中立を確約する事、民間ベースでの完全自由貿易を即時実施することだったのでした。

国土占領もなく、政府解体もない。

なんとも敗戦国にとつては甘い条件である。

飛びつくのも無理はない。

ニュージーランド政府に講和を申し出された大日本帝國政府は判断

を御前会議に上梓してしまつた。

そして、もともと避戦を望んでいた天皇の直裁で、講和が成立した。

この衝撃は巨大だつた。

よもや霸権主義一辺倒だと思われていた大日本帝國がここまで讓歩した講和を呑むとは、どの国も思つていなかつたのだ。

こうなつてしまつと、親日傾向の強いインドが揺ればじめる。

日本が本気で、大東亜共栄圏構想を実施するつもりであることを、今回の講和で見せつけられたからだ。

占領ではなく同胞とするのは、共栄圏の基本である。

これにより、もとから中立を宣言していたソ連などは、スター・リンガ猫撫で声ですりよつてくる始末である。

かくして。

猛烈な阻止工作を展開した合衆国がいたにもかかわらず、昭和18年1月18日、オーストラリア政府とインド政府はニュージーランド同様の条件付き降伏を正式に受け入れた。

これにより、アメリカ軍は南太平洋の足掛かりを失うことになった。

「よお。小沢、草鹿。」

小沢と草鹿が港に着くと、山本が声を掛けた。

「^{長官}。わざわざありがとうございます。」

草鹿が言つ。

「今回はずやつ^{長官}だけですね。」

小沢が言つ。

「ああ、そうだ。近衛首相は、今や友邦となつたオーストラリアや
ニュージーランド、インドとの自由貿易の調整に奔走しているし。
豊田はオーストラリアとニュージーランドの海軍の整備を検討して
いるからな……」

山本が言つと、

「^{長官}はどつなんですか？」

小沢が聞いた。

「私は連合艦隊司令長官だから、連合艦隊の事を考えていいればいい
んだ。」

山本が笑いながら言った。

「それで長官。 今回は何が目的で来たんですか?」

草鹿が聞いた。

「おお。 そうだった。 小沢に草鹿。 これを見ろ。」

山本が右腕を擧げると海の向こうから4つの飛行物体が爆音と共に現れた。

「お知らせへ

現在、攻撃ヘリコプター及び対潜ヘリコプターの改良型の名前を募集しています。

いい名前が思い付いたら連絡してください。

ご協力お願いします。

第20話 南太平洋戦線の終結（後書き）

次回、4つの飛行物体の正体が！？

第21話 日本航空機産業の底力

山本が右腕を挙げた方向を見ると黒い飛行物体が4つ、こちらに向かってきた。

「…………」

小沢が啞然としている。

「ジヒツト機？」

草鹿が言つた。

「そうだ。草鹿。あの4つの航空機は現在の日本航空機産業の集大成だ。」

山本が言い切つた。

「ジヒツト……機

小沢が夢でも見ているかのよつこづぶやいた。

キュイイイー——ン

4つの真つ黒な航空機が滑走路に着陸した。

「それじゃあ、現物を見ようではないか。」

山本はそう言つと滑走路へと歩いていった。

「長官。行きましょ。」

草鹿が言った。

「ああ、そうだな。」

小沢はそう言つと、草鹿と滑走路へ向かつた。

小沢と草鹿が滑走路へ着くとパイロット4人が山本と話をしていた。

「おお、二人共遅かつたな。」

山本が笑いながら言つた。

「よし。笹木少将。説明を始めてくれ。」

山本がパイロットの1人に言つた。

「了解いたしました。」

笹木と言われた人物が応えた。

「小沢さん、草鹿さん。はじめまして。笹木と申します。海軍の技術少将です。」

笹木は言った。

「それでは、このジェット機について説明します。」

笹木が説明を始めた。

「まず、私が乗ってきたのが、艦上戦闘機轟天です。そして、その横が艦上攻撃機海王です。海王の横が艦上偵察機嶺花です。嶺花の横が、早期警戒機星雲です。」

「まず、ジェット機の簡単な構造について説明します。」

「簡単に言つと、ジェット機といつのは、そつ、ゴム風船を膨らましてそれを投げると、風船が宙を飛ぶのを小沢さんもご存じでしょう。」

笹木が聞くと。

「勿論だ、子供たちがそんなふうにして遊んでいるのを見たことがある。」

小沢が言った。

「ジェット機は、簡単に言えばその空気を絶え間なく噴き出す」とを可能にさせたエンジンだと思つていただければいいかもしれません。もちろん、ジェットエンジンが噴き出すのはゴム風船の空気とは違いますがね。」

笹木は言った。

「まず、轟天の概要を説明します。最大速度は1250キロ、実用

上昇限度は18300メートル、武装は58ミリ機関砲2門、15ミリ機銃2門、空対空ミサイル8発、空対艦ミサイル6発、航続距離は9300キロです。ミサイルは全て機体内的ウエポンベイに内蔵しており、空気抵抗は少ないはずです。」

笹木が言つと、

「ミサイルとは何だね？」

小沢が笹木に聞いた。

「ミサイルとは、簡単に言えばそれじたいが敵機に向かい自動的に追尾し、攻撃する、追尾弾と言えばいいでしょうか。」

笹木が言つた。

「何となくミサイルが解つた。」

小沢が言つた。

「それでは海王について説明します。最大速度は930キロ、実用上昇限度は13500メートル、武装は20ミリ機銃5門、空対艦ミサイル8発、爆装は1トン徹甲弾2発、クラスター弾4発、航続距離は9000キロです。ジェット機にしたので雷装は破棄しました。」

「次は嶺花の説明です、最大速度は1300キロ、実用上昇限度は9300メートル、航続距離は11500キロです。」

「星雲は最大速度1150キロで実用上昇限度は13000メートル

ル、航続距離は10500キロです。全4機種とも双発ジェット機です。」

笛木が言った。

「長官。凄いです。日本にこれほどの航空機を造る事の出来る技術があつたとは。」

小沢が山本に言つてゐる。

「確かに。私も驚いたさ、初めてジェット機を見た時にはな。」

山本が続ける。

「そこでだ、小沢。お前の艦隊にこのジェット機4つを配備するんだが、誰でもそうだが、ジェット機なんて初めてだろ?だから1ヶ月の間空母の奴らを訓練させないといけないんだ。」

山本が言つた。

「わかりました。長官。空母群を訓練に残します。」

小沢が言つた。

「小沢。空母群だけじゃないんだ。」

山本が言つた。

「他にあるんですか？」

小沢が聞く。

「潜水艦も全て改装する。」

山本が続ける。

「いや、第七独立機動艦隊全艦につけよつとした装置を装備させる。」

山本が言つと。

「了解いたしました。第七独立機動艦隊は全艦1ヶ月の間改装に入ります。」

小沢が言つた。

昭和18年2月20日。

第七独立機動艦隊は改装が終わり、旅順港を出港した。

目的地は

アメリカ本土西海岸

「後書き」「一ナーバー」

作者

「いやはや、結構長いこと続いている、艦魂さんいらっしゃいです。」

早紀

「今日は誰を呼んだの？奴隸。」

作者

「今日は一等海士長先生の艦魂をお呼びしました。」

亜由美

「早く呼べっ……！奴隸。」

作者

「了解いたしました。亜由美女王陛下様。」

作者

「それではお呼びします、摂津様と樺野様です。」

摂津

「はじめまして。摂津です。」

樺野

「は、はじめまして。樺野ですっ……！」

作者

「樺野様。めっちゃ可愛いです。もはや天使ですっ……！」

樺野

「そつ……そんな事言われてても。」

作者

「可愛いですっ……！胸をちょっといいですかから触らグハッツ

ツツ

樺野

「…。007やん……？」

早紀

「樺野大丈夫？」

亜由美

「この奴隸が迷惑をかけたな」

喜恵

「大丈夫ですか？樺野さん？」

摂津

「樺野大丈夫？」

樺野

「大丈夫ですが、〇〇〇さんは、どうなったんですか？」

早紀

「ああ、奴隸なら私と亜由美と喜恵の一斉砲撃でどこかへ吹っ飛んだわ。」

亜由美

「たぶん、もうすぐ戻ってくるわ。」

ドカツツツ

樺野

「ひやつ！！」

摂津

「よく飛んできたわね。」

早紀

「まあ、いいじゃない。」

亜由美

「ねえ、摂津、樺野。」

摂津

「何?」

樺野

「な、何ですか?」

亜由美

「あなたの作者、何か凄い家の生まれね。」

摂津

「確かに、うちの作者は父方の祖父は陸軍の将校、父は元航空自衛官、兄は空自幹部の、確かに凄い家の生まれね。」

樺野

「うちの作者さんは凄いですね。」

早紀

「私のところの作者はどうなの?」

亜由美

「さあ?」

喜恵

「聞いてみたら?」

早紀

「そうね。では聞きましたよ。」

亜由美

「奴隸つ……」

作者

「はいっ……何で『わざいましょうか？亜由美女王陛下様』

亜由美

「そこに座れ。」

作者

「あ…………」

早紀

「それでは、証人喚問を始める。」

作者

「はい。」

早紀

「それでは、あなたの家族構成を言いなさい。」

作者

「父と母と私と弟、それとペットに柴犬がいます。」

早紀

「おじいさんとおばあさんは？」

作者

「母方の祖父は戦艦長門の砲術長でした。祖父の弟はあの大和の乗員でした。今は東シナ海の海の底に大和と一緒に沈んでいます。祖父は生まれる前、祖母は去年亡くなりました。父方の祖父は終戦の日に特攻隊として出撃する予定でしたが玉音放送を聞いた後に出撃に変更になったので、戦後に私は幸運のあるやつだ、が口癖でした。」

亜由美

「なかなかの家ね。」

作者

「ありがとうございます。」

撮津

「その話は、本当の話?」

作者

「何言つてゐんですか！！！……嘘言つたって意味ないでしょ？」「撮津様。」

撮津

「確かに」

早紀

「父親と母親は何をしているの？」

作者

「父は海上自衛隊の幹部です。母親は普通の主婦です。」

早紀

「その他、いとことかは？」

作者
「いとこの一人が防衛省の職員です。そして警視庁の警部補になつてゐるいとこがいます。」

樺野

「なかなかの家ですね。」

作者
「所で、なぜこんな話になつたんですか？」

攝津

「さあ？」

作者

「さあ？つて」

早紀

「何か問題でも？」

作者

「いいえつ――！――！――何もありません」

攝津

「それじゃあ帰るわ」

樺野

「それではつ、失礼します。」

早紀

「それじゃあね。」

亜由美

「バイバイ」

喜恵

「さよなら」

作者

「如何でしたでしょうか?」

作者

「一等海士長先生の艦魂をもつと出せました。」

作者

「ありがとうございました。」

早紀

「おい、奴隸。」

作者

「何でじょうか?早紀女王陛下様。」

早紀

「なぜ、私達にあのよつな話をさせた?」

作者 「ああ、あれですか。あれは…………」

早紀 「あれは?」

作者 「私の彼女が書けといいましたので。」

早紀 「彼女!?」

作者 「はい。早紀女王陛下様も、私の彼女をモデルにしています。名前は私が考えた名前ですが…………」

早紀 「ふう〜ん。私は奴隸の彼女をモデルにしているのね。」

作者 「イエスマイロード」

早紀 「解った。これから頑張りなさい。」

作者 「了解いたしました。」

「了解いたしました。」

早紀

「それじゃあ

作者

「ふう。

作者

「あつ、すいません。この小説は彼女の影響力が凄いですから……

…

作者

「それでは、一等海士長先生。感想をお待ちしています。」

第21話 日本航空機産業の底力（後書き）

次回はアメリカからの話を書きたいと思います。

第22話 テーモン艦隊

1943年1月20日

ハルゼーは単身、ホワイトハウスに来ていた。

10日前に起こった、珊瑚海海戦の報告にやつてきたのだ。1月13日にパールハーバーに帰還したハルゼーだったが、自分的一方的に敗北に嫌気がさし、昨日まで軽い鬱になっていた。

しかし、彼は一介の艦隊司令長官である。

大統領と海軍長官、合衆国艦隊司令長官にワシントンに来るようと言われたら、断れる訳がない。

その為、ハルゼーは朝一番にワシントンに飛んできた。

大統領執務室に通されたのはいいが、未だに大統領達は現れない。

「やれやれ。俺も情けないな。」

ハルゼーが言った時。

「珊瑚海では大変だつたなハルゼー。」

大統領が2人を連れて”歩いて”入ってきた。

「大統領閣下。」

ハルゼーが言った。

「まあ、ハルゼー。固くなるな。」

キングが言った。

「まあ、ハルゼー、掛けてくれ。」

ルーズベルトが言った。

「珊瑚海の件だが、気にする事はない。」

ハルゼーは我が耳を疑つた。

「大統領。どうゆう意味でしょつか？」

ハルゼーが聞く。

「お前が戦つたのはX艦隊だ。」

キングが言う。

「いや、デーモン艦隊だな。」

ルーズベルトが言った。

「デーモン……艦隊。」

ハルゼーが言った。

「そうだ。奴らは英東洋艦隊を壊滅させた艦隊だ。」

ルーズベルトは続ける。

「その艦隊の破壊力は凄まじい、君の艦隊もその艦隊にやられたのだ。」

「その艦隊は何時何処に出現するか解らない。まさに神出鬼没だ。何処に出現すれば必ず敵艦隊を壊滅させる。まさにデーモンだ。」

ノックスが言った。

「海軍長官の言つ通りだ。我が合衆国はそのデーモン艦隊に太平洋艦隊を壊滅させられた。」

ルーズベルトが言った。

「まあ、我が合衆国の国力をを使えば再建は可能だが、投入していく端から壊滅させられていくのであれば意味がない。」

キングが言った。

「そこでだハルゼー。私はある計画にさらなる資金投入を決めた。」

ルーズベルトが言った。

「ある計画?」

ハルゼーが聞いた。

「マンハッタン計画だよ。」

ルーズベルトが言った。

「マンハッタン計画?」

ハルゼーが更に聞く。

「原子爆弾と言つて半径2キロのものが消滅する。」

ルーズベルトが言った。

「消滅!? それならデーモン艦隊も消滅出来るではないですか!!!」

ハルゼーが興奮気味に言った。

「そうだ。そのマンハッタン計画に金を使つ訳だ。」

ルーズベルトが言つ。

ハルゼーが言つ。

「そうだ。ハルゼー。旧式艦で訓練に励んでくれ。」

「了解いたしました。大統領。そうなれば現在の太平洋艦隊の旧式艦でも頑張れるはずです。」

ルーズベルトがそう言つと、ハルゼーは立ち上がり。

「そうと決れば私はパールハーバーに帰り訓練に励みます。」

ハルゼーはそう言つと颯爽と大統領執務室を出ていった。

「よし。ロスアラモスに連絡を入れてくれ。原爆開発を急げと。」

ルーズベルトが言った。

1943年2月20日

「大統領。朗報です。」

ハル国務長官が大統領執務室に飛び込んできた。

「何だね。ハル。」

「原爆が完成しました。」

ハルが言った。

「何!? 本当か?」

ルーズベルトが聞く。

「勿論です。大統領。」

ハルが応える。

「よし。よくやった。」

ルーズベルトが続ける。

「それでは、ロスアラモスにB29を配備して特別空軍を設立する。」

「了解いたしました。それでは早速手配します。」

ハルはそう言つと部屋を出ていった。

「よし。これでデーモン艦隊が本土に襲来した時でも大丈夫だ。原爆に耐えられる艦隊など存在しない。本土にデーモン艦隊が来た時こそ、デーモン艦隊の最後だ。」

大統領執務室にはルーズベルトの笑い声が響き渡つていた。

第23話 アメリカ本土西海岸空襲

昭和18年3月5日

第七独立機動艦隊はアメリカ本土西海岸サンディエゴの西50キロに位置していた。

「よし。大和改に連絡、空母群は攻撃隊を編成しサンディエゴを空襲せよ、だ。」

小沢が言つ。

「了解いたしました。」

大和改に連絡がいく。

「よし。全艦砲撃用意。」

小沢が言つ。

「遂に敵の本土に砲撃出来るわね。」

大和（早紀）が言つ。

「確かにそうだな。」

有賀が言つ。

「今日は空母を除いた全艦の対地砲撃だからサンディエゴは壊滅ね。」

大和（早紀）が言つ。

「そうだな。大和改、武藏改、信濃改、海神、風神以外の全艦で対地砲撃をして空母艦載機で空襲するんだ。どんなものでも壊滅するさ。」

有賀が言つ。

「よし、そろそろ砲撃を始めるぞ。」

小沢が言つ。

「了解しました。」

有賀が言つた。

「ああて、シヨータイムよ。」

大和（早紀）が言つた。

「撃てえ～」

小沢が言つた。

ドグワアアアアン

凄まじい音と共に、大和、武藏、信濃から発射された超々重量徹甲

弾27発がサンティエゴに向かつて飛んでいった。

大和改では出撃の準備に追われていた。

「えらい張り切つているわね。」

大和改（由香）が飛行総隊長の木月中佐に声を掛けた。

「あたほつよ、何せ今回はこいつでの初陣だからな。」

木月がそういうながら背後の真っ黒な機体に手を当てた。

「轟天ね。」

大和改（由香）が言つ。

「そうだ。こいつはなかなかの代物だ。」

木月が言つ。

「そんな事を言つてるのはいいけどそろそろ出撃じゃないの？」

大和改（由香）が聞く。

「おつと、隊長としたことが。それじゃあ行つてくるわ。」

木月は轟天に乗るとカタパルトに打ち出されていった。

「生きて帰つてきてね。」

大和改（由香）の田には涙がうつすりがあった。

潜水艦伊一は一一、一一と共に浮上していた。

「よし。対地ミサイル発射。」

伊一 艦長の橋本大佐が言つた。

バシュバシュと音が聞こえた。

これが山本が言つていた改装である。

垂直発射型対地ミサイル発射機である。

今で言づくしての走りである。

それが20基装備されたのである。

「一。凄いもんだな。」

橋本が一（舞）に言つた。

「はい。まさか敵の本土にまで攻撃していくとは、思つてもみませ
んでした。」

一（舞）が言つた。

「そうだな。私も思つていなかつたよ。」

橋本が言つ。

「これから、この戦争はどうなるのでしょうか？」

一（舞）が聞く。

「さあな、私もわからんよ。」

橋本が言つ。

「そうですね。わかりませんよね。」

一（舞）が言つ。

2人の会話は続きそうだ。

サンディエゴ上空

「しかし、一方的だな。」

木月が言つた。

木月の言つ通りだ。

飛行場はもうすでに大和等の砲撃により壊滅しているし、他の飛行場から飛んできた航空機があつても、轟天の空対空ミサイルで撃墜される始末。

「張り合いがねえ。」

木月が言つ。

「おや？」

木月が敵機を見つけた。

「また、落とされに来たか。」

木月はそう言いながら敵機にミサイルの照準を合わせた。

「ロックオン」

木月はそう言つとミサイルの発射ボタンを押した。

すると、ウエポンベイに収納されていた、空対空ミサイルが轟天を離れて敵機に向かつて飛んでいった。

ドカアアアアン

「撃墜。」

木月は言つた。

今回は海王の護衛が任務である為、対艦ミサイルを載せずに対空ミサイルを載せた為14発のミサイルであつたが先程の攻撃でミサイルを撃ち尽くしてしまった。

「やっぱり一対一の方がいいな。混戦になると、見方が撃ち落としやつに向かつてしまふからな。」

木月が言った。

確かに木月の言つ通りである。

轟天の搭載するミサイルはまだ真空管の付いた初步的なミサイルのため、見方が撃ち落とした敵機に吸い寄せられて敵機に命中しないのがあつたのである。

いわばサイドワインダーの走りである。

そのため、彼らは敵機とすれ違つ直前にミサイルを発射するといつ荒技をみせた。

そうすれば目の前に敵機がいるため、アホなミサイルでも敵機に命中するのである。

「この街も復興するのにどれだけかかるんだろうな。」

木月が言った。

今、木月の見下ろす街は瓦礫の山となっていた。

戦艦5隻、巡洋艦5隻、駆逐艦5隻、潜水艦3隻、戦闘機180機、

攻撃機180機、攻撃ヘリコプター30機に攻撃されたサンティエゴは壊滅した。

「よし。全機帰還せよ。」

木月は命令を下した。

ホワイトハウス

「大統領。 大変です。」

ハルが大統領執務室に飛び込んできた。

「どうしたんだ? ハル」

「デーモン艦隊が現れました。」

ハルが言つと、

「何! ? 本当か?」

ルーズベルトが聞く。

「本當です、大統領。」

ハルが応える。

「よし。ロスアラモスの特別空軍に出撃命令だ。今すぐ、原爆を搭載してサンディエゴに急行せよ。だ。」

「了解いたしました。すぐに連絡をいれます。」

ハルはそつと部屋を出ていった。

「フフフ。デーモン艦隊の最後だ。」

ルーズベルトは笑った。

第七独立機動艦隊総旗艦大和艦橋

「長官。対空レーダーが上空15000メートルにB29と思われる爆撃機10機を捕らえました。」

レーダー員が言った。

「10機ぐらいならほっておいてもいいだろ?」

小沢が言った。

「爆撃機10機が来ようとも私の敵ではないわ。」

大和（早紀）が言つた。

「それもそうだ。」

小沢が笑いながら言つた。

しかしこれが第七独立機動艦隊の最後にならうとは……

第七独立機動艦隊上空15000メートル

「フフフ。デーモン艦隊め。これで最後だ。」

B29の機長マイクが言った。

「全機、投下用意。」

マイクが全機で叫んだ。

「よし。全機原爆投下つ！！！！！」

1機1発で合計10発が第七独立機動艦隊に投下された。

1つの艦隊に10発の原爆とは、アメリカがいかに第七独立機動艦隊に怯えているかがわかる。

その瞬間

ドグオオオオオオオン

この世と思えない爆発音と共に10個のキノコ雲が立ち上った。

マイクは固唾を呑んで見守る。

キノコ雲が消えた海面を見ると、そこには原爆の熱によつて蒸発した穴が空いていた。

「イーハーー！！！やつたぞ。デーモン艦隊は消滅した。ホワイ
トハウスに連絡だ。デーモン艦隊はすでに存在せず、とだ。」

マイクは興奮しながら言った。

第七独立機動艦隊消滅。

第23話 アメリカ本土西海岸空襲（後書き）

1ヶ月少々しか連載できませんでしたが、第七独立機動艦隊～神出鬼没！！米海軍の悲劇～、次回最終回です。
短い間でしたが、ありがとうございました。

第24話 無敵の第七独立機動艦隊

B29の機長、マイクは興奮していた。

彼らは原爆と言ひ超絶破壊兵器を使つて、デーモン艦隊を消滅させたのである。

「機長。やりましたね。」

パイロットがマイクに言つた。

「ああ。合衆国の悪夢、デーモンを消滅させたのだ。私達はナイトだよ。」

マイクは機嫌よく言つた。

「デーモンを退治したんですから、基地に戻れば美女達が待つてますよ。」

通信員が笑いながらマイクに言つた。

「ハハハ。そうだな。」

マイクがそう言つたそのとき。

「機長！……4時の方向から高速飛行物体、接近中です……！」

レーダー員が叫んだ。

「何つ…………本当かっ…………」

マイクが聞いた。

「本当に射できると思います。」

レーダー員がそう言つのでマイクは半信半疑に4時の方向を見た。
すると、マイクは我が目を疑つた。

ジェット機がこちらに向かつて飛んできているではないか。

「なぜ、ジェット機が飛んでいるんだ? ジェット機を配備しているのはデーモン艦隊だけだろう…………しかしデーモン艦隊は消滅したんだ!!!!!! 何故だつ…………」

マイクは人生の中で一番頭を働かせた。

しかし、マイクは答えを導きだせなかつた。

そんな状況でマイク達は戦闘に巻き込まれた。

「敵が何かを発射しました!!!!!!」

機銃員が叫ぶ。

「ツ…………」

マイクが唇を噛み締める。

ドグワアアアアアアン

10機の内5機が爆散した。

「糞つ！……！何て奴だつ！……！」

マイクが叫ぶ。

「敵が突っ込んできます。」

パイロットが言つた。

「糞つ！……！機銃員、敵機を撃ち落とせつ！……！」

マイクが叫んだ。

機銃員が必死になつて、機銃を撃つている。

ところが、敵機は恐ろしいスピードで突っ込んでくる。

突如、

ズドドドドドドッ！……！

敵機の機関砲が咆哮した。

ズグワアアアアアン！……！

4機が爆散して、残りはマイクの機体だけとなつた。

「機長つ！――全エンジンが爆発しました。」

パイロットが言った。

「糞つ！――！」

マイクはそういうながら考えた。

考えている時もB29は降下を続ける。

「パイロット、海上着陸だ。それしかない。それと通信員、ホワイトハウスに連絡だ、デーモン艦隊は生きている、だ。」

マイクが叫ぶ。

「イエッサー」

パイロットが叫ぶ。

そこへ、敵機が機関砲を乱射しながら近づいてきた。

(どうやら、俺の命運もこれまでだな。)

マイクの意識は薄れていった。

「マイク大尉。マイク大尉。」

(!?俺を呼んでいるのか?)

マイクは考えた。

「マイク大尉。」

何回目かの呼び掛けにマイクはやつと目を覚ました。

「ツ…………」「こは何処だ?」

マイクは目の前の人物に聞いた。

「第七独立機動艦隊総旗艦大和の医務室だよ。マイク大尉。」

目の前の人物がいう。

「そうか、俺は今『デーモン艦隊』にいるんだな。」

マイクが言った。

「『デーモン艦隊』?」

目の前の人物が聞いた。

「ああ、『デーモン艦隊』だ。我が合衆国の艦隊を壊滅させた艦隊がある。その艦隊を合衆国では『デーモン艦隊』と呼んでいる。」

マイクは言った。

「ハハハ。デーモン艦隊か、それは面白い。」

目の前の人物は笑った。

「なあ、1つ聞いていいか?」

マイクは言った。

「ああ。なんだ?」

目の前の人物が聞いた。

「どうやって、10発の原爆から生き延びたんだ?」

マイクは率直な疑問をぶつけた。

「フィラデルフィア実験。」

目の前の人物はそう言つと艦隊が生き延びた経緯の説明を始めた。

目の前の人物……小沢……はマイクに説明を始めた。

1938年3月20日……史実は1943年10月28日……にアメリカ軍が行つた、フィラデルフィア実験。

フィラデルフィア軍港から2500キロ以上離れたノーサウスカーク軍港に駆逐艦1隻を瞬間移動させようという計画であった。

しかし、実験はものの見事に失敗した。

フィラデルフィア軍港から瞬間移動した駆逐艦はノーフォーク軍港に出現したが、現れた瞬間に大爆発を起こして轟沈してしまった。

アメリカ合衆国政府はこの実験を国家S級事件……アメリカが国家の威信を守るため、秘匿するべき事件としてランク付けする。A級より上位ランクをS級と言っている。……として50年間の秘匿を決めた。

しかし、その実験は鈴木商店の対米工作員に見られていたのである。

その工作員は鈴木商店に早速、フィラデルフィア実験の経緯を報告した。

工作員から連絡を受けた鈴木商店は帝國政府にその実験を知らせた。知らせを受けた帝國政府は鈴木商店と協同でフィラデルフィア実験の実用化を目指すために研究を始めた。

翌年の1939年10月に鈴木商店の対米工作員がまたしても興味深い情報を入手した。

アメリカがフィラデルフィア実験の研究を止めて、マンハッタン計画……史実は1942年から始まったが……という原子爆弾の開発を始めたというのだ。

そこで鈴木商店と帝國政府の合同研究チームはフィラデルフィア実験の空間移動理論を原爆の破壊力からパワーを得ようと、計画の大

幅な転換を行つた。

まず、艦橋のトップに円形のエネルギー吸收装置を設置し、敵が投下した原爆の破壊エネルギーを吸收。

エネルギー吸収装置に吸収したエネルギーをその下に設置した拡散装置にエネルギーを移し、エネルギーを艦全体に放出して、空間移動を実現させようというのである。

将来的には原子力機関という機関を艦に装備し、自分自身で空間移動を可能になるだろう。

その装置が1943年1月20日に完成し、旅順に帰還した第七独立機動艦隊に搭載したのである。

そして、今回のサンディエゴ空襲作戦にて、初めて使用されたのである。

「これが、我がデーモン艦隊生存の真相だ。」

小沢が言った。

「日本は凄いな。」

マイクは言った。

「ハハハ。凄いのは技術者だよ。」

小沢が言った。

「そうだな。」

マイクが言った。

「それで、俺はどうなるんだ？」

マイクが聞いた

「大丈夫だ。君は日本の捕虜収容場に連れていくよ。大丈夫。粗末な暮らしあさせないよ。」

小沢が言った。

「ありがとう。」

マイクが言った。

「俺は疲れたよ。少し寝かせてくれ。」

マイクが言った。

「ああ、勿論だ。日本までは遠いからな。ゆっくり休んでくれ。それじゃあ。」

小沢が艦橋に戻ると、草鹿が声を掛けてきた。

「あの大尉はどうでしたか？」

「ああ。マイクなら元気そうだったよ。」

小沢が言った。

「マイク？」

大和（早紀）が聞いた。

「ああ。あの大尉の名前だよ。」

小沢が大和（早紀）に言った。

「えらく仲が良さそうね。」

大和（早紀）が言った。

「それほどでもないよ。」

小沢が言った。

「長官。」

有賀が言った。

「おお。 そうだな。」

小沢は一呼吸置くと、

「旅順に帰還するべ。」

「了解しました。」

有賀が答えた。

こうして、第七独立機動艦隊は旅順への帰路についた。

第七独立機動艦隊は壊滅していなかつた。

（後書き）

早紀

「奴隸つ…………！」

作者

「はいっ…………何でいらっしゃいましょうか？早紀女王陛下様。」

早紀

「私達を生死不明にさせた罪は重いぞ。」

亜由美

「死をもって償え。」

喜恵

「リンクチです。」

作者

「どうかお許しを……」

早紀

「無駄なあがきだ。」

作者

「そんな……」

早紀

「奴隸を縛り上げろ。」

亞由美

「勿論。」

喜恵

「喜んで。」

作者

「えつ……………そんな……………」

両腕両足を縛られる作者。

亞由美

「それでは奴隸。お前の処刑計画を発表する。」

作者

「……………はい。」

亞由美

「まずは1人100発ずつの鞭打ち、その次はロウソクのロウ垂らし、その次に釘バットで殴り倒します。最後に回し蹴りと飛び膝蹴りの10発セットです。以上が処刑計画です。」

早紀

「それでは処刑前に言い残す事はないか？」

作者

「それでは最後に、皆さん第七独立機動艦隊～神出鬼没！～米海軍の悲劇～はまだまだ続きます。最後まで見捨てずに温かく見守ってください。」

亜由美

「それでは処刑を始める。」

作者

「お許しを～～～」

一同

「許すかあ～～～」

作者

「ギヤアアアアアアアア」

5時間後、清々しい顔をして部屋を出ていった美女達がいた。

その部屋を見ると作者が傷だらけ及び出血多量で死んでいるのが見つかった。

第24話 無敵の第七独立機動艦隊（後書き）

最終回ではありますんでした。
ありがとうございました。

次回からもよ

第25話 八方塞がり

1943年3月6日

ワシントンDCのホワイトハウスでは沈痛な面持ちの大統領がいた。

「何故だ、私の考えに間違いはなかつたはずだ。」

大統領……ルーズベルト……は言つた。

「デーモン艦隊を消滅させるために私はマンハッタン計画に予定の数倍以上の資金を投入して、やつと10発が完成したのだ。」

あつ、これはルーズベルトの独り言ですので。

「そして、B29も完成させた。それなのに……」

ルーズベルトは続ける。

「原爆は確かに爆発した。デーモン艦隊は消滅したと思つた。それなのにデーモン艦隊は消滅しなかつた。」

「消滅しなかつただけならまだしも、我が国が実現不可能尚且つ大失敗したフィラデルフィア実験を実現させることは……」

「糞つ。ジャップめつ！……！」

ルーズベルトは言つた。

「戦時増産体制も整いつつあるが、投入する端から『テーモン艦隊に沈められる……』

「議会も私の責任を追及してくるし、支持率は急落するし、艦隊は壊滅するし、ヨーロッパではドイツの勢いは落ちないし、ノルマンディー上陸作戦も延長しなければいけないし…………」

「四面楚歌、八方塞がり…………か。」

ルーズベルトは大きくため息をついた。

「ンンンン」

誰かがドアをノックした。

「誰も居ないぞ。」

使い古された、ギャグを言つたルーズベルトだが、あまりにも馬鹿馬鹿しいので入れと言つた。

「失礼します。大統領閣下。重大なお知らせです」

国務長官のハルが言つた。

「何だ？ハル。焦らさず早く言え。」

ルーズベルトが言つた。

「了解しました。」

ハルは大きく息を吸うと驚くべき事を言った。

「イギリスが降伏しました。」

「何つ！？」

ルーズベルトはそう言いつと椅子に座り込んだ。

四時間後。

やつと、気を取り戻したルーズベルトはハルの話を聞き始めた。

「チャーチルと王室の方々はどうされた?」

ルーズベルトが聞く。

「王室の方々はもう既に、カナダに到着しました。チャーチル閣下はもうすぐカナダに着くはずです。」

ハルが言った。

「そうか……」

ルーズベルトは言った。

「ならないがな。」

「では、大統領失礼します。」

ハルはそう言つと、部屋を出ていった。

「糞つ！！！八方塞がりにも程があるつ！！！」

ルーズベルトは叫んだ。

さて、読者の皆様にはヨーロッパ戦線の状況が全く理解出来ていな
いと思いますので（そりやそうだ、説明していないから。）説明さ
せていただきます。

開戦早々、西方電撃戦にてフランスはもとよりスペイン及びポルトガルを占領し、さらにはバルカン半島及びクレタ島をも占領した。

その後、ビスマルクをイギリスに沈められると言つ悲劇に見舞われたが、大西洋戦争においてHボートを使い、制海権を握る事に成功した。

その後のドイツの活躍は凄まじく、ポーランドのソ連領に侵攻。

それを占領した。

ドイツはその後バルバロッサ作戦を発動し、レニングラード占領、キエフ占領、モスクワへの活路を見出だした。

そして、ドイツはモスクワ侵攻のタイフーン作戦を発動。

合計八十個師団を投入し半年に及ぶ攻防の末、ドイツはモスクワを占領した。

スターリンはモスクワ陥落前にヤクーツクに逃げ込んだ。

モスクワを占領したドイツ軍は勢いを落とさずにウラル山脈の西部まで占領してしまった。

ドイツはモスクワを首都としたウラル山脈西部までにモスクワ大共和国という、傀儡国家を建国した。

そしてアフリカ戦線でもドイツは奮戦し、北アフリカを占領した。

そして1943年1月末にドイツはイギリスに上陸した。

イギリスの奮戦虚しく、ハルがルーズベルトに言つた通り、イギリスは降伏した。

1943年3月6日のヨーロッパを見てみると、スイスを除きドイツ第三帝国の占領下にあった。

スイスはヒトラーが絶対に占領するなど命令していたためスイスには食料援助をドイツは行つていた。

これが現在のヨーロッパ戦線の状況である。

「糞つ！！！我が国はどうすればいいんだつ！！！」

ルーズベルトは叫んだ。

「どうすればいいんだつ！！！どうすればいいんだつ！！！」

ルーズベルトは考へ込んだ。

「落ち着け、落ち着くんだ。フランクリン。考えるんだ。」

ルーズベルトは自分に言い聞かせた。

「考える。」

ルーズベルトが自分に言い聞かせていると。

「大統領。」

ハルが入ってきた。

「何だハル？」

ルーズベルトが不機嫌そうに聞いた。

「サンディエゴの被害総額と復興費用の合計です。」

ハルが書類をルーズベルトに渡した。

「うむ。」

ルーズベルトはハルから書類を受け取ると、それに目を通した。

そこには驚愕の数字が書いてあった。

「何つ！？」これは本当か！？」

ルーズベルトは叫んだ。

「本当です。」

ハルが言つと、

「何て事だ。」

ルーズベルトはそう叫ぶと氣を失つた。

第25話 八方塞がり（後書き）

皆さん！！！！！ 本日、1時30分から始まるたかじんのそこまで言つて委員会を御覧ください。あの田母神前空幕長が出演します！！！！！ 絶対見て下さい！！！！！

第26話 太平洋制覇への道（前書き）

この小説は従来の艦魂小説とは違い、あくまでメインは戦記等です。

本来の艦魂小説をご希望の方がいらっしゃいましたら極上艦魂会の他の先生方の小説をご覧下さい。私は今の書き方を変える事は一切しませんので了承くださいませ。

と言つより、自分が上手に書けないだけの話なんですね
……

第26話 太平洋制覇への道

昭和18年3月23日

第七独立機動艦隊は横須賀港に入った。

見事に敵本国まで遠征しサンディエゴを壊滅させたのだ。

小沢達第七独立機動艦隊のスタッフは歓迎を受けると思っていたが、現実は違つた。

「ハハハ、やっぱりいつ見ても殺風景な風景だな……」

小沢が言った。

確かに小沢の言つ通りである。

今、小沢が見ているのは少しづつ復興が進んでいるが未だに瓦礫の山の残る帝都であった。

あの1・3事件の時に第七独立機動艦隊及び富嶽戦略空軍による圧倒的な砲撃かつ空襲により帝都は壊滅したのである。

その後は帝都の近代化を掲げ現在、復興を行つてゐる。

道路も完全舗装され、高層ビルやマンションの建築も行われてゐる。

しかしこの小説の大日本帝國の財政は凄いものだ。

第七独立機動艦隊はイギリスの資金と山本が稼いだベガスの資金があるのだが、それは第七独立機動艦隊専用で艦の建造と改修でイギリスの資金を全て使い、ベガスの資金で航空機や戦車の生産を行っている。

連合艦隊は重装甲空母大鳳を建造したし、富嶽戦略空軍を設立にするにあたって満州で富嶽生産の完全オートメーション工場も建設したから、帝都の復興費用はどこからひねり出したのか？

まあ、いつか話す事になるが……

今回第七独立機動艦隊がなぜ横須賀に来たかと言えば大日本帝國の軍事力の総力をあげた一大作戦、ハワイ占領作戦に向けての話し合いのためだった。

そのため、小沢と草鹿は2人揃つて皇居へ向かっていた。

「小沢、草鹿遅かつたな。」

山本が言った。

「小沢、草鹿。良くやった。」

天皇裕仁が言った。

「長官、陛下。ありがとうございます。」

小沢が言った。

今回は大日本帝國の軍事力の総力をあげた一大作戦の話し合いのため、皇居に山本、近衛、豊田、栗林、そして鈴木商店の大番頭金子が来ていた。

「それでは、お上。全員揃いましたので会議を始めさせていただきます。」

近衛が天皇裕仁に言った。

「つむ。では始めてくれ。」

天皇裕仁が答えた。

「それでは会議を始める。」

近衛が言った。

「まずは海軍の状況をお聞きしたい。山本君。」

近衛が山本に聞いた。

「はい。海軍の連合艦隊は全艦出撃準備が出来ております。そして、第七独立機動艦隊が帰還しましたので第七独立機動艦隊の休暇を取りまして作戦は昭和18年4月15日開始を予定しています。」

山本が言った。

すると、

「長官、我々は休暇などりません。明日にでも作戦を開始しても構いません。」

小沢が言った。

「まあ、お前たちは職業軍人だからいいが、普通の兵達の事を考えてやれ。」

山本が小沢に言った。

「確かに……」

小沢が言った。

「だからね、くつしる。何もずっと休暇を取れと言つてゐるんじゃない。訓練でもしたらいいじゃないか。」

山本が呟つと、

「解いたしました。」

小沢が呟つ。

「よし、では陸軍はどうじゅうつか?」

近衛が栗林に聞いた。

「はい。今回は大日本帝國の軍事力の総力をあげた作戦とあって、陸軍は出せる兵力を全て投入します。」

栗林は続ける。

「海軍に技術を受けた20式重戦車も今回の作戦の主軸ですので大量に持つていく予定です。しかし何で問題が発生しました。」

栗林が少し声のトーンを下げて呟つた。

「輸送船の数が足りません。」

栗林が呟つと、

「なんじゃ、そんな事か。何か他に重大な事を言うかと思つたら。なあに、心配するな、必要な数があれば2週間で建造するぞ?」

金子が言った。

「本当にですか！？金子さん？」

栗林が聞く。

「ああ、もちろん。なんばくも言え、すぐに建造を始めるが。」

金子が言った。

さて、ここで言つと鈴木商店は連邦商路護衛艦隊を設立するにあたって、画期的な建造方法を編み出した。

それは連続部分工法と呼ばれる建造方法である。

従来のドッグ一つ丸々占拠して建造する方法と違い、連続部分工法は艦首から艦尾まで数個のパーツに分け、最終的に全てのパーツを溶接して完成させるものである。

この建造方法により鈴木商店は輸送船の大量生産を始めたのである。

「それは、有り難いです。それでは20隻程お願ひします。」

栗林は言った。

「うむ。では2週間後には全て建造出来るから、楽しみにしておけ。」

金子が誇らしげに言った。

「

「我が社は利益最優先だが今回は無料で建造してやる。」

金子が続ける。

「何せ、日本の軍事力の総力をあげての作戦じゃからな。」

金子が言った。

「ありがとうございます。金子さんには感謝します。」

近衛が言った。

「つむ。朕は安心したぞ。」

天皇裕仁が続ける、

「「」の作戦が成功すれば世界が驚く事がある、絶対に成功させてくれ。」

天皇裕仁が言った。

「確かにお上の言われる通り、この作戦が成功すれば世界が驚きますな。」

山本が言った。

「ハハハ。これは楽しみじゃ。」

金子が言った。

天皇裕仁が言った、世界が驚く事とは何か？

第26話 太平洋制覇への道（後書き）

次回は第七独立機動艦隊艦魂の出撃まえの宴会です。お楽しみに。

第27話 一大作戦前夜の宴

昭和18年4月14日

ハワイ占領作戦『天元作戦』の発動を明日に控えた、今日は宴会が開かれていた。

連合艦隊でも宴会が開かれ無礼講の大騒ぎとなっていた。

第七独立機動艦隊も例外ではなかつた。

小沢が無礼講としたため、水兵までもが艦長や長官に酒を飲ませにくる始末であつた。

その一大宴会は人間だけではなく、艦魂も例外ではなかつた。

「由美～あなたは私の物よ。」

おっと、いきなりか……

「いやあ～～そんな所に手を入れないでください～～～～～」

「またまた～～そんな事言ひて。本当はいつやつ事をやれるのが好きなんでしょう？」

早紀が由美の耳元で囁く。

「あ～……そんな所……」

「フフフ。可愛いわね、由美。」

「馬鹿姉め。」

亜由美が言った。

「あの～。すいません。」

「何?」

喜恵が亜紀に聞く。

「姉はどうなるのでしょうか?」

「ああ、由美さんならもうダメね。」

喜恵が囁く。

「レズの姉に捕まつたんだからもうダメね。けど由美も、ああ見えて万更じやないからね。」

亜由美が囁く。

「やつですね。では。」

亞紀はやつ言つと美紀、渚、美香、舞、乱、華達の輪の中へ入つて
いった。

「全く、姉も困つたものだ。」

亞由美が喜恵に言つた。

「まあ、いいんじゃないのかな? 亞由美姉さんが頑張つてくれたら
いいんだから。」

喜恵が言つた。

「そうね。私が頑張つたらいいのよね。」

亞由美はやつ言つと酒を飲み始めた。

「姉さん。早紀司令と由美さんつて凄く仲がいいわよね。」

綾夏が由香に言つた。

「まあ、あの2人の間にはえげつない愛が芽生えてしまつたからね
……」

由香が言った。

「見なかつた事にする?」

綾夏が聞いた。

「わがのろん。」

由香が言った。

「つよ~か~い」

「」
「」
「」

「いいんじゃない。作者も頑張ってるんだから。」

「やうじつもんかな。畠由美姉さん。」

「やうよ。喜恵。」
「」

「つよ~か~い」

(^ ^) /

¥ (^ ^)

「乾杯」

「気にしない気にしない。じゃ乾杯」

「確かに……」

「大丈夫。私達はアメリカに『デーモン艦隊と呼ばれてるのよ。寝ても勝てるわよ。』

「だつて、皆なんか抜けてるんだもん。」

「何で？」

「明日から天元作戦発動だけど大丈夫かな？」

「なあに～『愛美？』

「姉さん。」

第27話 一大作戦前夜の宴（後書き）

うん（ ～ ； ） どうも艦魂の話は上手く書けませんね。
すいません。 由緒正しき艦魂小説をご覧下さい。

望の方は極上艦魂会の他の先生方の小説をご覧下さい。
まあ、私も一応極上艦魂会所属ですから、これから頑張りますのでよろしくお願いします。

第28話 天元作戦発動

昭和18年4月15日

この日遂に天元作戦が発動された。

この作戦は太平洋の中心、ハワイ諸島の占領を目的とした作戦である。

天元作戦には帝國海軍連合艦隊、帝國陸軍15個師団、富嶽戦略空軍、連邦商路護衛艦隊、そして第七独立機動艦隊等、大日本帝國が保有する全ての戦力が投入される（勿論、本土、中国大陆、オーストラリア、ニュージーランド、ボルネオ、インド、フィリピン等の防衛・治安維持の陸軍は残されたが）。

それほどまでに、今回の天元作戦には大きな意味があるのである。

連合艦隊旗艦戦艦長門

「長官、いよいよですね。」

宇垣が山本に言った。

「ああ。そうだな、遂にアメリカの太平洋の要、ハワイを攻略するんだ。ミッドウェー以上の激戦を覚悟せねばいからんぞ。」

山本が言った。

「大丈夫ですよ、長官。連合艦隊の戦力は十分です、空母が11隻もあるんです。陸軍の輸送船団も連邦商路護衛艦隊が全力をあげて護衛します。しかも、遊軍ですが第七独立機動艦隊と富嶽戦略空軍もいるんです。大丈夫ですよ。」

宇垣が言った。

「まあ、確かにそうだな。ハワイにいる太平洋艦隊もごく少数だからな。安心だ。」

山本が言った。

確かに山本の言つ通りである、現在アメリカは艦隊のほとんどを大西洋に配備しており、太平洋にはハワイに少しとサンディエゴに多數ぐらいである。

「今回の天元作戦は艦隊決戦より、航空戦や陸戦がメインになりそうだな……」

山本が言った。

「確かに…………でもそつなれば対地制圧射撃を行い、陸軍の支援に空母艦載機を使うまでです。」

宇垣が言った。

「そうだ。」

山本が大きくうなづく。

「今日はハワイ諸島の占領が目的だ。出来れば敵味方双方に人的被害は出したくないが……」

山本が言った。

「しかし、それは難しいと思いませんが……」

宇垣が言つた。

「そうだな。私もそう思つよ。まあ希望だな。」

山本はそう言つと笑つた。

「やうですな……」

宇垣もやう言つと笑つた。

山本率いる連合艦隊は威風堂々とハワイ諸島を目指し駆進中だ、陸軍輸送船団の護衛に連邦商路護衛艦隊も加わり、颶爽と大海原を駆ける。

さて、第七独立機動艦隊はどうなのか、覗いてみよう。

第七独立機動艦隊旗艦戦艦大和

「よし、俺の勝ちだ。」

「うへ、…………まいりました。」

「何、艦長も奮闘したよ。」

「あつがとうござります。」

「どうやら、小沢と有賀は将棋をしていたようだ。」

「流石は長官ですね。」

草鹿が言った。

「ハハハ、草鹿君。もう一度やるかね？」

小沢が聞いた。

「いえ、1回負けているのでいいです。」

草鹿が呟つ。

何とも呑氣なものだ。

流石はアメリカにゲーモン艦隊と恐れられるほどだが、少し抜けすぎでないか？

「ちょっとーーーー急けすぎじゃないの？」

大和（早紀）が注意する。

「大丈夫だよ、大和。レーダーで索敵しているし、早期警戒機と偵察機も飛ばしているんだ。大丈夫だよ。」

小沢が言った。

「まあ、そうね。」

大和（早紀）がうなずく。

「長官。今回の作戦で、我々はどう動いたらいいんでしょうか？」

有賀が聞いた。

「ああ。今回の作戦で上陸作戦は陸軍がメインだし、敵艦隊は壊滅したも同然だしな…………」

小沢は考え込む。

「まあ、好きなようにやればいいだろ？。」

小沢は笑いながら言った。

「それも、そうですな。」

有賀も笑つた。

「まあ、氣楽にいきましょ。」

草鹿も笑つた。

「全く、もう少ししゃせつとじてよな。」

早紀も笑つた。

今次作戦の意味を感じ、緊張しきつた連合艦隊。

気楽なムード全快の第七独立機動艦隊。

やはり、遊軍だからなせる技だらう。

確實にハワイに向かつて進んで行く、大日本帝國軍。

これだけの、戦力があればハワイなどあつといふ間に占領出来るかもしれない……。

第29話 ハワイ強襲（前書き）

本文中に、――シシ命令とありますが――シシ命令とはハワイ基地の司令ところの事です。

第29話 ハワイ強襲

昭和18年4月21日

連合艦隊全艦はハワイを完全包囲した。

「長命。そろそろ時間かと。」

宇垣が言った。

「そうだな。よし、南雲と大西に命令だ。1航艦と2航艦はただちに艦載機を出撃せろ。」

山本が宇垣に言った。

「了解。ただちに伝える。」

宇垣が通信員に言った。

さて、1航艦と2航艦について説明すると、

1航艦は第1航空艦隊。

2航艦は第2航空艦隊。

1航艦は従来通りの、赤城・加賀・蒼龍・飛龍・瑞鶴・翔鶴の6隻。

2 航艦は最新鋭の、大鳳・葛城・天城・阿蘇・生駒・笠置の6隻。

前者を南雲忠一中将に、後者を大西滝治郎中将に司令長官に任命している。

「よし。連合艦隊全艦に命令だ。」

山本は大きく息を吸うと、

「全艦、ハワイに向け対地制圧射撃を始める。」

山本はそう言った。

今回の対地制圧射撃には連合艦隊のみならず連邦商路護衛艦隊も参加しての、大規模なものである。

しかも遊軍ではあるが、第七独立機動艦隊と富嶽戦略空軍も参加するので、ハワイは完全に廃墟となるだろう。

「――ミッシング司令、日本海軍のレンゴーカンタイが攻撃を始めました。

」

まだ入隊したばかりだらうと思われる、伝令員が――ミッシングの部屋に入つたとたんに言った。

「うふ。…………やうか」

――ミッシングはそう答えただけで、黙り込んでしまつた。

「ハワイ全軍に命令だ。敵が上陸していくまで、攻撃は控え、戦力温存に撤しことな。」

――ミッシングが言った。

「了解いたしました。すぐさま伝えます。」

伝令員はそう言つと部屋を飛び出して行つた。

これが、ハワイ陥落の原因にならうじまつの時、――ミッシングをはじめ、誰も考えつかなかつただろう。

第七獨立機動艦隊旗艦大和艦橋

「長官、お願ひします。」

草鹿が言った。

「うむ、それでは命令を下す。第七独立機動艦隊はオアフ島に突撃せよ。」

小沢が言った。

「了解いたしました。全艦に伝えます。」

草鹿が答えた。

今回の作戦は第七独立機動艦隊はオアフ島に強襲上陸する事になつてゐる。

オアフ島上陸時には富嶽戦略空軍も空襲する事になつてゐる。

「長官、主砲射程内に入りました。」

有賀が言った。

「つむ。レーダー員、富嶽戦略空軍はキヤツチ出来たか?」

小沢がレーダー員に聞いた。

「はい、今捕らえました。」

レーダー員が言つと、

「よし、全艦対地制圧射撃を開始せよつ――――！」

小沢が言つた。

「オイ、鉄砲。頼むぞ。」

有賀が砲術長に言つた。

「任せてください。艦長。」

砲術長が言つた。

「主砲発射―――」

小沢が言つた。

突如成層圏にゆうに達して、ようやく高空から爆音が聞えた。

中島航空機の悲願であつた、超重爆撃機富嶽である。

世界初及び世界最大となる、6発の爆撃機である。

爆撃機バージョンが100機、掃射機バージョンが100機の合計200機でオアフ島に爆撃を行うのだ。

オアフ島DHレーダーステーション

「お、おい……これを見てみる……！」

マックレーダー員が同僚のレイヤーに言つた。

「何だよ、マック。」

レイヤーが聞いた。

「これを見てみろ、高度18000メートルを600キロで飛ぶ航空機を捕らえたんだぞ。」

マックが言つた。

「本当か！？」

レイヤーが聞く。

「早くパールハーバー司令部に連絡だ！！！」

「わかった！！！」

レイヤーがマックに言われて連絡しようとしたが、それはかなわな

かつた。

富嶽爆撃機バージョンの1機が1トン爆弾を投下し高度18000メートルからは信じられない正確さで、DHレーダーステーションに命中。

DHレーダーステーションは消滅した。

あつ、DHはダイアモンドヘッドの事です。

DHレーダーステーションを破壊した富嶽戦略空軍はオアフ島全土に空襲を始めた。

富嶽爆撃機バージョンはその高空からは信じられない正確さで、次々と敵を吹き飛ばす。

富嶽掃射機バージョンは低空飛行（3000メートル）を行い、敵に機関砲弾の雨を降らす。

35ミリ機関砲弾はチタン被覆仕様のため、M4シャーマンの装甲を易々と貫通し、内部の人間を殺戮していく。

この富嶽戦略空軍の攻撃により、オアフ島の地上戦力は壊滅した。

飛行場から戦闘機が飛び立とうとするが、第七独立機動艦隊の五式弾により飛行場も壊滅。

そこに、連合艦隊と連邦商路護衛艦隊が支援する、陸軍上陸部隊がハレイワに上陸を始めた。

15個師団という大兵力が1点に集中上陸を始めたのでハレイワを防衛するアメリカ軍は呆気に取られた。

小型舟艇による、上陸ではなく強襲揚陸艦がそのまま海岸に乗り上げるタイプだが、その内部からアメリカ軍が見たこともない、重戦車（20式重戦車）が現れた。

その後には大量のトラックや装甲車が上陸した。

アメリカ兵の思考はもはやパニック状態だ。

彼らは上官に日本軍はろくな戦車を保有せず、トラックや装甲車もなく完璧な、歩兵、だと。

ところが、蓋を開けると大量の重戦車やトラック及び装甲車が上陸してきたのだ。

狂気にとらわれた1人の兵士がバズーカを重戦車に向け発射した。

バズーカは確かに命中した、しかしその弾は

カーン

といづ音と共に弾き飛ばされた。

反撃は凄まじかつた。

115ミリ砲の集中攻撃に米兵は襲われたのだ。

ハレイワ守備隊壊滅。

オアフ島パールハーバー司令部

「――ミッソ司令……日本軍がハレイワに上陸しました……」

伝令員が慌てて入ってきた。

「よし、オアフ島全軍はハレイワ守備隊の支援に迎え。」

「――ミッソは言つた。」

「――ミッソ司令。ハレイワ守備隊は全滅しました。」

伝令員が言つた。

「何――？」

「――ミッソが聞いた。」

「それとオアフ島全守備隊も敵の6発爆撃機により壊滅しました。」

伝令員が沈痛な面持ちで言つた。

「日本軍のブシドーと言つものには感心します。」

伝令員が続ける。

「無防備都市を宣言したホノルルには機銃弾の1発も撃たれてない
んです。」

「本当か？」

「ミッシングが聞いた。

「はい。それと、オイル・タンクも全てノーダメージです。」

伝令員が言った。

「そうか……」

「ミッシングが言った。

「もう、是非もない。」

「ミッシングは大きく息を吸つとある事を言った。

「降伏だ。」

「ミッシングは言った。

第30話 ハワイ独立！！

昭和18年5月10日

ハワイ諸島は独立を宣言した。

先月の21日に陸軍15個師団がハレイワに、第七独立機動艦隊の1個師団がパールハーバーに上陸し、ニミツの決断でハワイ諸島の守備隊は降伏した。

その後日本軍はオアフ島以外のマウイ島、カウアイ島、ハワイ島を占領し昭和18年5月1日ハワイ諸島全土の占領を宣言したのである。

その4日後、オアフ島民はカメハメハ大王の子孫である、ハメハメハ大王を首班としてもう一度ハワイ王国を建国したいと申し出��いた。

これに対し日本はまたしても、即答で独立を認める声明を発表した。

そして、昭和18年5月10日ハワイは全世界に向けてハメハメハ大王を首班としたハワイ王国の独立を宣言した。

戦後の話だが、ハメハメハ大王は日本のスパイではなかつたのか？

という噂があつたが、その時の政府の統一見解として、ハワイ王国は純然たるハワイ王国国民の国である、と発表した。

昭和18年5月11日

ハワイがハワイ王国として独立を宣言した翌日。

第七独立機動艦隊はオアフ島パールハーバーにあつた。

ハワイ王国と安全保障条約を結んだ日本はハワイ諸島各島に基地を建設した。

そして、ハワイには在ハ大日本帝國富嶽戦略空軍基地が建設され、アメリカ合衆国は本土空襲も可能になつた。

第七独立機動艦隊は日ハ安全保障条約の目玉として、配備された。

まあ、期間限定だが……

オアフ島ホノルルホテル

この日は、日ハ首脳会談としてホノルルホテルで会談が開かれた。

日本からは近衛文麿内閣総理大臣及び山本五十六連合艦隊司令長官、ハワイ王国からはハメハメハ大王及び、ニミツ、ハワイ王国軍最高司令長官が出席した。

「これは、これは、近衛總理遠路はるばるよつてや。」

ハメハメハが近衛に言った。

「いえいえ、ハワイ王国とは安全保障条約を結んでいるんですから
気にしないでください。」

近衛が言った。

「まあ、そうですな。我が国としては早々に軍を創設しなければ
けないんですけど……」

ハメハメハが言った。

「なあに、気にせんでください。貴国の軍備が整つまで、我が国が
安全を保障します。」

山本が言った。

「ハハハ、そうですな。我が国には『デーモン艦隊が配備されたんで
すから、アメリカも簡単に手を出さないでしょう。』

一一二三三が言った。

「一一二三三君、デーモン艦隊ではなく第七独立機動艦隊と呼ぶよう
に言つただろ?」

ハメハメハが注意する。

「はあ、すいません。なんとなく、デーモン艦隊の方が響きがいい
ので。」

一一二三三が照れながら言った。

「ハメハメハ大王、まあいいではないですか。ニミツさんはハワイ王国軍最高司令長官にまでなつてくれたんですから。」

近衛が言った。

確かに近衛の言つ通りである。

ニミツはハワイ基地司令であったが、先月の降伏の後捕虜となつた。

そして、ハワイがハメハメハ大王を首班として独立する時に軍司令長官を任せられる者が居なかつた時にニミツに白羽の矢が立つた。ハメハメハ大王は自らニミツにハワイ王国軍最高司令長官に就任してほしいと頼みに行つた。

ニミツはこの時、もはや本国に帰つても予備役にされるだけだと考え、ハワイ王国軍最高司令長官就任を承諾した。

これにより、ニミツは捕虜収容所からハワイ王国府に出勤すれりいう事になった。

この他にも、元アメリカ軍の陸軍、海軍、海兵隊の人員がそれぞれハワイ王国陸軍、ハワイ王国海軍、ハワイ王国海兵隊として捕虜収容所から出勤している。

「まあ、 そうですね。」

ハメハメハが言った。

「近衛総理、 ありがとうございます。」

「ハミツが続ける。

「私はもはやアメリカ合衆国民ではなく、 ハワイ王国国民として生きていく覚悟です。 その為、 日本とは友好的な関係を築きたいと思います。」

「ハミツは自分の意思を言った。

「ハミツ君は凄いよ。 アメリカ合衆国民だったのにハワイ王国民として生きていく覚悟を決めたんだよ。 彼は凄いよ。」

ハメハメハが言った。

「ハメハメハ大王、 貴国の安全は必ず我が軍が守ります。 貴国の軍備が整つても我が国は毎年安全保障条約を自動延長します。 それでよろしいですか？」

近衛がハメハメハに聞いた。

「はい、 ありがとうございます。 我が国も早く一人前の軍備を整え

ますが、これからも安全保障条約を自動延長してくれるのは大変嬉しいおもいます。」

ハメハメハ大王が言った。

その後、大日本帝國及びハワイ王国の間に安全保障条約が正式に結ばれ、大日本帝國はハワイ王国の防衛を引き受ける事になった。

しかし、この安全保障条約は国内で大きな反対があった。

なぜ、見ず知らずの他国の防衛を皇国が引き受けなければいけないのか？と。

しかし、これは天皇陛下の国際協力の一貫と、発表したため、国内の反対派は急速に衰えていった。

この時、ハワイ王国は建国して初めてという未曾有の危機を迎えていたのを、まだ知らなかつた。

第30話 ハワイ独立ー！（後書き）

よくわかっています。ですから、独立憲連艦隊のパクリだとは言わないでください。

第31話 アメリカの秘策

1943年5月12日

サンディエゴ

この日のサンディエゴ港は騒然としていた。

何せアメリカ海軍の軍艦史上最大となる軍艦がサンディエゴにやって来たのだ。

ノーフォークで竣工した彼女は、遙々南アメリカ大陸を廻ってサンディエゴにやって來たのだ。

彼女の名前は『ユナイテッドステーツ』

日本でいう『大和』に並ぶ非常に重みのある、名前だ。

「やつと着いた。」

ユナイテッドステーツの艦橋に少女の声がした。

「そうだな、ステーツ。」

コナイトッドステーツの艦長である、メイヤーが答えた。

「メイヤー」

「何だい？」

メイヤーが聞いた。

「私は間に合わなかつたのね。」

ステーツが悲しそうに言つた。

「…………… そうだな。」

メイヤーが言つた。

「私はハワイを守るためにここまで来たのに、ハワイはもう占領されて、独立までしてしまつたのよ。悲しいわよ。」

ステーツが泣きながら言つた。

「……………」

メイヤーは何も言えなかつた。

ステーツはただただ泣き続けるだけだった。

メイヤーは彼女を優しく抱きしめた。

サンディエゴ港

「如何ですか？大統領。」

海軍長官のノックスが聞いた。

「うむ、いい出来だ。」

大統領の“トルーマン”は言った。

なぜ、ルーズベルトではなく、トルーマンかと言えば。

ルーズベルトはデーモン艦隊の生存や歐州戦線の腑甲斐なさ、議会の追及、国内の支持率急落により狂氣とかし、ハワイが占領された後に大統領執務室で拳銃自殺したのだ。

「このユナイテッドステーツを旗艦とした、特攻艦隊に頑張つてもらわねばいかんな。」

トルーマンは沈痛な面持ちで言った。

「はい。史上初となる艦隊特攻でハワイを取り返してほしいと思います。」

ノックスも言った。

「彼らはの死は、無駄には出来ん。」

トルーマンはそう言つとホテルに帰つて行つた。

残されたノックスは

「許してくれ。」

そう言つと、彼もホテルへ足を向けた。

ユナイテッドステーツ会議室

ここに、新編成となつたアメリカ合衆国海軍太平洋艦隊第一艦隊の面々が揃つた。

第一艦隊の配備艦は、

超弩級戦艦ユナイテッドステーツ
軽巡洋艦ブルックリン
駆逐艦ドーナン
駆逐艦ストーム
駆逐艦ピッチングガード
駆逐艦ゴーブル
駆逐艦ダドレー
駆逐艦ジェーン
駆逐艦ロバート
駆逐艦ハミルトン

の合計10隻である。

「諸君、心して聞いて欲しい。」

第一艦隊司令長官のマクヴェイが言った。

「今回は会議ではなく、私の話を聞くだけでいい。」

マクヴェイは続ける。

「今回のハワイ強襲は、史上初となる艦隊特攻だ。」

マクヴェイが言つと、他のものが騒ぎはじめた。

「諸君らの気持ちは分かる。最後まで聞いてほしい。」

マクヴェイはやうやく、また話始めた。

「艦隊特攻は、もはや生還出来ないかもしない。」

「燃料も片道分だ。」

「我々はパールハーバーに停泊していると思われる、レンゴーカン
タイに砲撃を加え、最後にはオアフ島に乗り上げて浮き砲台となり、
砲撃を続ける。」

「そして、最後は乗員全員が歩兵となり、白兵戦を挑む。」

「…………勿論、私が今言っているのは、キリスト教徒である、我々には当然理解しがたい行為だが、我々はそこまで追い詰められているんだ。」

マクヴェイは涙ながら話を続ける。

「我々は今から死に行くようなものだ。この艦にもまだ若い者が乗っていて、彼らも一緒に死に行かせねばいけないのは辛いが、許してくれ。」

「諸君らも、道連れにしなければいけないのは辛い。だが、考えてくれ。」

「誰かががやらねばいけないんだ。」

もはやマクヴェイの目から滝のように涙が溢れている。

「だから、諸君らに48時間の猶予を与える。その間に自分の艦に戻り、意見を出してくれ。」

マクヴェイはそう言つたと、最後にこう言つた。

「共に、死ぬ覚悟が出来たら、いつまでも話してくれる。」

「ワシントンモーメントで会おう。」

マクヴォイはやつぱり、会議室を出ていった。

人間の彼等が会議をしている頃、艦魂の彼女達も会議を行っていた。

「…………と言つわけです。皆さん。」

ユナイテッドステーツの艦魂、アリサが言つた。

「司令。」

軽巡洋艦ブルックリンの艦魂ユリが言つた。

「何?」

アリサが聞く。

「私達は司令に着いていきます。例えそれが死への旅でも…………」

ユリが言つた。

「私達もです。」

駆逐艦ドーナンの艦魂サラが言つた。

その後ろには同じ決意だと言つ、駆逐艦ストームの艦魂エレナをはじめ、リナ、ユキ、ナホ、キャシー、ヘレン、エリーがいた。

「みんな…………ありがとう。」

アリサは大粒の涙をみせた。

その夜

「さあ、階で騒ぎましょ。」

アリサの音頭で宴会が始まった。

「どうぞ、司令。」

ユリがアリサにビール瓶を渡した。

「ありがとう。」

アリサはそれに一口口を付けた。

「司令。」

「なあに?」

アリサが聞いた。

「なぜ、大統領は大西洋艦隊を太平洋に連れてこないのでしょうか?

ユリが言った。

「うーん。なんでだね?」

アリサは首をかしげた。

「日本は強いんですよ。ハワイも占領したんだですから、こいつ西海岸に上陸を始めてもおかしくないんですよ。」

ユリが言った。

「確かにねえ。」

アリサが言った。

「でも、私達がハワイの日本軍をやつつけばいいんでしょう?」

アリサが言つと、

「失礼ですが、司令は本氣でハワイの日本軍に勝てると思ってると思いませんか?」

エリーが聞いてきた。

「?」

アリサの頭に多数の?が浮かぶ。

「ハワイには日本が誇るレンジャー・カントーモン艦隊がいるん

ですよ。しかもタイタンまでいるんですから。」

エリーが言った。

あつ、タイタンとはアメリカ軍が富嶽に付けた「コードネーム」です。

「嘘つよね～」

アリサが言った。

「…………」

エリーが呆然と見つめる。

「ゴメンゴメン、ジョークよジョーク。」

アリサが言った。

「確かに、無謀よね。いくら私が10万トンを越えたからと言つても所詮、デーモン艦隊のヤマトには勝てないんだから。」

アリサが言った。

「いや、アリサ（コナイトッドステーション）の概要を説明すると、

最大幅 38 メートル

満載排水量 101500トン

速力 28ノット

主砲 46センチ連装4基8門

副砲 18センチ連装2基4門

高角砲 130ミリ連装両用砲20基40門

噴進砲 10センチ6連装10基

対空機銃 38ミリ4連装100基400門

オートジャイロ弾着観測機2機搭載

「しかし、司令。それでも行かねばならないのです。
」
ユリが言った。

「勿論よ。日本にヤンキー魂を見せてやるわ。」

アリサが大声で言った。

「その意氣です。」

ユリはそう言つて、笑つた。

マクガheyのほほー一方的な会議から48時間が経つた時、ユナイテッドステーツには第一艦隊全艦から、一言電文が届いた。

〔ワシントン州】コメンストで伝わる〕

マクガheyは涙を流して感謝したところ。

第32話 ハワイにて

昭和18年5月15日

アメリカの特攻艦隊が出撃を決めたその日。

ハワイは平和を享受していた。

しかし、敵が来ないからといって何もしない訳にはいかない。

もしもの時に備えて、ハワイ諸島全ての要塞化を急ピッチで行っている。

ハワイ要塞化には鈴木商店の土木会社が総動員され、工事が進められている。

まあ、要塞化と言えば聞こえが良いが要は、基地の建設とコンクリで海岸線添いを固めるだけであり。

そんな工事が急ピッチで進められている中、連邦商路護衛艦隊に護衛された輸送船団がパールハーバーに入港した。

「やつと、着いた」

少女が言った。

「ここがハワイか？」

さて、この少女の正体は？

それはまだ……

輸送船団がパールハーバーに入港し、戦車を揚陸させた。

この戦車こそ、海軍と鈴木商店が共同で開発した『25式重戦車』である。

そして、先ほど登場したのが25式重戦車の『車魂』である。

「上陸へ」

彼女はそう言った。

「さて、私はハワイの基地と第七独立機動艦隊に配備されるのよね。」

「よし、第七独立機動艦隊の艦魂に会いに行こう……！」

彼女はそう言つと、転移の光とともに姿を消した。

まあ、簡単に車魂の概念を説明すると。

一、車魂はその車種につき1人の車魂が宿る。

一、上記の通り車魂は車種につき1人の車魂が宿るために艦魂のよ

うに個別の車魂は宿らない。

- 一、車魂はその車体が存在する限り生存する。
- 一、車魂は特定の車体に宿るのではなくその車種全体の車魂として存在する。
 - 一、上記の例を挙げると25式重戦車を1000台生産しても車魂は1人。その1000台全ての車魂として宿る。

以上が車魂の説明である。

第七独立機動艦隊総旗艦大和

「由美」

今田も今田として早紀と由美がいらっしゃる。

「同令。やめてください。」

「またまた、そんな事言つて」

「やつ…………そんな所…………」

「フフフ」

…………やれやれ。

と、そんな話をしていると転移の光が出現した。

「あつ、はじめまして。」

少女が声をかけた。

「一.?」

早紀と由美が呆然としている。

「あつ、すいません。私は25式重戦車の車魂です。」

「しゃじん~?」

早紀と由美は共に叫んだ。

それから1時間後

第七独立機動艦隊の全艦魂が大和に揃つた。

「そう、あなたは25式重戦車の車魂なのね。」

亜由美が言った。

「はい。」

彼女が答える。

「ちょっとといいでですか？」

喜恵が聞いた。

「はい。何ですか？」

「あなたに真名はあるのですか？」

喜恵が聞く。

「いいえ、ないみたいで。ですから作者さんは私を、『彼女』と表現しています。」

彼女が答えた。

「あら、それじゃあ。私達が考えていい?」

早紀が聞いた。

「あつ、はい。それはいいですが。」

彼女が答えた。

「じゃあ、沙織ね。」

早紀が言った。

「沙織……」

彼女が考え込む。

「…………」

早紀が息を呑む。

「はー…………ありがとうござります。沙織。いい名前です、あります。」

沙織が言った。

「決まりね、よろしくね。沙織ちゃん。」

早紀達が言った。

「はい、もう少しでも願いしまわ」

沙織が言った。

これが早紀達と沙織の出会いだった。

更に3日がたつた、昭和18年5月18日

早紀達と沙織はとても親しくなった。

早紀達は沙織の自由な所が羨ましいみたいである。

早紀達はその艦に宿る艦魂の為、その艦から離れるわけにはいかないのだが、沙織は違つた。

沙織はその車種全体の車魂として宿る為、本土の25式重戦車に宿ると思えば直ぐにいけるのである。

「沙織ちゃんはここのへん自由だ。」

早紀が言った。

「や、そんな事ないですよ。」

沙織が言った。

「ウフフ、可愛いんだから。」

早紀の目が光る。

「早紀ちこ……」

沙織がおじ氣つぐ。

「もへ、我慢出来ない……！」

やつぱりつと、早紀は沙織の鳩尾に鉄拳を食らわした。

「うへーーーーー！」

沙織が倒れこむ。

「フフフ、楽しみましょ！」

早紀はやつぱりつと、沙織を連れて部屋へと消えた。

その頃、小沢達は富嶽掃射機バージョンからある通信を受け取って

いた。

「我、現在訓練中ノ富嶽掃射機デアル。ハワイオアフ島ノ北東約3500キロ地点ニ敵アメリカ海軍ノ艦隊ヲ発見。サンディエゴカラ出撃シテキタ模様。恐ラク、ハワイヲ目指シテイルモヨウ。」

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊第一艦隊（特攻艦隊）の発見であつた。

第32話 ハワイにて（後書き）

うへん。

ビリでしょ？

車魂は……

ご意見、ご感想お待ちしております。

設定が自由すぎますかな……

まあ好きなり〇〇でした

海軍だけでなく陸軍もまあ

第33話 ワシントンモーニングメントを終おつ

富嶽掃射機バージョンからの通信を受け、小沢と草鹿は議論を交わしていた。

「まあ。どう思いますか？」

草鹿が聞いた。

「うーん。そうだな～」

小沢が続ける。

「彼等は死を覚悟のうえで、ハワイに向かっているんだろう。」

小沢が言った。

「そうですね。」

「では、どうしますか？」

草鹿が聞いた。

「勿論、攻撃する。第七独立機動艦隊出撃だ。それと、機動群には艦載機の出撃を命令しろ。富嶽掃射機バージョンにもだ。」

小沢が言つと、参謀達は慌ただしく準備を始めた。

アメリカ合衆国海軍太平洋艦隊第一艦隊旗艦コナイトッドステーツ

第一艦隊は高空を飛び続ける富嶽に対する、有効な手立てがなかつた。

「艦長。 タイタンに対する手立てはないのか？」

マクヴェイがメイヤーに聞いた。

「申し訳ありません長官。 有効な手立てはありません。」

メイヤーが申し訳なさそうに言った。

「まあ、仕方ない。」

マクヴェイが言った。

その時。

「艦長。 タイタンが降下を始めました。」

レーダー員が言った。

「何？ 本当か？」

メイヤーが聞く。

「はい。 どうやらハミルトンに向かっているみたいです。」

レーダー員が言つた。

「ハミルトンに…？」

ステーツ（アリサ）が言つた。

「ステーツ。 大変な事になつたぞ。」

メイヤーが言つた。

「…………」

ステーツ（アリサ）は何も言えなかつた。

彼女は何か嫌な事を予感していた。

ステーツ（アリサ）の予感は的中した。

タイタンが降下を続け、遂に高度300メートルになった。

その目前には駆逐艦ハミルトンが、

そして、タイタンがハミルトンの上空に差し掛かったその時……！

ズヂズヂズヂズヂ……！

タイタンの機体下が炎に包まれたかと間違えるほど勢いで機関砲が発射された。

35ミリチタン被覆爆裂弾の威力は凄まじく、主砲塔はもとより艦橋や機関部にまで破壊し尽くした。

ハミルトンの艦上層部は鉄屑と化した。

「ツー……！」

ステーツ（アリサ）は歯を強く噛む。

「ステーツ。行つてやれ。」

メイヤーが声を掛けた。

「あの状況じゃ、ハミルトンの艦魂が心配だ。」

メイヤーが言った

「わかった。」

ステーツ（アリサ）はそう言つと、転移した。

駆逐艦ハミルトン

アリサがハミルトンに転移すると、そこは阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていた。

「うつ……」

アリサは田を背けた。

駆逐艦ハミルトンの艦橋は艦長以下乗員の死体が転がっていた。

「司令。」

コリが声を掛けた。

「Hリー――――――」

アリサがコリに近づくとHリーが血だらけでコリに抱き抱えられていた。

「Hリー――――――」

アリサが声を掛ける。

「し……れ……い……」

Hリーが擦れ声で答えた。

「無理しないの――――――」

アリサが言った。

「無理……なん……て……してま……せん

Hリーが答える。

「もう、喋りないの――――――」

「だい……じょ……う……ぶで……す……ガハ

「…………」

エリーはさう答えたが、血を吐いた。

「もうひ……」

アリサが泣きながら囁く。

「司令…………タイタンが旋回しきります。」

サラ（駆逐艦ドーナン）が言った。

「し…………れい…………じげて…………く…………だわ…………い」

エリーが囁く。

「バカ…………逃げるわけないじゃな……！」

アリサが囁く。

「いい…………え…………逃げて…………く…………ださい…………」

エリーが囁く。

「なんで…………何でなの！？」

アリサが囁く。

「司令…………早くお逃げください。タイタンが来ます。」

ユリが言った。

「嫌よ……………エリーをほっていけるわけないじゃな……」

アリサが泣きながら言った。

「し…………れい」

エリーが言った。

「何？」

アリサが聞いた。

「逃げ…………て…………くだ…………れ…………い…………しれ…………
い…………には…………ま…………だ…………ハフ…………イに行く
必要が…………あ…………りま…………す」

エリーが言った。

「…………」

アリサは答えられない。

「早…………く」

エリーが言った。

「…………許してね。」

アリサが言った。

「本当に？」

アリサはやうやく自分の艦に戻った。

アリサが自艦に戻ると、タイタンが再びハミルトンに攻撃を始めた時だった。

「ハリー……！」

アリサはやう叫んでいた。

駆逐艦ハミルトン

「しれ……い……皆……短い……間……だつ……」

た……けど……ありが……とい……皆の……
事は……忘……れ……ない」

ヒリーはそう叫ぶと目を閉じた。

その後、

ズドードドドドドドッ！！！！！

再び、35mmリチタン被覆爆裂弾がハミルトンを襲った。

一度目の攻撃で弱っていた箇所に再び攻撃を受けたので、多数の箇所が破損した。

そして、主砲弾薬庫に爆裂弾が命中。

ハミルトンは大爆発を起こし、沈んでいった。

「ヒリー！！！！！」

ステーツ（アリサ）はそう叫ぶと泣き続けた。

そこへ、第七独立機動艦隊の艦載機が高空から現れた。

第33話 ワンハントルマーマントを斬りつ（後書き）

「……………自分で書いていて、泣けてきました。

悲しそうな。

次回、第七独立機動艦隊艦載機による空

襲です。

第34話 壱沈

「ジエットです。テーモンからのザ・テスです。」

レーダー員が叫んだ。

「糞つ！！！」

マクヴェイが言った。

「全艦保てる火力を全てザ・テスに向ける！！！」

マクヴェイが命令を下した。

「エリーの仇！！！」

ステーツ（アリサ）は叫んだ。

突如、

ドグワアアアアアン！！！！

アメリカ海軍の軍艦としては、史上最大の主砲46センチ砲が咆哮した。

しかし、悲しいかなアメリカ海軍は三式弾みたいな物を持つていない。

しかしながら、VT信管が46センチ砲弾には付いてある。

だが、VT信管とは自ら電波を発し、その電波が目標物に当たり、反射した電波を受信すると着火して砲弾を破裂させる、という仕組みである。

しかし、ひっくり返せば電波を反射させずに、吸収すれば、破裂しないということだ。

そこで第七独立機動艦隊の艦載機には電波吸収装置が取り付けてある。

「何！？ VT信管が作動しないぞ！――！」

マクヴェイが言った。

「もしや、ザ・デスには電波吸収装置が取り付けられているかもしれません。」

参謀の1人が言った。

「糞つ――！――兵器の差が大きすぎる。」

マクヴェイが言った。

「艦長！――！敵が何かを発射しました。」

見張り員が叫んだ。

「糞つ！――！機銃、両用砲。撃て～～」

マイヤーが言った。

この時、第七独立機動艦隊の轟天と海王は空対艦ミサイルのみを装備して出撃していた。

そして、海王の前方を飛ぶ轟天が空対艦ミサイルを発射したのであつた。

「命中します。」

レーダー員が叫んだ。

二二二

マクウヒイが巣を喰み締めた。

トガアアアアアアーン！！！！！

空対艦ミサイルが駆逐艦ドーガン、ストーム、ヒッキンガム、ブルー、ダドレー、ジェーン、ロバートに命中。

駆逐艦全艦の艦橋に空対艦ミサイルが命中。

駆逐艦群は全て指揮能力を失った。

ユナイテッドステーツとブルックリンのみがノーダメージとなつた。

「サラ、ヒレナ、リナ、ユキ、ナホ、キャシー、ヘレナ！……」

アリサは叫んだ。

「ロケット弾の第一波が来ます！……！」

レーダー員が言つた。

「面舵いつぱい。」

メイヤーが叫んだ。

しかし、その努力虚しくコナイテッドステーツに空対艦ミサイルが命中した。

「グハッ！……！」

アリサは横腹からの激しい痛みに倒れこんだ。

「ステーツ！……！」

マクヴェイが駆け寄る。

「大丈夫よ。安心して。」

アリサは言った。

「被害報告！……！」

メイヤーが叫んだ。

「対空機銃及び両用砲、噴進砲は全滅しました。我が艦の火力は主砲と副砲のみです。」

参謀が言った。

「そうか……」

マイヤーが答えた。

「マクヴェイ。」

アリサが言った。

「何だ？」

マクヴェイが答える。

「作戦は続行よ。」

アリサが言った。

「勿論だ。」

マクヴェイが答えた。

「艦長、長官……水上レーダーがテーモン艦隊の主力を捕らえました。」

レーダー員が言った。

「糞つ！……！」

マクヴェイが言った。

「ザ・デスが引き上げます。」

見張り員が言った。

「艦砲で止めをさすつもりだな。」

メイヤーが言った。

「仕方ないよ。」

アリサが言った。

「……」

マクヴェイは黙つたままだつた。

「リバイアサンが発砲しました。」

レーダー員が言った。

「くつ……」

マクヴェイは死を覚悟した。

突如、

グワアアアアアアアン！――！

といつ、音と共に第一砲塔と第一砲塔が吹っ飛び。

右に15度傾いた。

「――？」

マクヴェイは驚いた。

珊瑚海海戦ではリバイアサンの一撃でモンタナ級でも沈んだのである。

それなのに今、リバイアサンは一発しか撃つてきていない。

どうしてとか？

「ハハハ、ステーツ。どうやら俺達はまだ死んでいないぞ。」

マクヴェイが言った。

「そう……ね……で……も……次は……無理よ」

アリサが言った。

「わかってる。」

マクヴェイは続ける。

「すまないな、ステーツ。お前を死なせる事になり。」

マクヴェイが言った

「仕方……な……い……わよ」

アリサが答えた。

その間にも傾斜は20度に達した。

「もう潮時かな?」

マクヴェイが言った。

「そ……うね……あり……が……といふ」

アリサが答えた。

「何を今更、こいつらが。」

マクヴェイが言った。

「死ぬ……と……死む……いつ……しう……よ」

アリサが言った。

「ああ、勿論だ。」

マクヴェイが答えた。

「こつ……ま……でも……こつ……しょ」

アリサはもう言つて、マクヴェイにキスをした。

その瞬間、大和の放った砲弾がユナイテッドステーツに命中。

その弾は水中弾だった為に喫水線に命中。

ユナイテッドステーツは見事に横転した。

そして、ユナイテッドステーツは海中で大爆発を起こし、海底深く沈んでいった。

時に、1943年5月18日午後2時23分の事であった。

「司令~~~！！！」

ブルックリンの艦魂ユリは叫んでいた。

戦後の話だがこの史上初の艦隊特攻は、スティーブン・スバルバーグ監督とクリントウーストウッド監督の2人（名前は誤記ではない。パラレルワールドと言つ設定であるから名前は少し違つ）により映画化された。

題名は『MEN OF UNITED STATES』である。

この映画は世界中で大ヒットとなつた。

第34話 壱沈（後書き）

リバイアサン 第七独立機動艦隊の水上艦

ザ・デス 第七独立機動艦隊の艦載機

デーモン艦隊 第七独立機動艦隊

本分中に出てきた電波吸收

装置は突っ込まないでください。

第35話 英靈よ永遠に

ユナイテッドステーツを沈めた第七独立機動艦隊は、ユナイテッドステーツの乗員の救出に当たつていた。

「長官。」

有賀が言った。

「何だ。」

小沢が聞く。

「彼等は何故ここまでしたのでしょうか？」

有賀が言った。

「そうだな～」

「大事な人を守る為かもしけんな。」

小沢が言った。

「大事な人を守る為ですか…………」

有賀が言った。

「ああ、そうだ。大事な人を守る為だ。」

「彼等は本土にいる家族、恋人、仲間を守る為にこのような事をしたのだ。アメリカはハワイを占領されて、本土空襲が現実味を帯びてきた。そこで、ハワイを奪還する為に、このような作戦をしたのだ。」

小沢が言った。

「大事な人を守る為に」

有賀が言った。

「お前も大事な人を守る為なら死ぬ覚悟はあるだろう?」

小沢が聞いた。

「勿論です。大事な人を守る為なら突撃でも何でもしますよ。」

有賀が言った。

「そうだろう。俺も同じだ。」

小沢が笑いながら言った。

「失礼します。」

草鹿が言った。

「何だ? 参謀長」

小沢が聞く。

「生存者の救出。完了しました。」

草鹿が言った。

「よし。では、始めよう。」

小沢が言った。

この後の行動は鹵獲されたブルックリンの乗員が、戦後語っている。

「デーモン艦隊はユナイテッドステーツの生存者を救出したんだ。我々は、デーモン艦隊は死をもたらすだけだ。と教えてきたのだが、どうやらそれは間違いだった。彼等は生存者を救出した後、海上慰靈祭を行つたのだよ。あれには感動したよ。デーモン艦隊全艦の乗員が甲板に集まり、ユナイテッドステーツの沈没位置に微動だにせずに、敬礼を行つていたんだ。しかも最敬礼。私は思わず見惚れてしまったよ。デーモン艦隊はデーモンではなかつたんだよ。

戦争だから彼等は戦いを行つただけだよ。」

このブルックリンの乗員は、死ぬ間際にこのよひつな言葉を残している。

「私は、特攻艦隊の生き残りとして、勇者と言われているが。本当の勇者は、戦場で死んだ彼等だ。」

この言葉を残し、彼は死んだ。

さて、ブルックリン以下駆逐艦群を鹵獲した第七独立機動艦隊は、ハワイに帰港した。

そこで小沢と草鹿は、近衛と山本そして、鈴木商店の金子に会った。

「おお、小沢に草鹿。」苦労だった。」

山本が言った。

「ありがとうございます。長官。」

小沢が答えた。

「今回は凄いものを持つてきたぞ。」

近衛が言った。

「何ですか？」

草鹿が聞いた。

「なあに、そう焦るな。すぐ解ることだ。」

金子が言った。

「じゃあ、ホノルルホテルに行こう。」

近衛はそつと車に乗り込んだ。

「ほら、早く乗れ。」

山本が言った。

「はい。しかし、大きい車ですね。」

小沢が言った。

「ああ、何でも豊田自動車の最新型らしいぞ。」

山本が言った。

「歐米のリムジンなどをモデルに、開発したんじや。」

金子が言った。

「何故金子さんが知ってるんですか?」

草鹿が聞いた。

「豊田自動車は鈴木商店系列の会社じゃ。」

金子が言った。

「まあ、早く乗れ。」

山本が言った。

「わかりました。」

小沢達はさう言つと、車に乗り込んだ。

ああ、勿論ながら。

豊田自動車は戦後のトヨタ自動車の事である。

戦後日本の会社は、その殆どが鈴木商店の系列になつてゐる。

トヨタ自動車を筆頭に、いすゞ自動車・本田技研工業・日産自動車・任天堂・松下電器産業・日立製作所など、挙げ句の果てには三菱や三井等の財閥まで系列会社にしてしまつたのだ。

しかもしかも、アメリカのビッグ3を筆頭にイギリス、フランスの老舗ブランド会社までも買収してしまつたのだ。

これ以上言つと、第一部の楽しみが無くなるのでこれ位にしておく。

ホノルルホテル

最上階の会議室に全員が揃つた。

「さて、今日は第七独立機動艦隊にある物を取り付ける。」

近衛が言った。

「またパワーアップですか？」

小沢が聞いた。

「そうだ。これは金子さんに言つてもうらう。」

山本が言った。

「いや、ワシより詳しい人物を連れてきたからそやつに説明させよう。入つてこい。」

金子が言つと、

「失礼します。」

一組の男女が入ってきた。

「小沢長官、草鹿參謀長。はじめまして。天野といいます。」

「私は水香といいます。」

男女が言った。

「天野君は君の艦隊の兵器開発部門の部長だよ。」

山本が言った。

「そして、水香君は東京帝國大学校の工学博士だ。」

近衛が言った。

「てことは、我が艦隊の兵器は全て天野さんが開発したんですか？」

小沢が言った。

「そうだ。」

山本が言った。

「それはそれは。」

小沢が言った。

「まあ、それはさておき。本題に入る。」

「天野君、水香君。説明してくれ。」

金子が言った。

「了解しました。では。」

そう言つと天野は、説明しはじめた。

「天野君。資料、資料。」

水香が言つ。

「あつ。すいません。」

天野が慌てて配りはじめた。

「それでは、気を取り直して。」

今度こそ、説明をはじめる。

「今回、第七独立機動艦隊には原子力発電機を取り付けます。」

天野が言った。

「本来ならば、原子力機関を取り付けたいんですが。原子力機関を取り付けるには1年間の突貫工事が必要なんです。」

天野が言った。

「原子力発電機は、フィラデルフィア理論を使い空間移動をするためのエネルギーを発生させる発電機です。」

「これにより、原爆のエネルギーを得てから空間移動を行つのではなく。自分で自身で自由に空間移動が可能になりました。」

天野が引き受けた。

「そして、原子力機関とは石油を使わずウランという物質を使うため、石油の給油がいらず航続距離が無限になります。」

「勿論、原子力発電機にもウランを使う為石油を使わずエネルギーを産み出す事が出来ます。」

天野と水香の説明が終わった。

「簡単に言えば、原子力機関は1年間の突貫工事が必要で搭載は無理。だから原子力発電機を搭載して、空間移動だけは出来るようになります。てなわけか？」

小沢が言った。

「はい。そうです。」

天野が答えた。

「凄いじゃないですか！！！…これで自由に空間移動が出来るんですから、敵の目の前に出現する事も出来ますよ。」

草鹿が興奮気味に言った。

「確かにそうだ。」

山本が言った。

「天野君。空間移動はどれくらい可能なんだ？」

小沢が聞いた。

「8000キロは楽に移動出来ます。」

天野が言った。

「何！？8000キロだと！？」

小沢が言った。

「はい。8000キロです。西海岸で空間移動すれば東海岸に移動出来ます。」

天野が冷静に言った。

「凄い。」

小沢が言った。

「取り付けには何日かかるんですか？」

草鹿が聞いた。

「1週間もかかるないと思います。」

水香が言った。

「ハハハ。これで第七独立機動艦隊の武勇伝がまた1つ増えたな。」

金子が笑った。

「確かにそうですね。」

小沢もそう言ひと笑った。

昭和18年5月25日

第七独立機動艦隊は原子力発電機の取り付けを終えた。

その日、在ハ大日本帝國富嶽戦略空軍が大挙出撃した。

アメリカ合衆国西海岸上陸作戦の前哨戦、アメリカ本土空襲作戦が始まった。

第35話 英靈よ永遠に（後書き）

よくわかつてこます。

から発掘出来ると云ひつ事でお願いします。

あまり、突つ込まないでください。

ウランは満州

第36話 アメリカ本土空襲

昭和18年5月25日

在ハ大日本帝國富嶽戦略空軍がアメリカに向けて、出撃した。

爆撃機バージョン300機、掃射機バージョン200機の合計500機である。

爆撃機バージョンには新開発の、超大型焼夷弾を12発搭載している。

超大型焼夷弾は通常の焼夷弾を物凄く大型化したものである。

全長5・5メートル

重量4・5トン

全くもつて、破格の大きさである。

そして、1番大事な事であるのが、爆撃目標であるが……

爆撃目標は……

ニューヨーク

何故に、ニューヨークかと言えば。

確かに、西海岸に上陸するのだから西海岸全土を空襲すればいいのだが。

それはそれ。

東海岸のニューヨークを空襲すれば、アメリカに富嶽の航続距離を知らしめてアメリカ国民に恐怖を与えると言つわけだ。

地図を見れば一目瞭然。

一一〇一—三〇一はワシントンのひとつも、更に東に位置する。

昭和18年5月25日深夜から翌5月26日の早朝まで、一一〇一三〇一はそれはそれは凄い事になった。

25日の深夜に、一一〇一三〇一に到達した富嶽戦略空軍は爆撃を開始した。

高度18000メートルからは信じられない正確さで超大型焼夷弾

が降り注ぐ。

勿論の事ながら、アメリカ軍も反撃に出るのだが。

高度18000メートルの高空。

新型のP51マスタング（トルーマンの命令で早期完成）やF4Uコルセアがタイタン迎撃に出撃したが、

掃射機バージョンの前に、全機撃墜された。

掃射機バージョンが敵機を撃墜している間に、爆撃機バージョンは更に爆撃を続行。

ウェストサイド、イーストサイド等は壊滅。

ブルックリン橋、マンハッタン橋、ウエリアムズバーグ橋も超大型焼夷弾の前に砕け散った。

そして、極め付けは何と言つても、エンパイアステートビルの崩壊である。

この、アメリカの象徴とも言えるエンパイアステートビルの崩壊は逃げ惑う、ニューヨーク市民が最後まで見届けた。

超大型焼夷弾15発の直撃を受け、エンパイアステートビルは崩壊した。

そして、掃射機バージョンは敵機を撃墜した後、ニューヨークへの攻撃を開始。

逃げ惑う市民を殺戮していった。

まだ、生き残っていた市民であるが。

多数の瓦礫の山と超大型焼夷弾による火災により、全員が死亡した。

富嶽戦略空軍はニューヨークへの攻撃を終えると、ハワイへの帰路に着いた。

その途中、まだ超大型焼夷弾を残していた富嶽が自由の女神にそれを投下。

自由の女神を破壊した。

富嶽戦略空軍は500機全機無事にハワイに帰還した。

このニューヨーク空襲により、ニューヨーク市民の死者は約20万人と言われる。

戦後にアメリカの民間団体が日本を提訴したが、アメリカ政府が民間団体に圧力をかけ、提訴を有耶無耶にした事もあった。

酷いようだが、これが勝者と敗者の格の違いというわけだ。

第36話 アメリカ本土空襲（後書き）

ヒヒヒ、アメリカ国民め。目標殺戮数100万。
メリカ。 小説の中ぐらいぼこぼこにわせん。

覚悟しろ、ア

第37話 ノーフォークの悲劇

昭和18年5月28日

第七独立機動艦隊はサンディエゴの西1500キロの沖合ににいた。

「長官。準備完了です。」

草鹿が言った。

「よし。それではフイラデルフィア理論作動。」

小沢が言った。

「了解。フイラデルフィア理論作動！！！！！」

草鹿が復唱した。

突如、第七独立機動艦隊の各艦から凄まじい光が発生した。

その光が消えると、そこには変わり無い海原が広がっていた。

さて、今回の作戦はノーフォーク軍港の壊滅と太平洋支援のに向かう大西洋艦隊の全滅。

この2つが目的である。

大西洋に来るには南アメリカ大陸を迂回しなければいけない、とうアメリカの常識を根本から覆す作戦である。

何せチェサピーク湾にデーモン艦隊（アメリカ公称）がいきなり現れるのだから……

ワシントンDCホワイトハウス

この日、アメリカ合衆国大統領のトルーマンは緊急の会議を開いていた。

文官ではハル国務長官とモーゲンソーア財務長官が、軍人ではノックス海軍長官とスチムソン陸軍長官の4人が出席していた。

「…………以上がニューヨーク空襲の被害状況です。」

ハルの説明が終わった。

「なんと云つ事だ。死者が約20万！？」

トルーマンが言った。

「はい。」

ハルが答えた。

「悪夢だ。」

トルーマンが言った。

「しかし、大統領。そう言っても何も始まりません。」

スチムソンが言った。

「確かに。モーゲンソー、被害総額はどうだ。」

トルーマンが聞いた。

「はい。これが被害総額です。」

モーゲンソーがトルーマンに書類を渡した。

「.....」

トルーマンはわが目を疑った。

まあ、そうだろう。

今の貨幣価値にすると.....

B2が10機位購入出来るかも……

「大統領。我々としては現在建造中のミッドウェー級とモンタナ級全艦のキャンセルを提案します。」

モーゲンソーがそう叫びつゝ、

「何をバカな！――海軍が機能しなくなるぞ！――！」

ノックスが叫んだ。

「しかし、海軍長官。今は軍より國民生活の方が先決です。モーゲンソーが続ける。

「私としては早急に日本と講和するべきだと思います。しかしそれは無理でしょうから、ミッドウェー級とモンタナ級全艦のキャンセルを提案したんです。」

「当然だ――――日本との講和など考えるものか。」

トルーマンが言った。

「…………仕方ない」

ノックスが言った。

「ありがとうございます。海軍長官。」

モーゲンソーが礼を言った。

「よし。それでは決まりだな。ミッドウェー級とモンタナ級全艦の
キヤンセルを大統領めい」

トルーマンが言い終わる前に秘書官が大統領執務室に飛び込んでき
た。

「何だね、いつたい。」

スチムソンが聞いた。

「デーモン艦隊が…………デーモン艦隊がノーフォークに現れまし
た。」

秘書官が言った。

「何！？」

トルーマンはそう叫んだ。

ノーフォーク軍港

「主砲撃て～～」

有賀が言つと、

ズドオオオオオオオン！～～～

51センチ3連装3基9門の主砲から五式弾9発がノーフォーク軍港に向かつて発射された。

「全く。張り合いか無いわね。」

戦艦大和の艦魂である早紀が言った。

「全くです。」

25式重戦車の車魂である沙織が答えた。

「上空は轟天しか飛んでないし。」

早紀が言つ。

「もう、大西洋艦隊は沈みましたからね。」

沙織が言つた。

「全くよ。せつかく楽しめると思つたのに。」

早紀が言つ。

確かにその通りだ。

アメリカ合衆国海軍の残された希望、大西洋艦隊は第七独立機動艦隊が空間移動したすぐ後に壊滅した。

空間移動直後の各砲塔射撃により大西洋艦隊の主力である、モンタナ級4隻とエセックス級10隻は一瞬で轟沈。

大西洋艦隊は2分で壊滅した。

死者数2万人。

残り7~8万.....

「おー、お二人さん。何を樂しそうに話してこら?」

小沢が言った。

「何でもいいでしょ。」

早紀が言う。

「あー、小沢長官。『苦勞様』です。」

沙織が叫ぶ。

「おお、沙織。頑張つてゐな。」

小沢が言った。

なお、小沢にも車魂が見える。

車魂は通常は真名は無いため、普通に沙織と呼べる。

「はー。ありがとついぞります。」

「ハハハ、沙織はかわいina。」

小沢が言った。

「ロココンがつ……。」

早紀が言った。

一九四三年でロココノヒト吉川ひづる、.....

気にしないでトセー。

「ひどい奴だな。」

小沢が囁く。

「当然よ。」

早紀が言った。

「まあいい。」

小沢が続ける。

「やうやく、帰るからアメリカの景色をよく観ておけよ。」

「 もう帰るの?」

早紀が言った。

「ああ。大西洋艦隊は呆氣なく壊滅したし、ノーフォーク軍港は見ての通りだからな。」

小沢が言った。

「確かに……」

沙織が言った。

「じゃ、そう言つ事だ。」

小沢はさつ言つと、艦橋へ帰つていった。

「全く。あの馬鹿作者。もづきよつと詳しく述べなさいよ。」

早紀が言った。

「ちよ、早紀さん。本編でそんな事を言わなくとも。」

沙織が宥める。

「大丈夫よ。今喋つてるのも、あの馬鹿が書いてるんだから。自分で自分を馬鹿扱いするなんて、正真正銘のドミね。」

早紀が言った。

「確かにそうですね。」

沙織が同意する。

「まあいいわ。もつすぐノーフォークにバイバイするんだから。」

早紀が言った。

「けど、もうちょっと詳しく書いてもらいたいです。」

沙織がそう言つと、第七独立機動艦隊の各艦が光に包まれた。

そして、第七独立機動艦隊はノーフォークから消えた。

ノーフォーク軍港及び大西洋艦隊壊滅。

第37話 ノーフォークの悲劇（後書き）

大西洋艦隊が壊滅したため、ドイツとの戦いまで海戦はありません。

これから多発するのは富嶽戦略空軍による空襲。　曰

本の総力をあげてのアメリカ合衆国西海岸上陸作戦

そして、アメリカ合衆国降伏の決めてとなる原爆投下。

第38話 講和

昭和18年6月1日

第七独立機動艦隊はカナダのジェームズ湾に位置していた。

何故力ナダのジェームズ湾にいるのかと言えば、カナダにいるロイヤルファミリーとチャーチル内閣との講和会議の為である。

勿論、アメリカとイギリスは同盟を結んでいるのだが、最近の日本軍の攻勢やアメリカ海軍の壊滅を受けてイギリスも日本と講和した方が得だと考えたのだ。

そして、鈴木商店のカナダ支店に掛け合い講和会議が決まったのだ。

そして、第七独立機動艦隊に政府代表として近衛文麿と豊田副武、日本軍代表として山本五十六、経済界代表として金子直吉の5人が出席する事になった。

会議場のオタワまでは早期警戒機星雲で向かう、一応念のために艦上戦闘機轟天20機の護衛を付けて。

オタワ、とあるホテル

近衛達が部屋に入るとジョージ五世とチャーチル首相が待っていた。

「いやー、遠路はるばるお苦労様でした。」

ジョージが言った。

「いやいや、イギリスとの講和とあつては疲れたなど言つてこる場合ではないです。」

近衛が言った。

「ワシは疲れたがな。」

金子が言った。

「んー? 金子じゃないか。」

ジョージが言った。

「おおつ……ジョージじゃないか。」

金子が答えた。

「いやあ、君には世話になつたな。」

ジョージが言った。

「なあに、気にするな。」

金子が言った。

「金子、ちょっと込み入つた話がしたい。隣の部屋に来てくれ。」

ジョージはそう言つと隣の部屋に誘つた。

「よし、わかつた。」

金子が言った。

「ああ、近衛総理も来てくれ。」

ジョージが言った。

「わかりました。豊田君、後は頼んだ。」

近衛はそう言つと隣の部屋に行つた。

「ハハハ、国王と金子さんはやつぱり仲が良い。」

チャーチルが笑った。

「そうですね。」

山本もそういふと笑つた。

「長官。何故仲が良いんですか？」

豊田が聞いた。

「ああ、金子さんは鈴木商店の大番頭だろ。で、鈴木商店は戦前は世界中に支店を持っていた。そして、イギリスが一番多かつたんだよ。」

山本が続ける。

「鈴木商店はロイド保険とも繫がりがあり。ロスチャイルドとも繫がりがあった。そして、自然と国王とも繫がりが出来たのだろう。私の考えだが、多分国王は日本に資本の移動を考えているだひつ。」

山本が言つて、

「流石は山本長官です。我が国の考え方をそこまで読んでいるとは……」

チャーチルが驚く。

「私の考えは、ロスチャイルドが本国陥落によりアメリカに食い込んだ。ロスチャイルド以外にも多数の資本がアメリカに食い込んだが、アメリカ一国だけだと後の事が心配だ。そこでイギリス資本は日本に目を付けた。日本なら安心して取引が行えるからな。ロンドンが機能不全に陥つた今、ニューヨークが世界唯一の巨大金融センターとして君臨し、世界的な金の流れを独占している。それに危機を感じたイギリスは日本にも一大金融センターを打ち建てるべきだと考えた。そして、東洋屈指の巨大巨大市場を作り上げ、ニューヨークにも対抗出来るように考えた。」

山本はなおも続ける。

「ところが、日本がニューヨークを空襲したためニューヨークまでもが機能不全に陥つた。そこでイギリスは尙更日本に巨大金融市場の立ち上げを急ぐのだ。多分イギリスは東洋最大の外為銀行の香港上海銀行を日本に吸收させようと考えているはずだ。あそこは本国陥落に動搖しており落ち着く場所を探している。しかもイギリス陥落によつて、大量の資金が海外に流出したからその資金も使える訳だ。」

「イギリスは既に戦後を見据えている。ヨーロッパのロンドン、南北アメリカのニューヨーク、極東の東京。この三ヶ所で世界経済を動かそうとしている。」

山本はそつと切つた。

「素晴らしい。流石は山本長官だ。私が言おうとしていた事を全て言つてしまつた。凄い。」

チャーチルが称賛する。

「ありがとうございます。」

山本が礼を言ひ。

「私は嬉しい、こんな素晴らしい国と講和出来るとは。」

チャーチルが言つた。

「では閣下。講和条約に署名を。」

豊田が言つた。

「勿論だとも。」

チャーチルが言つた。

これにより、大日本帝國とイギリスの間に講和条約が結ばれた。

大日本帝國はイギリス奪還支援の為、来月早々に第八特務機動艦隊を派遣する事になった。

そして、第一次日英同盟も同時に締結された。

大日本帝國はイギリス奪還支援の為、対米戦の早期終結を約束した。

例え何万と殺戮しようが……

第38話 講和（後書き）

やつと、イギリスと講和出来ました。これにより、第八特務機動艦隊～援英派遣！！英の守護神～が本格的に始まります。そちらもよろしくお願いします。

第39話 西海岸上陸計画

昭和18年6月25日

料亭『赤松』にて会議が開かれた。

今回の会議は来たるべくアメリカ合衆国西海岸上陸作戦についての会議である。

「これはこれは、皆わんお集まりいただきありがとうござります。」

近衛が言った。

「まあ、そんな挨拶はなしにして早く始めよつではないか。」

金子が言った。

「そりですな。では始めさせてもらひます。」

近衛はそりと栗林に会図した。

「では最初に、陸軍の状況からお話しします。」

栗林はそりと説明を始めた。

「今回はアメリカ合衆国西海岸上陸作戦と言つ事で、陸軍は50個師団を投入します。そして20式重戦車と25式重戦車が主力の機

甲師団を各10個師団の合計70個師団で西海岸に上陸します。まあ、西海岸上陸と言つても西海岸全土を占領するのは確実に無理ですからカリフォルニア半島とロサンゼルス・サンディエゴ・ラスベガス位を占領出来ればたいしたものですよ。」

栗林が言い終えると。

「陸相の意見は誠に持つて、的を得ている。アメリカは自分の国で戦うのだから確実に有利だ。我々も相当な被害を覚悟せねばいかんぞ。」

山本が言った。

「まあ、そうですね。」

近衛が同意する。

「では次は海軍の状況を。」

豊田が説明を始めた。

「海軍も今回の作戦には全艦を投入して作戦を行います。本土に1艦も残りません。連合艦隊・第七独立機動艦隊・連邦商路護衛艦隊を総動員します。第八特務機動艦隊は援英派遣ですからシンガポールで訓練の後にカナダへ向かいグリートブリテン島への攻撃を行います。連合艦隊・連邦商路護衛艦隊の全艦にもフィラデルフィア空間移動機関を装備しましたので、空間移動が可能です。後、各艦隊の主力艦には航空機の空間移動を行う為の空間移動エネルギー投射パラボラアンテナを設置しましたので、航空機も空間移動が可能です。富嶽戦略空軍は先日から西海岸全土に対し、包括的な空襲を行

つています。上陸作戦時には敵兵力は多少は減つていいでしょう。

豊田の説明も終わった。

豊田の言つた通り、富嶽戦略空軍は先週から西海岸全土に空襲を慣行。

18万の被害を与えている。

残り60万……

「そうかそうか、陸海空共に準備は万端じゃな。」

金子が言つた。

「連邦商路護衛艦隊はどうですか？」

近衛が聞いた。

「大丈夫じゃ、既に出撃準備は完了している。後は作戦開始を待つだけじゃ。」

金子が笑いながら言つた。

「解りました。流石は鈴木商店です。アメリカと講和した後のアメリカ進出も上手く行きそ�ですか。」

近衛が言つた。

「当たり前じや、我が鈴木商店はイギリスとの講和会議の後から戦後経済の事について、既に決めてある。東京に出来た東京証券取引所を通しアメリカとの講和後にアメリカ資本の買収を目指すのじや。香港上海銀行を我が鈴木商店が吸收した事により資金に大きな余裕が出来た。アメリカに進出したらＵＳスチールでも買収出来るじやろう。」

金子が言つと、

「ＵＳスチールもですか！？」

山本が驚きの声を上げた。

「勿論、香港上海銀行を吸收し南方地帯の資本も鈴木商店傘下の鈴木銀行の物じや。野村證券やその他財閥の銀行も鈴木銀行傘下の鈴木銀行の傘下に入つたから鈴木銀行はモルガンスタンレーと同等、或いはそれ以上かもしけんな。ハハハ」

金子が言つた。

「モルガンスタンレー以上……」

蔵相の池田が呆然と答えた。

「モルガンスタンレー以上？」

未だにピンと来ていなかった豊田に池田が説明を始めた。

「アメリカでは預金を管理して融資する商業銀行と、株式や証券を引き受け、その手数料を取る投資銀行に明確に分けられているんです。モルガンスタンレーは後者の筆頭で、アメリカ屈指の資金力を誇ってるんです。そのモルガンスタンレーと同等或いはそれ以上と言つては鈴木商店傘下の鈴木銀行はとてもない化け物ですよ。」

池田が言つた、

「…………」

豊田は顎が落ちたのか、口を開けたまま呆然としてしまった。

「日本とアメリカが講和すれば必ずアメリカ資本は日本資本の買収を考えるじゃらう。だから鈴木商店がU.Sスチールの一つ買収してやればモルガンスタンレーと言えども怖じ氣つくと考えたんじゃ。日本にモルガンスタンレーと同等或いはそれ以上の銀行があればアメリカは無闇に日本資本買収を考えない、だからワシらからアメリカ資本を買収してやるんじゃよ。U.Sスチールを買収して混乱している間にエクソンでもモービルでもメリルリンチでもゴールドマンサックスでもボーイングでもグラマンでもロッキードでも何でもいい、用は何かしら買収してやればいいんじゃよ。アラスカの油田採掘会社と鉱山採掘会社は必ず買収してやる。」

金子が言つた。

「凄い…………」

池田が続ける。

「財閥銀行の総力を上げてモルガンスタンレーに勝てるかどうか怪しいのに、鈴木商店の一族銀行がモルガンスタンレーと同等或いはそれ以上なんて……」

池田が言つた。

「ハハハ。それと、皆の衆にはまだ驚くべき事があるぞ。」

金子はそう言つと仲居に呼んでくるよひに言つた。

「誰が来るんですか？」

近衛が聞いた。

「まあ、慌てるな。」

金子が言つた。

すると、

「失礼します。」

男の声が聞こえ2人の人物が入ってきた。

「お前達は……」

栗林が驚いた声で言つた。

そこには、死んだはずの

山下奉文と牟田口廉也がいたのだ。

「何故お前達がいるのだ？」

栗林が言った。

「それは、金子に聞いて下せ。」

山下が言った。

「説明しよう。あの1・3事件はこの2人ではなく海軍の嶋田と陸軍の辻が考えたのだよ。」

金子が説明を始めた。

「そして、それを知つた我々はこの2人を匿う事にしたんだよ。あの事件で死んだのは嶋田と辻、それにこの2人の影武者だよ。」

金子が言い終えると、

「何とまあ。」

栗林が呆然とする。

「陸相、すいませんでした。」

山下と牟田口が謝罪した。

「何、丁度良かつたよ。上陸軍の指揮官を誰にするか悩んでいたんだよ。2人には上陸軍の指揮官になつてもらひ。いいだろ?」

栗林が言った。

「ありがとうございます。」

山下と牟田口は礼を言った。

「よし、決まりじゃ。後はいつ作戦を開始するかじや。」

金子が言った。

「その日は、7月15日です。」

近衛が言った。

第39話 西海岸上陸計画（後書き）

次回第40話から、第八特務機動艦隊～援英派遣！～英國の守護神～とのリンクを開始します。

始める始めると書きながら結局次回にまでもつれ込んでしまい、申し訳ありません。

第40話 アメリカ合衆国西海岸上陸作戦

昭和18年7月15日

ロサンゼルス沖

大日本帝國は国軍の総力を投入してアメリカ合衆国西海岸上陸作戦を慣行した。

第一波攻撃は陸軍20個師団、20式重戦車10個師団、輸送船1800隻、戦艦23隻、巡洋艦45隻、護衛艦船300隻、戦闘機・爆撃機・攻撃機・輸送機総数18500機に及ぶ、日本史上最大の作戦である。

連合艦隊旗艦長門

「全艦、対地制圧射撃を開始せよ。」

山本の命令が飛ぶ。

連合艦隊全艦が上陸予定地のロングビーチの防衛線に向け、攻撃を始めた。

そこには、戦車や重砲が配備されている事は先日の偵察で解つていた。

「長官、遂に始まりましたね。」

宇垣が言った。

「そうだな。大国アメリカに一石を投じたのだ。これは凄いぞ。」

山本が言った。

「確かに、我々はアメリカ占領の第一歩を踏み出しましたね。」

宇垣が答えた。

「ハハハ、我々は逆黒船だな。」

山本が笑いながら言った。

「黒船ですか？」

宇垣が聞いた。

「ああ、黒船だ。その昔ペリー提督率いる黒船が……まあ巡洋艦だな……日本に来たではないか。その黒船に負け、日本は開国し日米修好通商条約を結んだな。今回の逆黒船は、アメリカとの講和するのが目的だ。まあ、アメリカ上陸を頑張ろうではないか。」

山本が言った。

「はい。頑張りましょ。」

宇垣が答えた。

第七独立機動艦隊旗艦大和

ズドオオオオオオオン！――！

第七独立機動艦隊の全艦もロサンゼルスのロングビーチへの対地制圧射撃を行っていた。

「長官、嶺花の報告によるとロングビーチに配備されている戦車や重砲は破壊しつくしたみたいです。」

草鹿が言った。

「そうか。富嶽戦略空軍と海軍全艦がロングビーチを攻撃したんだ。しかしあらう壊滅したか。」

小沢が言った。

「最近のアメリカは腑甲斐ないわね。」

早紀が言った。

「大和もそう思うか……」

小沢が言った。

「私もそう思います。」

沙織が言った。

勿論の事ながら、第七独立機動艦隊の陸戦隊も上陸作戦に参加する。

「ハハハ、そうだな。沙織もそう思うか。アメリカも大変だな。」

小沢が言った。

「アメリカ没落が始まつたと言つ事ね。」

早紀が言った。

「そうだな。アメリカも大変だな。」

小沢がそう言つと、

「長官！……対空レーダーがアメリカ本土からの大編隊を捕らえました。」

レーダー員が言った。

「何！？大編隊？どれくらいの規模だ？」

草鹿が聞いた。

「約200です。」

レーダー員が言った。

「200-?」

草鹿が叫んだ。

「落り着け、参謀長。」

小沢が言った。

「レーダー員、機種は特定出来るか?」

小沢が聞いた。

「多分、全てがドーントレスです。」

レーダー員が言った。

「ドーントレスだけ?」

草鹿が言った。

「何か匂うな…………」

小沢が言った。

事実、小沢の言った事は現実の通りとなつた。

連合艦隊旗艦長門

「全艦持てる火力を敵機に向ける……！」

山本が叫ぶ。

先ほど、第七独立機動艦隊が捕らえたドーンレスは連合艦隊、連邦商路護衛艦船の護衛する陸軍輸送船団に自爆攻撃を行い始めた。

第七独立機動艦隊から敵大編隊を捕らえたとの連絡を受けた連合艦隊は、一応の対空戦闘態勢に入った。

すると、敵機が急降下を始めた。

猛スピードで急降下する敵機に山本達は、呆気にとられた。

5000を切り、4000、3000と降下して、ついには1000を切った。

しかし、敵機は急降下を続ける。

そして、3機が陸軍が乗っている輸送船3隻に命中。

3隻はすぐ間に轟沈した。

山本達は立ちすくんだ。

キリスト教の米兵が自爆攻撃を行つたのだ。

しかも、次々と残りの敵機が急降下を始めた。

山本はそこで、

「全艦対空戦闘開始――――」

そして、先ほどの山本の命令に戻る。

「しかし、長官。まさかアメリカがこのよつたな愚策を行つとは……」

…

宇垣が言つた。

「ああ、まさかアメリカがな……」

山本が続ける。

「しかし、そのまさかだ。現にアメリカはその自爆攻撃を行つた。油断は禁物だぞ、参謀長。」

「了解いたしました。」

宇垣が答えた。

その後、連合艦隊・連邦商路護衛艦隊は正々堂々とドーントレース大編隊と戦つた。

そして、第七独立機動艦隊も支援に駆けつけ全機を叩き落とした。

悪夢は去つたのだ。

しかし、山本は思った。

「これから先も、あのよつたな攻撃があるのか……」

ヒ。

第41話 ロングビーチ上陸

昭和18年7月16日

すべての予備攻撃をおえると、日本軍は上陸作戦を開始した。

1800隻の輸送船団が、すべて複数の大発を積んでいる。

これはデリックで降ろすようになつていて、

これは日本陸軍が発明したすぐれた上陸用舟艇で、9・5トン、8ノット、完全武装の兵士70人を乗せられる。

米軍は、のちにこれを手本としてLCVPをつくったほどである。

これらがいっせいに列線をなし、ロングビーチを中心として、サンタモニカビーチまでの広い海岸線に向かつた。

各師団が上陸地点を振り当てられ、最も重要だと思われるロングビーチには、山下大将指揮の近衛師団が向かつた。

これを援護する母艦機が飛来して、米軍の抵抗をくじきにかかつた。

さらに富嶽までその姿を見せたので、その掃射機の恐ろしさを知っている米兵は、それだけで戦意を喪失してしまつた。

しかし、なんといっても祖国にはじめて敵が上陸するのである。

これが意味するものは大きい。

指揮官から、はげしい叱咤を受けた兵士たちは、生き残った塹壕やトーチカにたてこもり、ジャップの上陸用舟艇の接近を待つた。

これもまた、やはり史実のノルマンディー上陸作戦の裏返しだといつていい。

ロンメルが『大西洋の防壁』と豪語したノルマンディーの海岸防壁は、資材不足のためじつは貧弱なもので、ドイツ空軍の援護もなくドイツ軍の頭上を飛び回るのは、敵機ばかりだった。

しかし、ドイツ将兵は猛然とこの敵に立ち向かった。

いつたん、フランスに上陸を許したらこの戦争は負けであることを、一介の兵士すらよく知っていたのである。

彼らは必死に戦い、そのため攻撃正面のオマハビーチで、主力のアメリカ第1師団は壊滅に瀕してしまった。

作戦司令部は、いつたんは作戦失敗を覚悟したほどである。

だが、米兵もじぶとかつた。

最後の勇気をふりしぼってコンクリの巨大な防壁を爆破し、怒濤の「」とくドイツ軍防衛線になだれ込む。

このあいさまは、映画『史上最大の作戦』に詳しく描かれている。

また、ドイツ軍の防御砲火がいかに猛烈なものであったかは、スピルバーグの映画『プライベート・ライアン』を見るとよく分かる。

後者の、その戦闘描写のリアルさに誰しもがぶつ飛んだものだ。いかにCG効果の技術があるにしろ、どうやって撮影したのかと思わせる凄惨な描写の連続である。

冒頭の20分の上陸シーンを見るだけで、映画一本分の価値がある。

まあともかく、いま米軍もロングビーチで正念場を迎えていた。

合衆国史上はじめて、敵兵に国土への上陸を許すかどうかの瀬戸際である。

正規兵、民兵を問わず、猛然な闘志を燃やし始めたのは当然だった。

少數残つた重砲、各種野砲、迫撃砲が満を持して、日本軍上陸用舟艇が接近するのを待ち構えていた。

機銃座も十字線を形成して、待ち構えていた。

日本軍も、それは承知のうえである。

しかし、ここにひるんでは遙々太平洋を越えてやってきた甲斐がない。

かくして、両者の猛烈な闘志が激突する修羅場が出現した。

日本軍の上陸用舟艇をじゅうぶん引き付けておいてから、米軍指揮官たちは

「撃て！……！」と絶叫した。

米軍の持つあらゆる火器が火を吐いた。

たちまち、砲弾が命中してひっくり返る大発。

宙に舞う兵士たちが続出した。

その兵士たちの手足は、ぱらぱらにちぎられていた。

まさに地獄図である。

それを見て、頭上の母艦機が敵陣に機銃掃射をくわえる。

艦爆までやってきて、爆弾を叩きつけた。

さすがに米軍の反撃はゆるみ、その隙に残った大発は、ビーチに殺到した。

上陸作戦といつものば、上陸するときがもつとも危険である。

いわば、裸の身を敵にさらすからである。

狼の大群に羊の大群が立ち向かうようなものだ。

もつと言えば、美少年を痴女の集団に立ち向かわせるようなものだ。

後者の結果は……

まあ、想像にお任せします。

大発が各ビーチに乗り上げ、前扉がぱたりと前に倒れ、どつと兵士たちを吐き出した。

この前扉をもつのが大発のすぐれた点である。

LCPもそのまま真似をした。

重機をもつた兵士たちが散らばって、腹ばいになり、援護態勢をとるなかを兵士たちは軽機を抱えて突撃する。

しかし、そこに米軍は最後の反撃を試み、再びあらゆる銃砲火が集中した。

兵士たちは凶弾に倒れていく。

この様子を見て、上空を旋回していた支援の富嶽が降下してきて、得意の掃射を敵陣に加えたからたまらない。

以前に、一度これを味わったことのある米兵の戦意はここにおいて崩れ、指揮官の制止も振り切つて陣地を放棄した。

なにしろ、35ミリチタン被覆爆裂弾を1発浴びれば、人体など吹っ飛んでしまうのである。

ここに米軍防衛線は、ビーチ全線において大きなほこりびがいくつも生じ、日本兵はそこに突入した。

最前線が崩壊したという報告を受け、ブラッデレーは、やむなく第2線への後退を命じた。

ロサンゼルスはただつ広く平坦な町で、高層ビルといえばダウンタウンにしかない。

ブラッデレーはコロシアム、映画スタジオ、ホテル、南カリフォルニア大学などに抵抗拠点をつくるよう命じた。

残存戦車と重砲をここに配置した。

また市街北部にあるグリフィス・パークには重砲を運び上げ、砲台とするように命じた。

高地から撃ち下ろす弾は、すごいぶる威力があるので、日本軍もこれには閉口するだろう。

このとおり、ようやく内地の陸軍基地から爆撃機が自爆攻撃にやつてきたが、全機叩き落とされた。

なにしろ、日本機は18500機という膨大なもので、それに富嶽戦略空軍が加わっている。

旧式の陸軍機がかなうはずもなかつた。

その間に、日本軍は続々と上陸、フリーウェイ405線までに進出した。

その兵力は陸軍10個師団、第七独立機動艦隊の1個師団。

強固な橋頭堡を築くのに十分である。

しかしこまだ沖合いの輸送船団には、さらに陸軍10個師団と20式重戦車10個師団が上陸を待ち構えている。

これらの輸送船団は任務を果たすと、ハワイに戻り、後続の陸軍30個師団、25式重戦車10個師団を運んでこなければならないので、すこぶる忙しい。

ロサンゼルスでは、その日1日かけて、日本軍は上陸を完了。

ロサンゼルスの海岸線一帯に、強力な橋頭堡を築いた。

特殊工作艦がハーバーに入り、20式重戦車10個師団と重砲を揚陸させた。

これで、本格的にアメリカ本土上陸を果たしたといつていい。

上陸作戦が成功するか否か、その確率は大抵は半々となつていて、上陸作戦が成功するか否か、その確率は大抵は半々となつていて、
決して楽観視してはいなかつた。

なにしろ不敗の大國、アメリカに上陸するという前代未聞の大作戦
だつたからである。

日米軍司令部双方にとつて、史上最長の1日となつたが、ブラッド
レー中将から電話がかかり、

「ロサンゼルス海岸線に上陸を許し、橋頭堡を築かせてしまつた」
といふ報告を聞いたマーシャル陸軍参謀総長は、ブラッドレーを怒
鳴りつけたいのをやつといらえた。

かわりに命令を下すしかなかつた。

「上陸させてしまつたものは、仕方がない。だが、なんとしてもロ
サンゼルスを死守しろ。各州から州兵を送る。ロサンゼルスの包囲
網をそれによつて完成せよ。鋼鉄の輪をつくり、敵をじりじりと締
め上げるのだ。」

マーシャルの言葉は勇壮だが、日本軍の勇猛さと実力を知つてゐる
ブラッドレーは、素直に分かりましたという気にはなれなかつた。

「州兵では、その任務はまことに心もとないですね。正規師団の補

充はまだですか?」

「……つむ、もう一ヶ月の時間が必要だ」

そう答えるながらマーシャルは、ノーフォークに足止めを食らつて、いるパットン軍を派遣する事を考えていた。

パットン軍はイギリス奪還の為にノーフォークに集結していたが、デーモン艦隊の攻撃により、ノーフォークは壊滅。

パットン軍はイギリスへの足を失つた。

そのパットン軍を使わないのは宝の持ち腐れだとマーシャルは考えていた。

「分かりました。全力をつくします」

ブラッヂレーとしては、やうやくほのかはなかつた。

「後書き」「一ナーハ

作者

「どうも、皆さん。お久しぶりの後書き「一ナーハ」です。」

早紀

「全く、さほりやがつて。罰だ！…！」

作者

「何で久しぶりなのに51センチ砲が……」

早紀

「死ねえ～～～」

作者

「ギャ～～～～」

沙織

「早紀さん、作者さんを始末したら何の為の後書き「一ナーハ」か解らないじゃないんですか？」

早紀

「大丈夫よ。この作者はメモに書いているはずだから。」

沙織

「やつなんですか？」

早紀

「やつよ。あつ、『れだこれだ。』」

沙織

「何が書いてありますか？」

早紀

「え～と、まずは読者の皆様に。次回からは陸戦がメインになりますから、海軍からは離れます。その為、艦魂ではなく沙織様、車魂が本格的に出ます。その事をよろしくお願ひします。それと、今回のように次回からも説明文モドキになりますが、『ア承ください。』だつて」

沙織

「やつた、私がメイン。」

早紀

「沙織ちゃん！――！」

沙織

「は――！」

早紀

「私の前でメインになつたからつて喜びやがつて――――！」

沙織

「すいません――！」

早紀

「許さない！――！」

沙織

「いや~~~~~」

亜由美

「まあ、これからもよろしくお願こします。」

第41話 ロンケヒーチ上陸（後書き）

次回は沙織様とM4シャーマン、M26パーシングが激突です。

第42話 25式重戦車VS・M26パーシング

1943年7月20日

マーシャルは約束どおり、中西部の州から州兵を書き集め、ロサンゼルスに送った。

パットン軍も大陸横断鉄道を爆走してロサンゼルスに到着した。

しかし、マーシャルのいう日本軍を締め上げる鋼鉄の輪を形成するにはほど遠い実力だった。

たしかに、州兵のもとなつた民兵はアメリカのよき伝統だが、なにしろウィークエンドしか訓練しない。

正規兵とはまつたく鍛え方がちがう。

おそらく、富嶽に掃射されたら仰天して、逃げ出すだろう。

いっぽう日本軍は16日から20日の4日間に残りの陸軍30個師団と25式重戦車10個師団をロサンゼルスに揚陸させた。

第七独立機動艦隊の1個師団は陸戦隊2個大隊と25式重戦車2個大隊で1個師団と言っていた為、25式重戦車10個師団をその指揮下に入れた。

作戦は、ロサンゼルスを突破したのちにラスベガスにまずは進出する予定である。

ここにはいくつかの飛行場があるので、それを拡張して、基地航空

隊を置く。

また富嶽の中継基地とする予定である。

このあたりは砂漠だから、土地はこゝりでもある。

もともと、ラスベガスはガラガラ蛇と少數のインディアンしか住んでいない不毛の土地だった。

このラスベガスを占領したのちに、カリフォルニア半島制圧を行うのである。

その後、東部空襲を徹底的に行い最終的には原爆を投下する。

これが全体的なアメリカ占領作戦の骨子である。

日本軍が上陸するとあらためて戦闘序列を整えなおし、巨大な日本軍の兵力が米軍の第一防衛線……事実上、最終防衛線をつぶしにかかった。

今回は25式重戦車、155ミリ榴弾砲が主たる武器で、艦載機と富嶽がそれを支援していた。

ブラッドレーは、

「敵の前線に戦車が現れました」

とこう報告を受け、ブラッドレーは胸騒ぎをおぼえた。

田中戦争やハワイ戦において、日本軍は強力な戦車を投入してきた。そして、M26パーシングといつ重戦車を開発してパットン軍に与えていたのだ。

ブラッヂレーは半信半疑ながらパットンの勝利を願った。

ロサンゼルス市街

パットンは全軍をロサンゼルス市街に拡散して配置していた。

「日本軍の動向はどうだ？」

パットンが聞いた。

「はっ。もうすぐ報告が入ると思います。」

参謀が答えた。

「そうか……」

パットンが言つた、

「中将！！！！大変です！！！！」

伝令が司令部に駆け込んできた。

「何だ？」

パットンが聞くと、

「敵の戦車は我が軍のM26パーシングよりも巨大な戦車です。」

伝令が答えると、

「私より巨大！？」

少女が言った。

「そうみたいだな、アリア。」

パットンが笑いながら言つと、

「バカ！！！！私より大きいことは装甲が厚く、巨大な砲を積んでいることよ。」

アリアが言った。

「確かに。」

パットンは続ける、

「ともかく、重砲でその戦車を叩け。」

「了解いたしました。」

伝令は勢いづき飛び出していった。

「全く、呑気なものよ。私は負けても工事に戻るけどあなたは死ぬのよ。それを覚えておいて。」

ああ、このアリアはM26パーシングの車魂です。

「大丈夫だよ、アリア。俺は死ない。作者がそう言っていた。なんでもドイツとどうたらかんたらつて。」

パットンが反論した。

「そう、それならいいわ。」

アリアは答えた。

「ハハハ、よし作者。説明に戻つてくれ。」

……私が書いてるんですけど。

では。

日本軍も重砲で応戦、しばらくは壮絶な砲撃戦となつた。

この小説のなかの日本軍は弾惜しみをしない。

史実の日本軍は、弾の数がかぎられており、1発ずつ數えながら擊つような情けない有様だったが、鈴木商店やその他軍需産業が各種砲弾の大量生産を行つており、湯水の「」とく使える。

「」を先途に撃ちまくつた。

米軍も、もとより物量においては劣らない。

数時間にもおよぶ砲撃戦となつた。

ブラッドレーは、西海岸のすべての重砲をすでにロサンゼルスに移動させていたので、当然である。

敵の反撃が執拗なので、業を煮やした松井司令部では、富嶽の出撃を要請した。

ハワイから富嶽爆撃機バージョン50機が出撃、5時間ほどで到着すると、敵の砲兵基地めがけて1トン徹甲弾をぱらまいた。

これは効いた。

1トンもの爆弾を食らひ、直径30メートル以内のものすべてのものが消滅してしまつ。

それほど威力のあるものである。

敵の砲撃が沈黙すると、戦車隊を先に立てて、各師団は進撃を開始した。

山下大将の指揮する第1軍はダウンタウン。

牟田口中将の指揮する第2軍は市街北部。

佐藤中将の指揮する第3軍は、市街南部。

朝来少将の指揮する第七独立機動艦隊師団は、敵戦車の撃滅。

これにより、全市を制圧する肚である。

ロサンゼルスは、衛星都市に囲まれているが、それらの制圧は次の段階となる。

米軍は、まさにその衛星都市を拠点としたのである。

パサデナ、グレンデール、アナハイム、サンタアナ、ノースハリウッドといった街である。

米軍もM26戦車を繰り出して抵抗した。

朝来師団

今回は25式重戦車10個師団も指揮下に入れた朝来師団は敵戦車の撃滅を目指してロサンゼルスへ進撃していた。

朝来師団長車

朝来は他の兵と同様、戦車に乗つて指揮を行つていた。

「師団長、敵の新型です。」

車長が言つた。

「ふむ、日米新型対決か。」

朝来が言つた。

「勿論、私が勝つけどね。」

沙織が言つた。

「そうだな。」

朝来が言つた。

「敵発砲。」

車長が言つた。

「うむ。」

朝来が言つと、

カーン

乾いた音と共に敵弾が弾かれた。

「ふう、ちょっと痛かつたかな。」

沙織が言った。

「装填手、砲弾装填。弾種、徹甲弾。」

「徹甲弾、了解。」

「砲手、右端の戦車をねらえ。目標、砲塔基部」

矢継ぎ早に命令を下す、朝来。

「撃て！……！」

耳をつんざく音と共に徹甲弾がM26がけて発射された。

ドガアアアアアアアン！！

ものの見事にM26の砲塔は吹っ飛んだ。

凄まじい命中率だ。

流石は三式射撃レーダーを小型化して搭載しただけのものである。

「砲手、見事だ。」

朝来が言つた。

「ありがとうございます。」

砲手が礼を言ひつ。

「私つて強いのね。」

沙織が言つた。

「ああ、もちろんだ。」

朝来が言ひつ。

25式重戦車はその後、M26戦車を壊滅させた。

パットン軍

パットンは例によつて機銃装備のジープに乗り、指揮をとつていた。

「何て奴だ。日本の新型は化け物か！――！」

パットンは叫んだ。

パットンには田の前の光景は信じられなかつた。

アメリカの希望、アメリカ最大最強のM26パーシング重戦車が目の前で次々と壊滅したのだ。

そりやそうだ、ドイツ軍との戦いの為にT10重戦車を元に考えたんだ。

M26パーシングなどおもひや當然だ。

すくなくとも、25式重戦車とM26パーシングでは25式重戦車の方が、2世代は進歩していた。

戦車の世界では、2世代の性能格差は決定的で勝負にならない。

1世代ですらそうである。

湾岸戦争で、イラク軍のソ連製のT70がアメリカの最新鋭エイブラムスに一方的に撃破されたことを見ても分かる。

「悪夢だ。」

パットンは言つた。

「日本とは戦争していても意味がない。早期講和だ。」

パットンはそう考えていた。

まあ、なにはともあれロサンゼルスは日本軍の手に落ちた。

次なる目標は、ラスベガス

第42話 25式重戦車VS・M26パーシング（後書き）

M4シャーマンは降板させました。

次回はラスベガス攻略戦です。

お楽しみに。

第43話 急激な方針転換

昭和18年7月25日

皇居にて緊急の会議が開かれた。

「今日はこゝきなり集まつてもらひすまない。」

近衛が言った。

「ワシら鈴木商店のプロジェクトチームが今後のアメリカ進行について検討していたが、ある結論に至つたのじゃ。」

金子は続ける。

「その結論は、原爆投下によるアメリカとの早期講和じや。」

「何ですつてー?」

山本が言った。

「どうぞ」と何ですか?」

栗林が聞いた。

「つむ、それは今から説明しよ!」

金子はそつと口を開き、高畠に説明を始めさせた。

「我が社としましては、アメリカ本土進行作戦が決定した時点で、日本軍の被害をシミュレーションしてみました。」

高畠が資料を配る。

「（）覗ください、アメリカの被害は別に気にしませんが、日本軍の被害は30万と結果が出ました。」

「しかし、戦争だから仕方ないのではないか？」

栗林が言った。

「確かにそうですが、作者はアメリカだけを叩き潰そうと考えています。そこで日本軍にも30万の被害が出れば意味がない。その為、急激な方針転換をしなければいけなくなりました。」

高畠が言った。

このショーケーションは私が本当にやりました。

アメリカの兵力と日本の兵力、武器の差、両軍の士気、地形、補給線の維持など考え方だけの物を数値化して図上演習を行い導きました。

サイコロを振つて決めるといつ。

結構楽しかったです。

「その、急激な方針転換とはなんだね？」

豊田が聞いた。

「はい、アメリカ本土への原爆投下です。」

高畠が言った。

「何！？ 原爆投下だと…？」

山本が叫んだ。

「そうです。ヒューストンにでも落としてやればアメリカも講和を考えますよ。」

高畠が言った。

「確かに、地上戦を行いながら東部を目標するのは骨が折れるからな。」

山本が言った。

「そうです。計画は、明日の正午に陛下にアメリカに対し降伏勧告を行つて貰います。それで、6時間以内に降伏を受け入れなければヒューストンに原爆を投下すると言うのです。そして、6時間以内に降伏しなければヒューストンに原爆投下。そうすればアメリカも日本が本気だと考えます。そして、更に6時間以内に降伏しなければ、今度はワシントンに原爆を投下すると言つのです。そうすれば、アメリカも降伏を受け入れますよ。そうすれば万事うまくいきます。」

「

高畠が言った。

「朕は、もはや戦争なぞ望まん。例え原爆を使おうとも戦争を早期に終結させるのだ。ヨーロッパの方もナチスが占領しているがヨーロッパも原爆を投下して終結させるのだ。スターインとはもう合意してある。」

天皇裕仁が言った。

「お上、スターインと合意してあるとはどういう事でしょつか？」

山本が聞いた。

「ああ、アメリカと講和した後にヨーロッパへ進行する時にソ連経由でモスクワ奪還を支援するのだよ。」

天皇裕仁は続ける。

「ヤクーツクのスターインと会談した時に、モスクワ大公国に同時に進行するのを決定したんだよ。」

「しかし陛下、関東軍に余裕はありません。」

栗林が言った。

「分かつていい。ハサだよ。」

天皇裕仁は言った。

「エサですか。」

栗林が言った。

「そうだ、その変わり樺太全土とレナ川の東部全土を貰うとの条件でだ。」

天皇裕仁は続ける。

「勿論、さつきも陸相が言つたように関東軍に余裕はない。しかも鈴木商店のシミコレー・ショーンの結果、相当数の被害が出る。そこでドイツ第三帝國の首都ベルリンに原爆を投下して一気にヨーロッパに置ける、ナチスの支配を瓦解させるわけだ。」

「何と言つ、壮大な計画。太平洋戦争だけでなく、第一次世界大戦も一気に終結させる計画とは。」

山本が言つた。

「陛下、それでは、第八特務機動艦隊はどうなるのですか?」

豊田が聞いた。

「勿論、引き揚げだ。第一部で活躍出来るだろ?」

天皇裕仁が言つた。

「了解いたしました。」

豊田が答えた。

「よし、明日の準備を始めよう。」

近衛が言った。

太平洋戦争、第二次世界大戦は急速に終結に向けて動きだした。

第43話 急激な方針転換（後書き）

色々ありますが、第一部を上手いこと終わらせて第一部に入ります。

最初は第七独立機動艦隊～神出鬼没！！米海軍の悲劇～
は書こうと思ってなかつたんです。
いきなり、第

三次世界大戦を書こうとしたんですが、太平洋戦争も書いたらいい
んじゃないかな？

と考えて書き始めました。その結果見事
に詰まりました。第一部は年表まで作り完璧に仕上げたなんですが、
太平洋戦争は何も考えずに書き始めました。誠に申し訳ありません。
しかしながら、第一部は完全に仕上げるつもりです。第一部は期待
してください。すいませんでした

第44話 原爆投下

昭和18年7月26日正午

ハワイ王国からアメリカ全土に天皇裕仁の声が響き渡った。

先日の会議のあと、NHKにて降伏勧告の放送が録音されたのだ。

それをハワイ王国に空輸。

今の放送に至る。

『大日本帝國は米国との戦争をこれ以上は望まぬ。帝國としては米国が降伏するならこれ以上の攻撃は行わない。今から6時間以内に降伏するなら早急に講和会議を開きたい。しかしながら、6時間以内に降伏しないならヒューストンは悲劇に見舞われるだろ?。帝國はそれを望まない。早急に降伏される事を望む。』

ざつくばらんに書つとこれが放送の内容だ。

これが延々とアメリカ全土のラジオから流れるのだ。

ワシントンDCホワイトハウス

「何とかなんのか!!--」の忌まわしい放送は--..」

トーラーが言った。

「やう言われましても、作者が決めてますので。」

ハルが言った。

「やうだな。」

トーラーは諦めた。

「大統領、どうしますか？」

ハルが聞いた。

「分かつてゐるだう、こんな放送は無視しろ！……！」

トーラーが叫んだ。

「了解いたしました。」

ハルはやうと、部屋を出でていった。

6時間後

「大統領！――ヒューストンが消滅しました！――！」

ハルが飛び込んできた。

「ちょっと待て、消滅！？」

トルーマンが聞いた。

「多分、原爆が投下されたかもしません。」

ハルが言った。

「多分じゃないだろう――消滅したんだぞ――原爆に決まつてるだろう――！」

トルーマンが怒鳴った。

「すいません！――！」

ハルが謝った。

すると、

「大統領！――ラジオをお聞きください――！」

秘書官が飛び込んできた。

「ラジオか、」

トルーマンはそう言つと、ラジオのスイッチを入れた。

『残念ながらトルーマン大統領は降伏を受け入れなかつた、その為にヒューストンは原爆により消滅した。今より更に6時間猶予を与えるから、降伏を受け入れるよう』に。もし、降伏を受け入れなければワシントンDCに原爆が投下されるだらう。』

「ツ――！」

トルーマンは唇を噛みしめた。

「大統領――！議会が早急に降伏を受け入れるよう言つています。」

秘書官が電話を手にしながら言つた。

「大統領、潮時かもしだせん。」

ハルが言つた。

「……」

トルーマンは考える。

「大統領！！！」

ハルが言つ。

「……分かつた。降伏を受け入れよう。日本に伝えてくれ。」

トルーマンが言つた。

「了解いたしました。」

ハルが言つた。

ここに、太平洋戦争は終結を迎えた。

時に、1943年7月26日の事であった。

第44話 原爆投下（後書き）

次回が最終話です。

稿します。

0時までに投

最終話 日米講和成る

昭和一八年八月一日

遂に、日米講和が実現した。

連合艦隊と第七独立機動艦隊はチエサピーク湾にいた。

「やつとここまで来たな。」

小沢が言った。

「さうね。私達の戦いは終わつたのね。」

早紀が言った。

「嫌、お前の戦いはまだまだ続くぞ。」

小沢が笑いながら言った。

「あつ、さう言えばそうね。あの馬鹿が第一部でも登場させるつて
言つてたわね。」

「さう馬鹿呼ばわりするな。」

「馬鹿なものは馬鹿なの！――！」

「おお、怖い怖い。」

「けど、何か嬉しい気持ちもあるけどね。」

「どう言つた事だ?」

「だつて二〇三五年よ。楽しみじゃない。」

「そうか、艦魂はいいな。」

「けどそうなると、軽く七十歳は越えてるわね。」

「ハハハ、おばあちゃんだな。」

「なつ……。」トライに向かつてなんて失礼な。」

「おやつ?自分はトイだと思つてるのか?」

「当たり前よ。」

「これは失礼。おばあちゃん。」

「この馬鹿……。」

「冗談だよ、冗談。」

「冗談でも許さん……。」

「早紀さん……落ち着いてください。」

「沙織、あんたもなの。」

「大丈夫です、私め第一部に登場しますから。私もおばあちゃんですよ。」

「沙織……」

「早紀さん……」

「おい、作者殿。早く講和会議を初めてくれ。」

了解いたしました。

では、

近衛首相、豊田海相、栗林陸相、金子大番頭は連合艦隊に乗り込み
チエサピーク湾に空間移動した。

そこからアメリカの用意した車に乗り、ホワイトハウスでの講和会
議に望むわけだ。

ワシントンDCホワイトハウス

日米講和会議

太平洋を挟んで激闘（？）を繰り広げた大国が遂に講和会議のテーブルに付いた。

しかし、未だにアメリカ国内では日本の恫喝によつて仕方なく行つただけだという輩が多数いる。

まあ、それはあながち間違つてはいないが……

大日本帝國

近衛首相、豊田海相、栗林陸相、金子大番頭、山本連合艦隊司令長官。

アメリカ合衆国

トルーマン大統領、ハル国務長官、ノックス海軍長官、スチムソン陸軍長官、モーゲンソー財務長官。

日米からは以上の者が出席した。

「まずは、貴国の国民を大量に殺戮した事に謝罪いたします。」

近衛は会議の冒頭に謝罪した。

確かにこの会議が始まるまでに日本は富嶽戦略空軍でアメリカ合衆国全土に度重なる空襲を行つていた。

ニューヨーク・ボストン・シカゴ・ニューオーリンズ・サンアントニオ・サンディエゴ・ロサンゼルス・サンフランシスコ・シリコン

バレー・ポートランド・シアトル・アンカレジ・セントルイス・カ
ンザスシティ・ナッシュビル・アトランタ・ヒューストン等は空襲
により壊滅していた。

死者は100万を遥かに越え148万人となつた。

さすがに首都は止めておこうとなつたが、海軍省・陸軍省は爆撃し
た。

絨毯爆撃を行つた結果だ。

近衛の謝罪にトルーマンは困つた。

アメリカは日本に敗戦したのにその国の首相が謝罪したのだ。

そりや困るわ。

「いやいや、頭を上げてください。この会議はそれより、日本とア
メリカの講和がメインなんですから。」

トルーマンが言った。

「確かにそうでした。では会議を始めましょう。」

近衛が言った。

「まずは、今回の戦争責任についてですが。」

「戦争責任ですか……」

「大統領、仕方ありません」

「まあそうだな、國務長官の言つ通りだ。」

「戦争責任ですが、それはお国の決断に任せます。」

「本当ですか！？」

「勿論です、戦勝国が敗戦国を裁く権利はありません。もしそうすれば、出来レースです。」

「日本は寛大ですね」

「戦争責任は任せるとして占領統治は残念ながら行います。」

「それは仕方ないですね。大統領としてそれは受け入れます。」

「ありがとうございます。次は日米の間で経済の活性化を目指したいと思います。」

「よつはな日米自由貿易の確立と言つわけですね。」

「はい、そうです。日米の資本と英國の資本で世界経済を牽引していくと言つ事です。」

「英國やヨーロッパはどうなるんですか？」

「勿論、解放します。」

「どうやつて？」

「ドイツ第三帝國の首都ベルリンに原爆を投下します。ドイツ第三帝國はヒトラー一人の支配下になっています。ヒトラーさえ殺せば瓦解するでしょう。その混乱している時にイギリスやノルマンディーに上陸すれば奪還は可能です。モスクワ大公国もソ連が占領しますから簡単なものです。」

「何と、原爆ですか。確かにドイツ第三帝國はヒトラー一人の支配下ですから奴さえ殺せば終わりですね。」

「そうです。」

「ありがとうございます。」

「いえいえ。」

こうして、日本とアメリカの間に講和が成立した。

講和条約の内容は

- 一・大日本帝國はアメリカ合衆国を占領統治する。
- 一・大日本帝國とアメリカ合衆国は自由貿易を確立する。
- 一・大日本帝國とアメリカ合衆国は相互防衛条約を締結する。

まあ簡単にはこれくらいだ。

その他は第一次世界大戦が終結しての東京国際平和会議で決められた。

アメリカ合衆国は大日本帝國の資本奪取に向けて、進出してくるが鈴木商店の前に夢は打ち砕かれる。

まあ、それは第一部で語るとして。

第一部は最初の方は1943年から2034年までの歴史を書くのでそこで。

では、第一部はこれまで。

第一部、第七独立機動艦隊～神出鬼没！！米海軍の悲劇～完

「後書き」「一ナーフ

早紀

「そこへ座れ、馬鹿作者。」

作者
「はい」

亜由美

「おまえは自殺志願者か?」

作者
「いいえ……滅相もない。」

喜恵

「けど、この暴挙は自殺行為ですよ。」

作者

「……」

由香

「死ね」

綾夏
「死ね」

理華
「死ね」

望
「死ね」

愛美
「死ね」

裕香
「死ね」

志保
「死ね」

千穂
「死んでください」

由美
「死ね」

亜紀
「死ね」

美紀
「死んでみよ」

美香

「死ね」

渚

「死ね」

舞

「死ね」

乱

「死ね」

華

「一度死んでいただと幸いです」

レナ

「死んで」

リングダ

「死ね」

ルリ

「死ね」

ルナ

「死ね」

作者

「レナ様、リングダ様、ルリ様、ルナ様最後の最後に登場ですね。」

早紀

「では、作者。覚悟は出来るな。」

「何のですか？」

早紀

「第一部を簡単に終わらせた事だ。」

作者

[REDACTED]

早經
「覺悟」。

作者

「待つて下さい。話しあえばわかります。」

「分からん！――！」

作者

早紀

「あつ！・！・！・！」

早紀

「覺悟しろ」

「すいません……」

早紀

「勿論——！」

作者

沙織

「作者さんがリンチされてますのでわたしから。」

沙織

「作者さんは何故か急に第一部を書くんだったて言いだして終わらせました。」

沙織

「確かに太平洋戦争編は思い付きで書いていたみたいですが、まさかここまで続くとは思ってなかつたみたいです。」

沙織

「何だかんだと、今まで生み出してくださったしました。」

沙織

「もともと第一部が第一部だったみたいですね。」

沙織

「心配なく、明日には第一部を投稿すると張り切っていますよ。」

沙織

「作者さんは太平洋戦争も好きですが、書くのなら現代戦が良いみたいですよ。」

沙織

「まあ、行き当たりばつたりで書いていたみたいですね。」

沙織

「まあ、行き当たりばつたりで書いていたみたいですね。」

「ナビ、第一回は早く続けるハヤヒトコモア。」

沙織

「予定では100部は超すと。」

沙織

「まあ、あの作者さんですかりじつなる事や。」

沙織

「ではやるやうにねぐらうで。」

沙織

「明日こながやんと投稿しますので。」

沙織

「今後ともよろしくお願いします。」

最終話　日米講和成る（後書き）

明日、第一部を投稿いたします。

誠に勝手ながら、これを持って第一部完結とさせていただきます。
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3128f/>

第七独立機動艦隊～神出鬼没!!米海軍の悲劇～

2010年10月11日02時01分発行